

茨城県教育財団文化財調査報告第89集

岩井幸田工業団地造成事業  
地内埋蔵文化財調査報告書

姥ヶ谷津遺跡

南開遺跡

平成6年3月

茨城県  
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第89集

岩井幸田工業団地造成事業  
地内埋蔵文化財調査報告書

うば が や つ  
姥 ケ 谷 津 遺 跡  
なん かい  
南 開 遺 跡

平成 6 年 3 月

茨 城 県  
財 団 法 人 茨 城 県 教 育 財 団

# 序

茨城県民福祉基本計画において県西地区は、首都東京などからの産業経済面の影響を受けつつ、工業、住宅を導入する地域としての役割を高め、活力ある地域として発展することが期待されております。

岩井市では近郊整備地帯として、さらに、筑波研究学園都市にも近接している条件を活かし、今後計画的な市街地整備を行う中で、特に工業基盤の確立、先端技術産業の誘致を目的として工業団地の建設計画を進めております。

岩井幸田工業団地造成事業は、以上のような背景をもとに計画されたもので、その予定地内には、埋蔵文化財の包蔵地である姥ヶ谷津遺跡、南開遺跡が確認されておりました。

このたび、財団法人茨城県教育財団は、茨城県と埋蔵文化財発掘調査について委託契約を結び、平成4年10月から平成5年3月にかけて岩井幸田工業団地造成事業地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

本書は、姥ヶ谷津・南開両遺跡の調査成果を収録したものであり、本書が学術的な研究資料としてはもとより、教育、文化向上の一助として活用されますことを希望いたします。

なお、発掘調査及び整理にあたり、委託者である茨城県はもとより茨城県教育委員会、岩井市教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から御指導、御協力を賜りましたことに対し、衷心より感謝の意を表します。

平成6年3月

財団法人 茨城県教育財団  
理事長 磯田 勇

# 例 言

1 本書は、茨城県の委託により、財団法人茨城県教育財団が、平成4年10月から平成5年3月まで実施した、茨城県岩井市幸田地区に所在する姥ヶ谷津遺跡、南開遺跡の発掘調査報告書である。

なお、2遺跡の所在地は次の通りである。

姥ヶ谷津遺跡 岩井市大字幸田字谷津台1,405-1番地ほか

南開遺跡 岩井市大字幸田字南開1,234-1番地ほか

2 姥ヶ谷津遺跡、南開遺跡の調査及び整理に関する教育財団の組織は、次のとおりである。

理 事 長	磯 田 勇	昭和63年6月～	
副 理 事 長	角 田 芳 夫	平成3年7月～	
専 務 理 事	中 島 弘 光	平成5年4月～	
常 務 理 事	本 田 三 郎	平成3年4月～平成5年3月	
事 務 局 長	藤 枝 宣 一	平成4年4月～	
埋 蔵 文 化 財 部 長	石 井 毅 安 藏 幸 重	平成2年4月～平成5年3月 平成5年4月～	
企 画 管 理 課	課 長	水 飼 敏 夫	平成4年4月～(平成2年4月～平成4年3月企画管理課長代理)
	主 任 調 査 員	根 本 康 弘	平成3年4月～平成5年3月
	主 任 調 査 員	川 井 正 一	平成5年4月～
	主 事	杉 山 秀 一	平成4年4月～
経 理 課	課 長	藤 田 和 行	平成4年4月～平成5年3月
	課 長	小 幡 弘 明	平成5年4月～
	課 長 代 理	鈴 木 三 郎	平成5年4月～
	主 任	飯 島 康 司	平成4年4月～(平成3年4月～平成4年3月企画管理課)
	主 事	大 貫 吉 成	平成4年4月～平成5年3月(平成2年4月～平成4年3月企画管理課)
調 査 課	主 事	軍 司 浩 作	平成5年4月～
	課長(部長兼務)	石 井 毅	平成元年4月～平成5年3月
	課長(部長兼務)	安 藏 幸 重	平成5年4月～
	調査第三班長	小 泉 光 正	平成4年4月～平成5年3月
	主任調査員	横 堀 孝 徳	平成4年10月～平成5年3月調査
調 査 員	土 生 朗 治	平成4年10月～平成5年3月調査	
整 理 課	課 長	沼 田 文 夫	平成2年4月～平成5年3月
	課 長	阿 久 津 久	平成5年4月～
	主任調査員	中 村 敬 治	平成5年度整理・執筆・編集

3 本書に使用した記号等については、第3章第1節「遺構及び遺物の記載方法」の項を参照されたい。

4 本書の作成にあたり、近世陶磁器については、財団法人出光美術館学芸員の荒川正明氏、縄文式土器については、茨城県立歴史館主任研究員の斉藤弘道氏に御指導をいただいた。炭化材の分析については、パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。

5 発掘調査及び整理に際して、御指導、御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

## 6 遺跡の概要

遺 跡 名	姥ヶ谷津遺跡・南開遺跡				
フリガナ	ウバガヤツイセキ・ナンカイイセキ				
副 題	岩井幸田工業団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書				
シ リ ー ズ	茨城県教育財団文化財調査報告第89集				
著 者	中村 敬治				
編 集 機 関	財団法人 茨城県教育財団				
発 行 機 関	財団法人 茨城県教育財団				
住 所	〒310 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2				
発 行 日	1994（平成6）年3月31日				
所 収 遺 跡	市町村	コ ー ド	北 緯	東 経	標 高
姥ヶ谷津遺跡	岩井市	08218-37	36° 03' 07"	139° 55' 30"	18m
南開遺跡	岩井市	08218-38	36° 02' 59"	139° 55' 00"	18m
所 収 遺 跡	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物	
姥ヶ谷津遺跡	弥生時代後期 古墳時代前期 古墳時代中期 近 世	住居跡1軒 住居跡12軒 住居跡4軒 塚 3基		土器, 土製品, 石製品 土器, 土製品 (舟形土製品), 石製品 土器, 土製品 陶器	
南開遺跡	近 世	塚 1基		陶器, 土師質土器, 古銭	

# 目 次

序

例 言

第1章 調査経緯 .....	1
第1節 調査に至る経過 .....	1
第2節 調査方法 .....	1
1 地区設定 .....	1
2 基本層序の検討 .....	2
3 遺構確認 .....	3
4 遺構調査 .....	3
第3節 調査経過 .....	4
第2章 位置と環境 .....	6
第1節 地理的環境 .....	6
第2節 歴史的環境 .....	7
第3章 遺構・遺物の記載方法 .....	12
第1節 遺構・遺物の記載方法 .....	12
第2節 表の見方について .....	14
第4章 姥ヶ谷津遺跡 .....	17
第1節 遺跡の概要 .....	17
第2節 遺構と遺物 .....	21
1 竪穴住居跡 .....	21
2 土坑 .....	73
3 塚 .....	81
4 溝 .....	84
5 遺構外出土遺物 .....	86
第3節 まとめ .....	95
第5章 南開遺跡 .....	98
第1節 遺跡の概要 .....	98
第2節 遺構と遺物 .....	99
1 塚 .....	99

第3節 まとめ .....103

付章 姥ヶ谷津遺跡から出土した炭化材の種類 .....107

写真図版

## 插图目次

第1图	調査区呼称方法概念图	1	第29图	第9号住居跡炉実測图	45
第2图	姥ヶ谷津遺跡土層柱状图	2	第30图	第9号住居跡出土遺物実測图	45
第3图	南開遺跡土層柱状图	3	第31图	第10号住居跡実測・遺物出土位置图	47
第4图	周辺遺跡分布图	10	第32图	第10号住居跡出土遺物実測图	48
<b>姥ヶ谷津遺跡</b>					
第5图	姥ヶ谷津遺跡地形图	18	第33图	第11号住居跡実測・遺物出土位置图	50
第6图	姥ヶ谷津遺跡全体图	19~20	第34图	第11号住居跡炉実測图	51
第7图	第1号住居跡実測图	22	第35图	第11号住居跡出土遺物実測图	52
第8图	第1号住居跡遺物出土位置图	23	第36图	第12号住居跡実測・遺物出土位置图	54
第9图	第1号住居跡出土遺物実測图(1)	24	第37图	第12号住居跡出土遺物実測图	55
第10图	第1号住居跡出土遺物実測图(2)	25	第38图	第13号住居跡実測・遺物出土位置图	57
第11图	第2号住居跡実測・遺物出土位置图	27	第39图	第13号住居跡出土遺物実測图	58
第12图	第2号住居跡貯藏穴・炉実測图	28	第40图	第14号住居跡実測・遺物出土位置图	59
第13图	第2号住居跡出土遺物実測图	29	第41图	第14号住居跡炉実測图	60
第14图	第3号住居跡実測・遺物出土位置图	30	第42图	第14号住居跡出土遺物実測图	61
第15图	第3号住居跡炉実測图	31	第43图	第15号住居跡実測・遺物出土位置图	63
第16图	第3号住居跡出土遺物実測图	31	第44图	第15号住居跡出土遺物実測图	65
第17图	第4号住居跡実測图	32	第45图	第16号住居跡実測・遺物出土位置图	66
第18图	第4号住居跡出土遺物実測图	32	第46图	第16号住居跡出土遺物実測图	68
第19图	第5号住居跡実測图	34	第47图	第16号住居跡出土遺物拓影图	69
第20图	第5号住居跡出土遺物実測图	34	第48图	第17号住居跡出土遺物実測图	70
第21图	第6号住居跡実測・遺物出土位置图	36	第49图	第17号住居跡実測・遺物出土位置图	71
第22图	第6号住居跡出土遺物実測图	37	第50图	土坑実測图(1)	76
第23图	第7号住居跡炉実測图	38	第51图	土坑実測图(2)	77
第24图	第7号住居跡実測・遺物出土位置图	39	第52图	土坑実測图(3)	78
第25图	第7号住居跡出土遺物実測图	40	第53图	第8・68号土坑出土遺物実測图	79
第26图	第8号住居跡実測・遺物出土位置图	42	第54图	第1号塚実測图	81
第27图	第8号住居跡出土遺物実測图	42	第55图	第2号塚実測图	82
第28图	第9号住居跡実測・遺物出土位置图	44	第56图	第3号塚出土遺物実測图	83
			第57图	第3号塚実測图	84
			第58图	第1号溝実測图	85

第59図	遺構外出土遺物拓影図(1)	89
第60図	遺構外出土遺物拓影図(2)	90
第61図	遺構外出土遺物拓影図(3)	91
第62図	遺構外出土遺物実測図(1)	92
第63図	遺構外出土遺物実測図(2)	93
第64図	遺構外出土遺物実測図(3)	94
第65図	時期別住居跡配置図	97

## 南開遺跡

第66図	南開遺跡全体図	98
第67図	第1号塚実測図	100
第68図	第1号塚出土遺物実測・拓影図	101
第69図	第1号塚供養塔拓影図	102

## 表 目 次

表1	姥ヶ谷津遺跡・南開遺跡周辺遺跡 一覧表	11
表2	姥ヶ谷津遺跡竪穴住居跡一覧表	72
表3	姥ヶ谷津遺跡土坑一覧表	79

## 写 真 目 次

### 姥ヶ谷津遺跡

PL1	姥ヶ谷津遺跡調査終了後全景	PL10	第14号住居跡, 第14号住居跡遺物出土状況
PL2	第1号住居跡, 第1号住居跡遺物出土状況		
PL3	第2号住居跡, 第2号住居跡遺物出土状況, 第3号住居跡	PL11	第14号住居跡遺物出土状況, 第15号住居跡, 第16号住居跡
PL4	第3号住居跡遺物出土状況, 第4号住居跡, 第4号住居跡遺物出土状況	PL12	第16号住居跡遺物出土状況, 第17号住居跡
PL5	第4号住居跡遺物出土状況, 第5号住居跡, 第5号住居跡遺物出土状況	PL13	第2~7・30・50号土坑
PL6	第6号住居跡, 第7号住居跡, 第7号住居跡遺物出土状況	PL14	第52・66・67・68・70・72・73号土坑, 第73号土坑遺物出土状況
PL7	第8号住居跡, 第8号住居跡遺物出土状況, 第9号住居跡遺物出土状況	PL15	第1号溝, 第1号溝土層断面, 第1・2号塚土層断面, 第3号塚トレンチ, 第3号塚遺物出土状況
PL8	第10号住居跡, 第11号住居跡, 第11号住居跡遺物出土状況	PL16	第1号住居跡出土土器
PL9	第12号住居跡, 第12号住居跡遺物出土状況, 第13号住居跡	PL17	第1・2・3号住居跡出土土器
		PL18	第4・5・6号住居跡出土土器
		PL19	第7・8・9号住居跡出土土器

- |      |   |      |  |
|------|---|------|--|
| PL20 | 第11号住居跡出土土器                             | PL29 | 遺構外出土縄文式土器片(1)                                 |
| PL21 | 第11・12号住居跡出土土器                          | PL30 | 遺構外出土縄文式土器片(2)                                 |
| PL22 | 第12・13・14号住居跡出土土器                       | PL31 | 遺構外出土縄文式土器片(3)                                 |
| PL23 | 第14号住居跡出土土器                             | PL32 | 遺構外出土縄文式土器片(4)                                 |
| PL24 | 第14・15号住居跡出土土器                          | PL33 | 遺構外出土弥生式土器片，第1・16号住居跡・遺構外出土石器，遺構外出土土製品         |
| PL25 | 第16号住居跡出土土器，第68号土坑出土土器，第3号塚出土土器，遺構外出土土器 | PL34 | 第10・15・16号住居跡，遺構外出土石器・剝片                       |
| PL26 | 第1・12・16号住居跡出土土製品                       | PL35 | 第1・12・14号住居跡出土石器，姥ヶ谷津遺跡出土器台ミニチュア土器，第14号住居跡出土土器 |
| PL27 | 第16号住居跡出土弥生式土器片，第5・6・9・14号住居跡・遺構外出土土製品  |      |  |
| PL28 | 第1・4・7・9・10・12・14・15号住居跡・遺構外出土土製品       |      |  |

#### 南開遺跡

- |      |                 |      |   |
|------|-----------------|------|---|
| PL36 | 南開遺跡全景，第1号塚出土遺物 | PL37 | 第1号塚調査前全景，第1号塚調査後全景，第1号塚盛土土層断面，第1号塚6トレンチ，第1号塚遺物出土状況 |
|------|-----------------|------|---|

#### 付章

- PL38 姥ヶ谷津遺跡・炭化材の顕微鏡写真

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経過

首都圏整備計画において、岩井地区を含む茨城県南部区域は、東京大都市圏に新たに展開される居住・生産両面にわたる諸機能を積極的に誘導し、計画的な住宅地開発の推進と工場適地への工業の誘導を図る区域として位置付けられている。

また、茨城県民福祉基本計画において、県西地区（古河・水海道・岩井・下妻等）は、首都圏中央連絡道路を中心とする東京外縁部の中核的産業・定住圏をめざす地区とされ、そのために首都圏中央連絡道路の軸状開発の推進が図られている。

以上のような背景をもとに、工業団地造成の促進はその一環として挙げられ、岩井幸田地区に工業団地造成事業が計画された。

工事に先立ち、平成2年10月30日に茨城県は、茨城県教育委員会に工事予定地内における埋蔵文化財包蔵地の有無について照会した。これに対し、茨城県教育委員会は、平成3年9月3日に現地踏査を、平成3年9月10日～12日にかけて試掘調査を実施し、工事予定地内に姥ヶ谷津遺跡、南開遺跡の存在を確認した。茨城県教育委員会は、文化財保護の立場から埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ねた結果、現状保存が困難であるとし、記録保存の措置を講ずることとなり、平成4年1月28日に調査機関として茨城県教育財団が紹介された。茨城県教育財団は、茨城県と埋蔵文化財発掘調査に関する業務委託契約を締結し、平成4年4月1日から、姥ヶ谷津遺跡、南開遺跡の調査を実施することとなった。

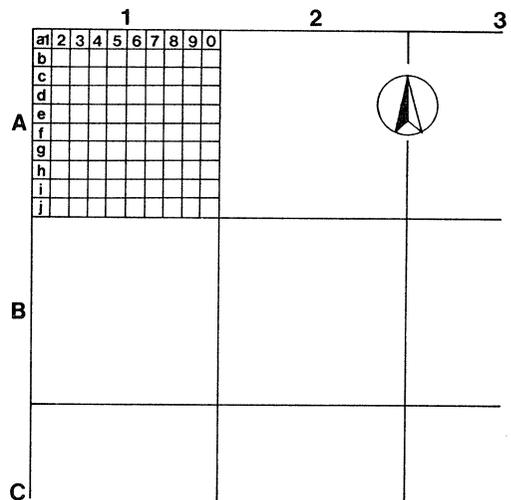
## 第2節 調査方法

### 1 地区設定

姥ヶ谷津遺跡、南開遺跡の発掘調査を実施するに当たり、遺跡及び遺構の位置を明確にするため調査区を設定した。

調査区の設定は、日本平面直角座標第IX系、X軸（南北）・Y軸（東西）を基準点として、40m方眼を設定し、この40m四方の区画を大調査区（大グリッド）とした。

さらに、この大調査区を東西、南北に各々



第1図 調査区呼称方法概念図

十等分して、4 m四方の小調査区（小グリッド）を設定した。

調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用いて表記した。まず、大調査区の名称は、北から南へ「A」・「B」・・・、西から東へ「1」・「2」・・・とし、その組み合わせで「A1区」、「B2区」・・・のように呼称した。さらに、大調査区を4 m方眼に100分割した小調査区をそれぞれ同様に、北から南へ「a」・「b」・・・「j」、西から東へ「1」・「2」・・・「9」・「0」と小文字を付した。各小調査区の名称は、大調査区の名称と合わせて、「A1a1」区・「B2b2」区のように呼称した。

なお、基準点の杭打ち測量は、財団法人茨城県建設技術公社に委託して実施した。

両遺跡における基準点の座標は、次のとおりである。

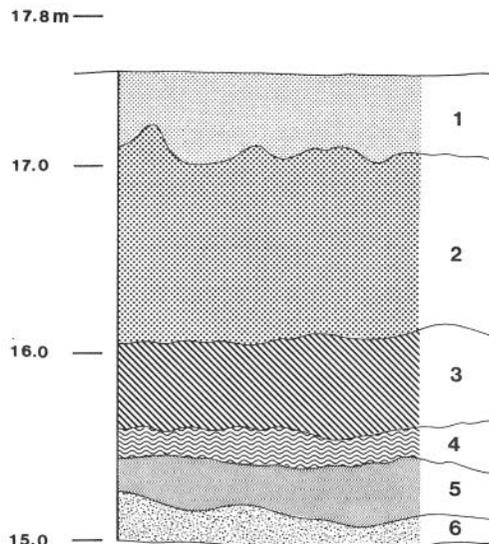
- (1) 姥ヶ谷津遺跡（C3a<sub>1</sub>） X軸（南北）+5,800 m, Y軸（東西）+8,280 m
- (2) 南開遺跡（B2a<sub>1</sub>） X軸（南北）+5,560 m, Y軸（東西）+7,560 m

## 2 基本層序の検討

### (1) 姥ヶ谷津遺跡

姥ヶ谷津遺跡においては、調査区域の北部A3j<sub>1</sub>区にテストピットを設定し、第2図に示すような土層の堆積状況を確認した。

表土層の厚さは15~20cmである。第1層は褐色の漸移層であり、ローム粒子を多量に含み、厚さは38~48cmである。第2層は褐色のソフトローム層であり、厚さは90~100cmである。第3層は、褐色のハードローム層であり、締まりも強く、厚さは40~50cmである。第4層はにぶい褐色のローム層であるが、粘性があり、締まりも強く、厚さは15~20cmである。第5層は明褐色のローム層であり、に



第2図 姥ヶ谷津遺跡土層柱状図

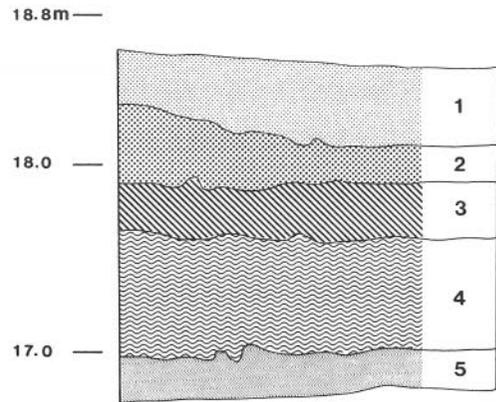
ぶい橙色の粘土粒子を多量に含み、粘性も強く、厚さは20~30cmである。第5層は下位の粘土層への漸移層である。第6層はにぶい橙色の粘土層であり、酸化鉄分の多い粒子を多量に含み、粘性が強い。

姥ヶ谷津遺跡の遺構は、表土下20~30cm程の第1層上面から確認されている。

## (2) 南開遺跡

南開遺跡においては、調査区域の東部 A110区にテストピットを設定し、第3図に示すような土層の堆積状況を確認した。

第1層は黒褐色の表土であり、厚さは40～45cmである。第2層は褐色のソフトローム層であり、厚さは15～20cmである。第3層は暗褐色のローム層であり、黒色土粒子を多量に含み、厚さは30～35cmである。第4層は褐色を呈したハードローム層であり、粘性があり、締まりも強く、厚さは55～60cmである。第5層は明褐色を呈したハードローム層であり、上位の層と比べると、粘性・締まりとも一段と強い。



第3図 南開遺跡土層柱状図

## 3 遺構確認

調査前の遺跡の状況は、姥ヶ谷津遺跡、南開遺跡とも山林である。南開遺跡においては、調査区の北部に高さ2m程の地ぶくれがあり、古墳あるいは塚の存在が確認された。姥ヶ谷津遺跡においては、表土から古墳時代の土師器片が採集されていることから、同時代を中心とした遺構の存在が予想された。そこで、調査区域全体にグリッドを設定し、調査面積の16分の1、次いで8分の1の割合で試掘調査を行った。その結果、調査区のほぼ全域に遺構の存在することが認められたので、調査担当者間で協議し、重機を導入して速やかに調査を進められるように図った。姥ヶ谷津遺跡からは、バックホーによる表土除去と、作業員による遺構確認作業の結果、住居跡17軒、土坑30基、溝1条、塚3基を確認した。

## 4 遺構調査

姥ヶ谷津遺跡、南開遺跡における遺跡の調査は、次の方法で行った。

住居跡の調査は、長軸方向とそれに直交する方向に土層観察用ベルトを設定し、四分分割して掘り込む「四分分割法」を基本とし、地区の名称は、北から時計回りに1～4区とした。土坑の調査は、長径方向で二分分割して掘り込む「二分分割法」で行った。塚の調査は、形状をあきらかにするため、25cmの等高線で墳丘図を作成し、さらに構築状況を知るため4～8本のトレンチを入れて、調査を実施した。

土層観察は、色相、含有物、混入物の種類や量、及び粘性、締まり具合等を観察し、分類の基

準とした。色相の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄日本色研事業株式会社）を使用した。

遺物の取り上げについては、住居跡、溝、土坑、塚の各区名と遺物番号、出土位置、レベル等を記録して収納した。

遺構や遺物の平面実測は、水糸方眼地張り測量・平板実測で行い、土層断面や遺構断面の実測は、標高をもとに水平にセットした水糸を基準にして実測した。縮尺は20分の1を基本としたが、炉や部分的な微細図については10分の1の縮尺で作成した。

調査の過程は、土層断面写真撮影→土層断面図作成→遺物出土状況写真撮影→遺物出土状況図作成→遺構写真撮影→遺構断面図作成→遺構平面図作成の順で行うことを基本とした。図面や写真に記録できない事項に関しては、野帳及び調査記録カードに記録し、さらに遺構カードに整理した。

### 第3節 調査経過

姥ヶ谷津遺跡、南開遺跡の発掘調査は、平成4年10月1日から平成5年3月31日までの6か月にわたって実施された。以下、調査の経過について、月ごとにその概要を記述する。

10月 発掘調査に必要な事務所や現場倉庫の設置、調査器材搬入及び作業員の雇用を行った。6日には発掘調査の円滑な推進と作業の安全を願って、歛入れ式を挙行した。7日から姥ヶ谷津・南開遺跡の伐開を開始し、姥ヶ谷津遺跡においては3か所、南開遺跡においては1か所のマウンドを確認した。9日から姥ヶ谷津遺跡のグリッド試掘及びマウンドの測量を開始した。16日には南開遺跡のマウンドの測量を行った。30日からは南開遺跡のトレンチ試掘と、人力による表土除去によって遺構確認作業を行ったが、確認された遺構は塚1基であり、他の遺構は確認されなかった。

11月 姥ヶ谷津遺跡においては、グリッド試掘の結果、調査区全域から遺構が確認されたため、重機による表土除去を計画し、9日には姥ヶ谷津遺跡の南部から、表土除去と併せて遺構確認作業を開始した。その結果、竪穴住居跡17軒、土坑23基、溝1条、塚3基が確認された。26日から南開遺跡の塚の遺構調査を開始し、構築状況等を調査するためトレンチを入れた。その結果、頂上部から内耳土器片が、南側裾部から土師質土器、陶器、古銭（寛永通宝）が出土した。

12月 7日から姥ヶ谷津遺跡の遺構調査を、調査区南部の第1号住居跡から開始した。10日には並行して行っていた南開遺跡の塚の調査を終了した。24日から姥ヶ谷津遺跡の塚の調査を調査区南端部の第3号塚から開始した。

- 1月 調査区南部の第12号住居跡（古墳時代前期）から、舟形土製品やミニチュア土器が出土した。調査区北部の第16号住居跡（弥生時代後期）から、那珂川下流域における弥生時代後期の髭釜式土器に類似した広口壺が出土した。
- 2月 住居跡の調査をほぼ終了し、塚・土坑・溝の調査に主力を向けた。
- 3月 6日には現地説明会を開催し、遺構・遺物の一般公開を行った。9日には姥ヶ谷津遺跡南開遺跡の航空写真を撮影した。23日までに姥ヶ谷津遺跡、南開遺跡の補足調査、埋め戻し及び安全対策を実施し、24日には一切の現地調査を完了した。

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

姥ヶ谷津遺跡、南開遺跡の2遺跡は、茨城県岩井市大字幸田に所在し、岩井市役所の東北東約2 kmに位置している。

岩井市は、茨城県の南西端に位置し、市域は南北にやや長く、東西約12km、南北約16km、面積は91.46 km<sup>2</sup>である。北は猿島町、東は水海道市、西は境町、南は利根川を挟んで千葉県野田市に接している。当市は東京都心から45km、常磐自動車道の谷和原ICから約15分という近距離にあり、市の中心部を国道357号、県道古河岩井線、結城岩井線が通り、県西と県南地域、茨城県と千葉県を結ぶ交通の要衝である。さらに、市の北部を首都圏中央連絡自動車道（圏央道）が横断する計画もある。

岩井市域は猿島台地の南東部に位置し、洪積台地と利根川・飯沼川・東仁連川によって形成された沖積低地から成り立っている。猿島台地は北西から南東方向へ伸びており、標高15～20mで、利根川をはじめ支流の飯沼川・東仁連川により開析された谷津が樹枝状に入り込み、非常に複雑な地形を形成している。

猿島台地の基部を構成する地層は、貝化石を含む成田層（見和層）である。この貝化石を含む地層には小形有孔虫の化石も入っており、この有孔虫を調べることにより、古鬼怒湾時代の気候や植生などの古環境を復元することができる。さらに、成田層の上に黄褐色砂や黄褐色粗砂を含む龍ヶ崎砂礫層、その上に灰白色の粘土層である常総粘土層、そして、表土の下を厚く覆う赤褐色の関東ローム層となっている。

姥ヶ谷津遺跡は、東側に結城台地との境となる低地（将門記に登場する「飯湖」）を望む、標高約18mの猿島台地東側縁辺部に位置している。低地には、東・西仁連川と飯沼川が流れており、水田として利用されている。低地の開発は江戸時代以降であり、それ以前は幅1～2 km、長さ約20kmの湖沼であった。調査前の現況は、山林であり、水田との比高は10mほどである。

南開遺跡は、姥ヶ谷津遺跡の800m程西側に離れた、標高約18mの同一台地上に位置している。調査前の現況は山林である。

## 第2節 歴史的環境

猿島台地の南東部に位置する岩井市には、『茨城県遺跡地図<sup>(1)</sup>』によれば、多くの遺跡が分布している。しかし、現在までのところ、岩井市内の遺跡発掘調査例は少ない。昭和50年に岩井市教育委員会が上出島古墳群<sup>(2)</sup>の発掘調査を行ったのが最初の例である。

1990年代には、岩井市史編さん事業に伴い市史編さん室の自然考古部会<sup>(3)</sup>によって、拾二ゴゼ貝塚・駒寄遺跡<sup>(4)</sup>〈40〉・高山古墳〈9〉などの調査が実施されている。ここでは、岩井市及びその周辺の遺跡について、時代を追って概観することにする。

旧石器時代の遺跡としては、北前遺跡<sup>(5)</sup>〈2〉・篠山南遺跡〈23〉があげられる。平成3年に調査された北前遺跡では、調査区内から安山岩・頁岩製のスクレイパー及び多量の剥片が出土している。また、菅生沼の東側台地上に位置する水海道市篠山南遺跡では頁岩製のスクレイパーが採集されている。

縄文時代の遺跡は、市内とその周辺に多く分布するようになる。飯沼川から菅生沼及び鬼怒川流域は、台地上に貝塚が数多く見られ、貝塚の形成と海進・海退による汀線の変動の研究には重要な地域である。水海道市北部に位置する縄文時代早期の花島貝塚（貝柄山貝塚）<sup>(4)</sup>からは、条痕文系の土器片及び石器類が出土している。前期の遺跡は、岩井市内では高崎貝塚〈5〉と北前遺跡などがある。北前遺跡は、平成2・3年に茨城県教育財団によって調査された遺跡で、黒浜式期の住居跡4軒が地点貝塚とともに調査されている。中期から後期にかけての遺跡は、矢作貝塚<sup>(6)</sup>〈6〉・法師貝塚・宝光院貝塚<sup>(7)</sup>〈16〉などがある。これらの遺跡からは、加曾利E式期から加曾利B式期にかけての土器片が採集されているが、現在は湮滅した遺跡も多い。後期の遺跡は南境木遺跡<sup>(7)</sup>〈20〉・内守谷本郷遺跡<sup>(7)</sup>〈29〉・東浦遺跡<sup>(7)</sup>〈17〉・原口遺跡〈1〉などがある。南境木遺跡からは堀之内式期の土器片が採集されている。また、原口遺跡は平成2年に茨城県教育財団によって発掘調査が実施され、堀之内式・加曾利B式期の住居跡11軒にもなって多量の遺物が出土している。後期から晩期の遺跡は、内守谷館の台遺跡<sup>(7)</sup>〈30〉・拾二ゴゼ貝塚などがある。拾二ゴゼ貝塚からは、晩期安行Ⅲ式期の土器も出土している。

弥生時代の遺跡は、大崎遺跡〈3〉・本郷南志辺遺跡<sup>(3)</sup>〈27〉・貝置前沼遺跡<sup>(3)</sup>〈21〉などが確認されているが、当市も含め、周辺の市町村での調査例は少なく不明な部分が多い。今回調査を実施した姥ヶ谷津遺跡〈44〉からは、弥生時代後期的那珂川下流域を中心に分布する髭釜式に類似した土器を伴った住居跡が1軒確認されている。

古墳時代の遺跡は数多く確認されている。縄文時代と複合する北前遺跡では、前期末のものと考えられる中実柱状の脚部をもった高坏等が出土し、古墳時代前・中期の住居跡33軒が確認されており、姥ヶ谷津遺跡の該期の集落との関連性が注目される。また、水海道市奥山A遺跡<sup>(5)</sup>〈32〉では

前期の住居跡3軒が調査されている。中期の遺跡としては、水海道市大並遺跡〈24〉・西原遺跡〈34〉・大生郷遺跡〈39〉<sup>(12)</sup>などが調査されている。特に、昭和50年から昭和52年にかけて調査された、縄文時代から奈良・平安時代の複合遺跡である大生郷遺跡からは、中期の住居跡12軒、土坑1基が確認され、土師器や石製模造品が出土している。また、当遺跡の北側約2kmには、平成2年に調査が行われた駒寄遺跡が所在しており、確認された2軒の住居跡からは埴や高坏等の土師器が出土している。

飯沼水系の古墳としては、駒寄塚古墳〈41〉<sup>(11)</sup>がある。墳丘が失われ、地表に箱式石棺が露出しており、かつて人骨が出土したという。その南1km程のところから入る馬立谷津と呼ばれる小支谷に面し、馬立中の台古墳群、馬立古墳群〈42〉、浅間塚古墳群〈43〉などがある。いずれも現在では墳丘はほとんど消滅している。馬立中の台古墳群は、粘土を使用した主体部らしいものが2基みられたほか、土器が出土したという。馬立古墳群は、かつて9基あったと記録されており、武人埴輪が出土したとされている。浅間塚古墳群は、昭和37年に岩井市の行った分布調査時には径17mの円墳があり、円筒埴輪、土師器の破片がみられたという。

茨城県立岩井西高等学校建設に伴い、発掘調査をした上出島古墳群では、3基の古墳のうち、第2号墳は全長56mの前方後円墳であり、その後円部墳頂と墳丘の裾部から壺形埴輪の配列がみられる。さらに、後円部に設けられた粘土槨からは、滑石製勾玉・管玉・鉄剣・鉄鏃・鉄斧・鉄針が出土しており、出土遺物から築造年代は5世紀の前半頃に比定されている。高山古墳は、岩井市を代表する円墳であるが、明治45年に土取りにより破壊されてしまった。その時出土した直刀・金環などは東京国立博物館に収蔵されている。平成2年、筑波大学により再調査されたが遺存状況が悪く、墳形・規模を確認することができなかった。主体部は、雲母片岩（筑波石）を使用した横穴式石室である。高山古墳の南には、<sup>た</sup>辺田古墳群〈7〉・矢作古墳群〈8〉などが所在する。菅生沼の東側台地上に所在する大塚戸篠山古墳群〈38〉では、9基の古墳が現存している。その中で、平成2年に水海道市教育委員会によって調査された5号墳は、周溝を持つ墳丘径15mの円墳で出土した土器から7世紀中頃に比定されている。<sup>しもかどやま</sup>下神田山古墳群〈12〉には、径約20mの坊地塚古墳（円墳）や前方後円墳が数基残っている。

律令制以後、岩井市は下総国相馬郡に属した。承平5年（935）に始まった平将門の乱では岩井市が表舞台となっている。中世の城館跡<sup>(9)</sup>としては、大塚戸城跡〈18〉、菅生城跡〈19〉があり菅生城には、その城にまつわる民話が今に伝えられている。江戸時代に入ると、飯沼を中心に新田開発が積極的に行われていった。

※遺跡名の次の〈 〉内の数字は、表1・第1図の該当遺跡番号と同じである。

注・参考文献

- (1) 茨城県教育委員会 『茨城県遺跡地図』 1990年
- (2) 岩井市教育委員会 『上出島古墳群』 1975年
- (3) 水海道市教育委員会 『水海道市埋蔵文化財包蔵地分布地図』 1992年
- (4) 江坂輝弥・吉田格 「貝柄山貝塚」『古代文化』 13-9 1942年  
長良信夫・江坂輝弥 「貝柄山貝塚及び指扇五味戸貝塚発見の貝類」『古代文化』 13-9  
1942年  
江坂輝弥 「貝柄山貝塚」『茨城県史料=考古資料編 先土器・縄文時代』 1979年
- (5) 茨城県教育財団 「水海道都市計画事業・内守谷土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2 奥山A遺跡・奥山C遺跡・西原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』 第31集  
1986年
- (6) 斎藤弘道 『県内貝塚における動物遺存体の研究(1)』 茨城県歴史館 1978年
- (7) 茨城県教育委員会 『重要遺跡調査報告書1』 1982年
- (8) 水海道市史編さん委員会 『水海道市史(上巻)』 1983年
- (9) 茨城県教育委員会 『重要遺跡調査報告書II(城館跡)』 1985年
- (10) 茨城県教育財団「茨城県自然博物館(仮称)建設用地内埋蔵文化財調査報告書I 原口遺跡・北前遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』 第83集 1993年
- (11) 岩井市史編さん委員会「岩井市の遺跡」『岩井市史遺跡調査報告書』 第1集 1992年
- (12) 茨城県教育財団「大生郷工業団地内埋蔵文化財調査報告書大生郷遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』 XII 1981年



第 4 図 周辺遺跡分布図

表1 姥ヶ谷津・南開遺跡周辺遺跡一覧表

番号	名称	時代					番号	名称	時代				
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈以降			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈以降
1	原口遺跡		○				24	大並遺跡				○	
2	北前遺跡	○	○		○		25	上野古墳				○	
3	大崎遺跡			○			26	上野A遺跡		○			
4	高崎台地遺跡		○				27	本郷南志辺遺跡			○		
5	高崎貝塚		○	○	○		28	向地遺跡				○	
6	矢作貝塚		○				29	内守谷本郷遺跡		○			
7	辺田古墳群				○		30	内守谷館の台遺跡		○			
8	矢作古墳群				○		31	内守谷向地遺跡		○		○	
9	高山古墳				○		32	奥山A遺跡		○		○	
10	上神田山古墳群				○		33	奥山C遺跡		○			
11	榊山古墳群				○		34	西原遺跡		○			○
12	下神田山古墳群				○		35	坂手日之王神遺跡		○			
13	浅間塚古墳群				○		36	坂手萱場貝塚		○			
14	香取神社脇貝塚		○				37	奥山下根遺跡		○		○	
15	稻荷塚古墳				○		38	大塚戸篠山古墳群				○	
16	宝光院貝塚		○				39	大生郷遺跡	○	○		○	○
17	東浦遺跡		○				40	駒寄遺跡				○	
18	大塚戸城跡					○	41	駒寄塚古墳				○	
19	菅生城跡					○	42	馬立古墳群				○	
20	南境木遺跡		○				43	浅間塚古墳群				○	
21	見置前沼遺跡			○			44	姥ヶ谷津遺跡	(当遺跡)		○	○	
22	向山遺跡		○	○			45	南開遺跡	(当遺跡)				○
23	篠山南遺跡	○											

# 第3章 遺構・遺物の記載方法

## 第1節 遺構・遺物の記載方法

本書における遺構及び遺物の記載方法は、以下のとおりである。

### (1) 使用記号

遺構

名称	住居跡	土坑	溝	ピット	塚
記号	S I	SK	SD	P <sub>1</sub> ・・・	TM

遺物

土器	土製品	石器	古銭
P	DP	Q	M

### (2) 遺構及び遺物の実測図中の表示



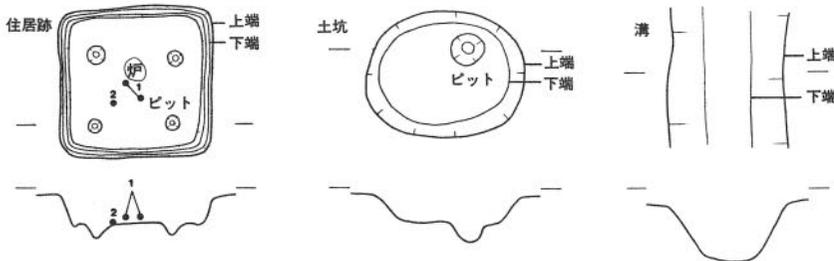
### (3) 遺構番号

遺構番号については、調査の過程において遺構の種別ごと、調査順に付したが、整理の段階で遺構でないと判断したものは欠番とした。

### (4) 土層の分類

土層観察における色相については、実測図中に記載した。攪乱層については「K」と表記した。

### (5) 遺構実測図の作成方法と掲載方法



- ① 住居跡・土坑は、縮尺20分の1の原図を縮尺60分の1にした。
- ② 実測図中のレベルは標高であり、m単位で表示した。また同一図中で同一標高の場合に限る、一つの記載で表し、標高が異なる場合は各々表示した。
- ③ 本文中の記載について
  - 「位置」は、遺構の占める割合が最も大きい小調査区名をもって表示した。

- 「重複関係」は、他の遺構との切り合い関係を記した。
- 「平面形」は、現存している形状の上端部で判断し、方形・長方形、円形・楕円形の場合には下記の分類基準を設け、そのいずれかを明記した。  
 方形（短軸：長軸＝1：1.1未満のもの）長方形（短軸：長軸＝1：1.1以上のもの）  
 円形（短径：長径＝1：1.1未満のもの）楕円形（短径：長径＝1：1.1以上のもの）  
 また、形の整わないものは、不整○○形と表示した。
- 「規模」は、平面形の上端部の計測値であり、長軸（径）、短軸（径）をm単位で表記した。（ ）を付したものは現存値、[ ]は推定値である。
- 「方向」は、炉を通る線を主軸とし、その主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（主軸方向）。  
 （N-10°-E, N-10°-W）[ ]を付したものは推定である。
- 「壁」は、床面からの立ち上がり角度が81°～90°を垂直、65°～80°を外傾、65°未満を緩斜、さらに90°以上を内傾とした。壁高は、残存壁高の計測値であり、cm単位で表記した。
- 「壁溝」は、その形状や規模を記述した。規模は床面からの計測値とした。
- 「床」は、凹凸、平坦等の様子を示し、床質等について述べた。
- 「ピット」は、その住居跡に伴うと考えられる総数を表示し、支柱穴・入口施設ピット数を表し、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>はピット番号を表し、さらに、ピットの直径と深さを記述した。
- 「覆土」は、堆積の状態が自然堆積の場合は「自然」、人為堆積の場合は「人為」と記した。
- 「遺物」は、主な遺物の種類や出土位置、出土状態を記述した。
- 「所見」は、当該住居跡についての時期やその他特記すべき事項を記述した。

(6) 遺物実測図の作成方法と掲載方法

① 土器の実測は、四分割法を用い、中心線の左側に外面、右側に内面及び断面を表した。

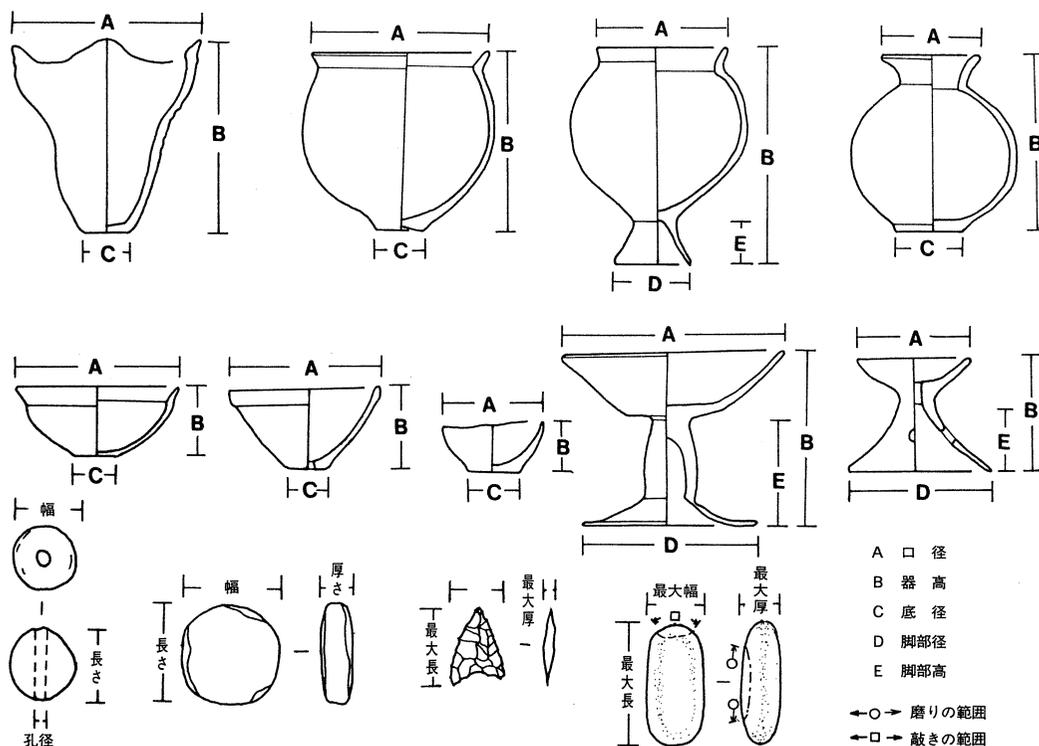
② 実測図中の表示方法



③ 土器の拓影図は、右側に断面を表し、表・裏2面を掲載したものは、断面を挟んで左側に外面、右側に内面を掲載した。

④ 遺物は原則として3分の1の縮尺にした。

⑤ 各部位の名称と計測値表現



第 2 節 表の見方について

〈住居跡一覧表〉

住居跡 番号	位置	主(長)軸 方 向	平面形	規 模		壁高 (cm)	床面	内 部 施 設					炉	覆土	出土遺物	備 考
				長軸×短軸(m)				壁溝	支柱穴	貯蔵穴	ピット	入口				

- 炉が確認されている住居跡は「炉」の数を記した。
- 出土遺物は、実測個体数を除いた遺物の種類と出土土器片の数を記した。
- 備考は、重複関係や特徴等を記した。
- その他の項目については、本文中の記載方法に準じた。

〈土坑一覧表〉

土坑 番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考	図版 番号
				長径×短径 (m)	深さ (cm)						

- 深さは、遺構確認面から坑底の最も深い部分までの計測値（cm）で表した。
- 壁面は、坑底からの立ち上がりの状態を下記の基準で分類し表示した。  
81°～90°の傾きは垂直，65°～80°の傾きは外傾，65°未満の傾きは緩斜とした。
- 底面は、下記のように分類し表示した。  
平坦，皿状，凹凸
- その他の項目については、住居跡の記載方法に準じた。

〈土器観察表〉

① 縄文式土器・弥生式土器

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考

②土師器・陶器

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考

- 図版番号は、実測図中の番号である。写真図版の番号にも用いた。
- 計測値は、A…口径，B…器高，C…底径，（ ）は現存値，[ ]は復元推定値を表す。
- 器形の特徴は、底部，体部等の各部位について記した。
- 胎土，色調，焼成の順で述べ，色調は『新版標準土色帖』を使用した。焼成については「良好」，「普通」，「不良」に分類し，硬く焼き締まっているものは良好，焼きがあまり器面が剥離しやすいものは不良とし，その中間のものを普通とした。
- 備考は，残存率，実測（P）番号等を記した。

〈土製品一覧表〉

図版番号	器種	計測値 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					

- 図版番号は、実測図中の番号である。写真図版の番号にも用いた。
- 重量の欄で、（ ）を付した数値は、一部を欠損しているものの現存値である。

〈石器・石製品一覧表〉

図版番号	器 種	計 測 値				石 質	出 土 地 点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			

- 図版番号は、実測図中の番号である。写真図版の番号にも用いた。
- 重量の欄で、（ ）を付した数値は、一部を欠損しているものの現存値である。

〈金属製品一覧表〉

図版番号	器 種	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		

- 図版番号は、実測図中の番号である。写真図版の番号にも用いた。
- 重量の欄で、（ ）を付した数値は、一部を欠損しているものの現存値である。

〈古銭一覧表〉

図 版 番 号	銭 名	初 鑄 年 (西 曆)	鑄 造 地 名	備 考

- 備考の欄は、出土位置、実測 (M) 番号、その他必要と思われる事項を記した。

## 第4章 姥ヶ谷津遺跡

### 第1節 遺跡の概要

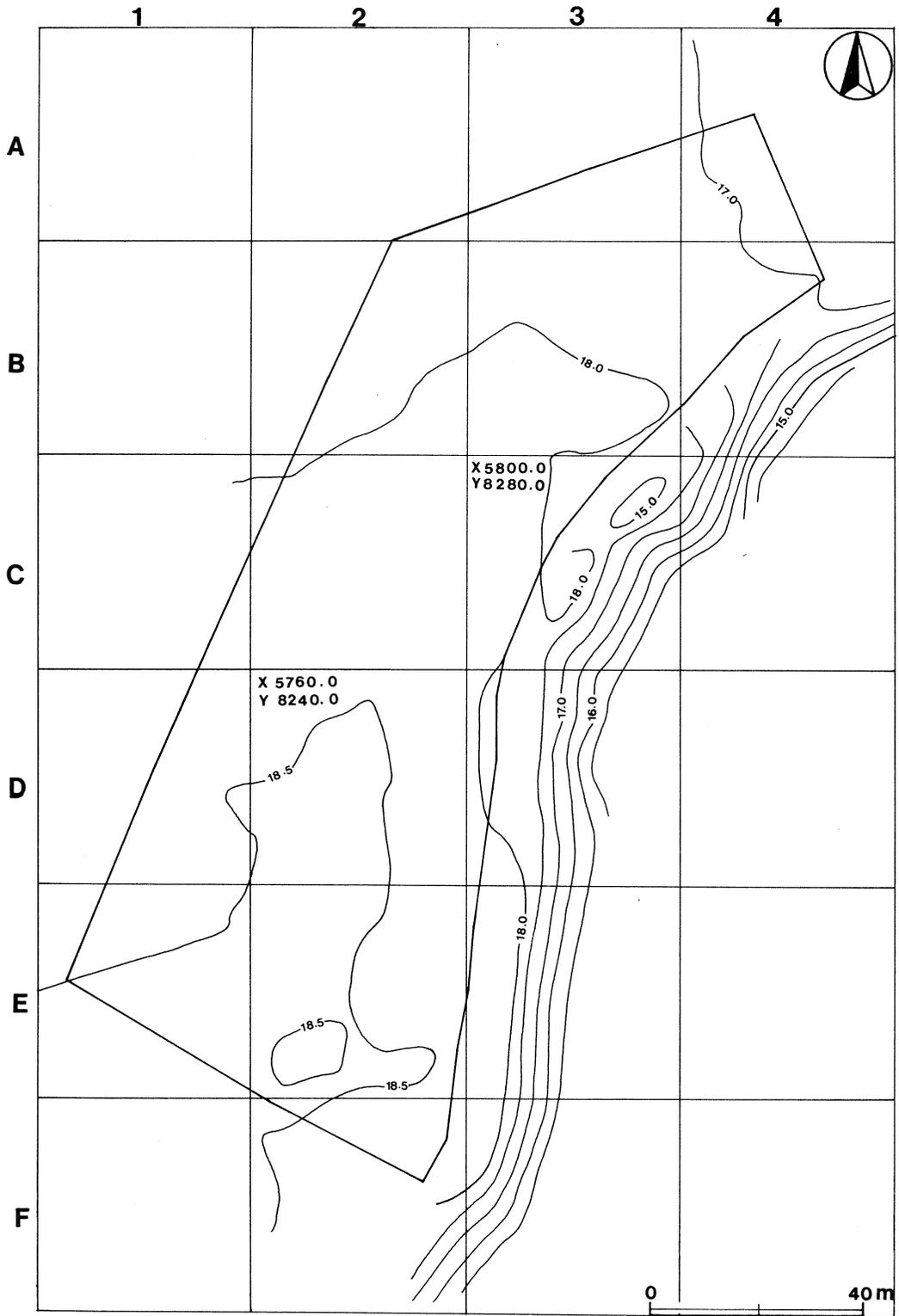
姥ヶ谷津遺跡は、岩井市の北東部、飯沼川流域の沖積低地から南西に延びる谷津の北西側、標高18m程の舌状台地縁辺部に立地する、弥生時代後期から古墳時代中期及び近世の複合遺跡である。調査前の現況は山林で、今回の調査区域は、南北に約180m、東西に約60m、面積11,477.59㎡である。

今回の調査によって確認された遺構は、弥生時代後期から古墳時代中期の竪穴住居跡17軒、土坑23基、溝1条、及び近世の塚3基である。

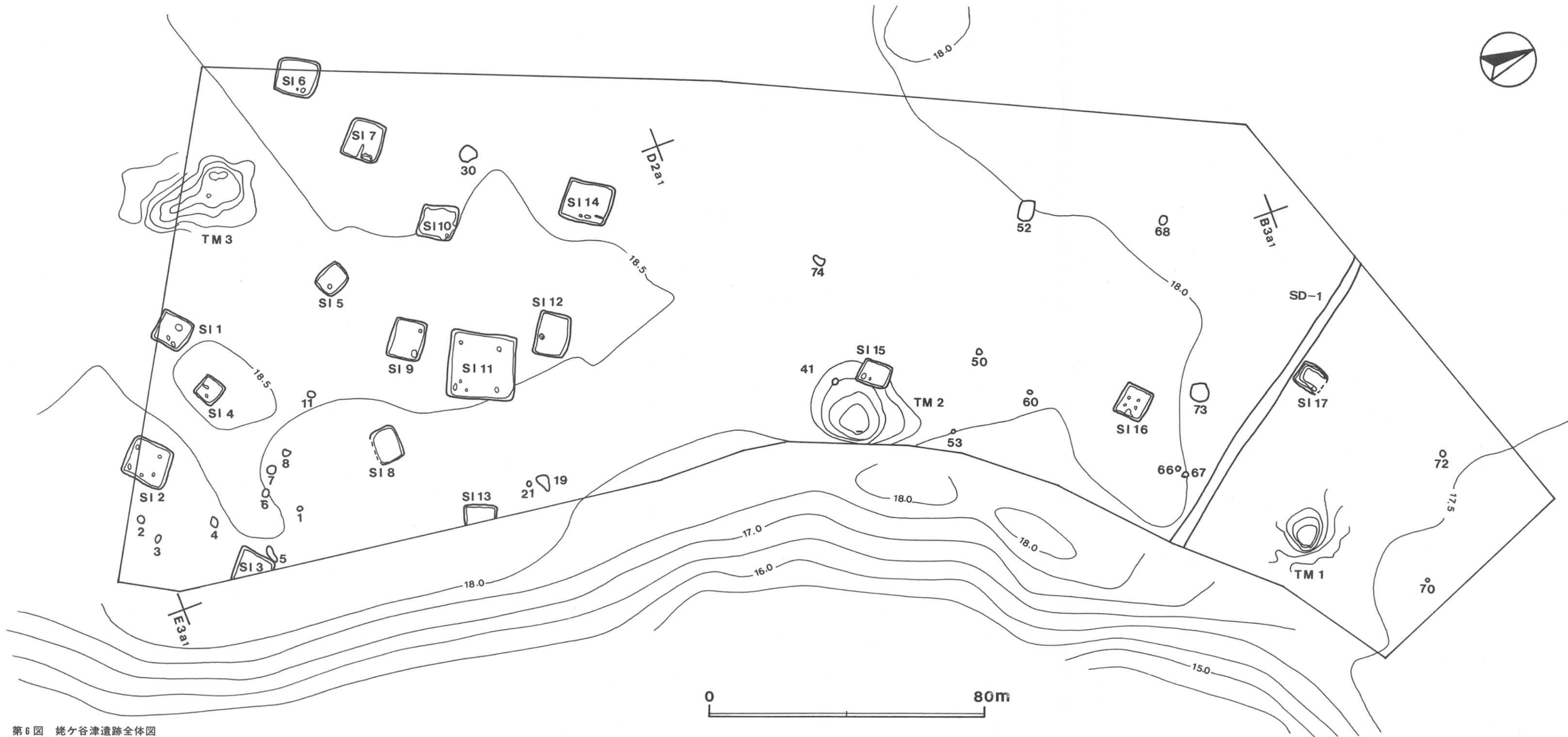
弥生時代後期の竪穴住居跡は、調査区北東部から1軒確認されており、平面形は隅丸長方形である。

古墳時代の竪穴住居跡は、16軒確認されており、12軒が古墳時代前期に、4軒が古墳時代中期に比定される。古墳時代前期の竪穴住居跡は、主に主軸方向が北西をむき、平面形は方形もしくは長方形である。規模は一辺3mほどの小形のものから、5～6mのものまで確認されている。この時期の住居跡は、焼失家屋が多く、床面から焼土や柱・屋根材の炭化物が出土している。古墳時代中期の竪穴住居跡も、主軸方向は主に北西をむき、平面形は方形もしくは長方形である。規模は大きくなり、一辺が9mを超える大形の住居跡が確認されている。

遺物は遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に20箱程出土している。弥生時代の遺物は、後期の那珂川下流域の髭釜式に類似した広口壺や土製品の紡錘車等が、住居跡の覆土及び床面から出土している。古墳時代の遺物は、前期の住居跡からは、土師器の台付甕、壺、鉢、器台や、その他、舟形土製品、土玉、炉床から粘土焼成板（円盤型の土製品）、ミニチュア土器、手捏土器等が出土している。中期の住居跡からは、土師器の坏、碗、高坏、甕、甌等が出土している。



第5図 姥ヶ谷津遺跡地形図



第6図 姥ヶ谷津遺跡全体図

## 第2節 遺構と遺物

### 1 竪穴住居跡

当遺跡からは、17軒の竪穴住居跡（弥生時代後期1軒，古墳時代前期12軒，古墳時代中期4軒）が確認されている。弥生時代後期の住居跡は、台地の先端部（調査区北部）に、古墳時代の住居跡は、台地の中央部（調査区南部）に集中してみられる。これらの住居跡は、木根等による多少の攪乱があるものの、重複がなく遺構の遺存状態も比較的良好である。以下、確認された住居跡の特徴や主な出土遺物について記載する。

#### 第1号住居跡（第7・8図）

**位置** E2i<sub>1</sub>区

**規模と平面形** 長軸4.80m・短軸4.67mの方形。

**主軸方向** N-46°-W

**壁** 壁高は、63～73cmでほぼ垂直に立ち上がっている。壁に沿って、上幅10～15cm、深さ3～5cmで、U字状に掘り込まれた溝が全周している。

**床** 平坦で、全体に踏み固められているが、出入口付近は特に堅緻である。

**ピット** 1か所。P<sub>1</sub>は長径52cm、短径50cmの円形で、深さは48cmである。南東壁寄りの貯蔵穴脇に位置しており、出入口施設に伴うピットと考えられる。

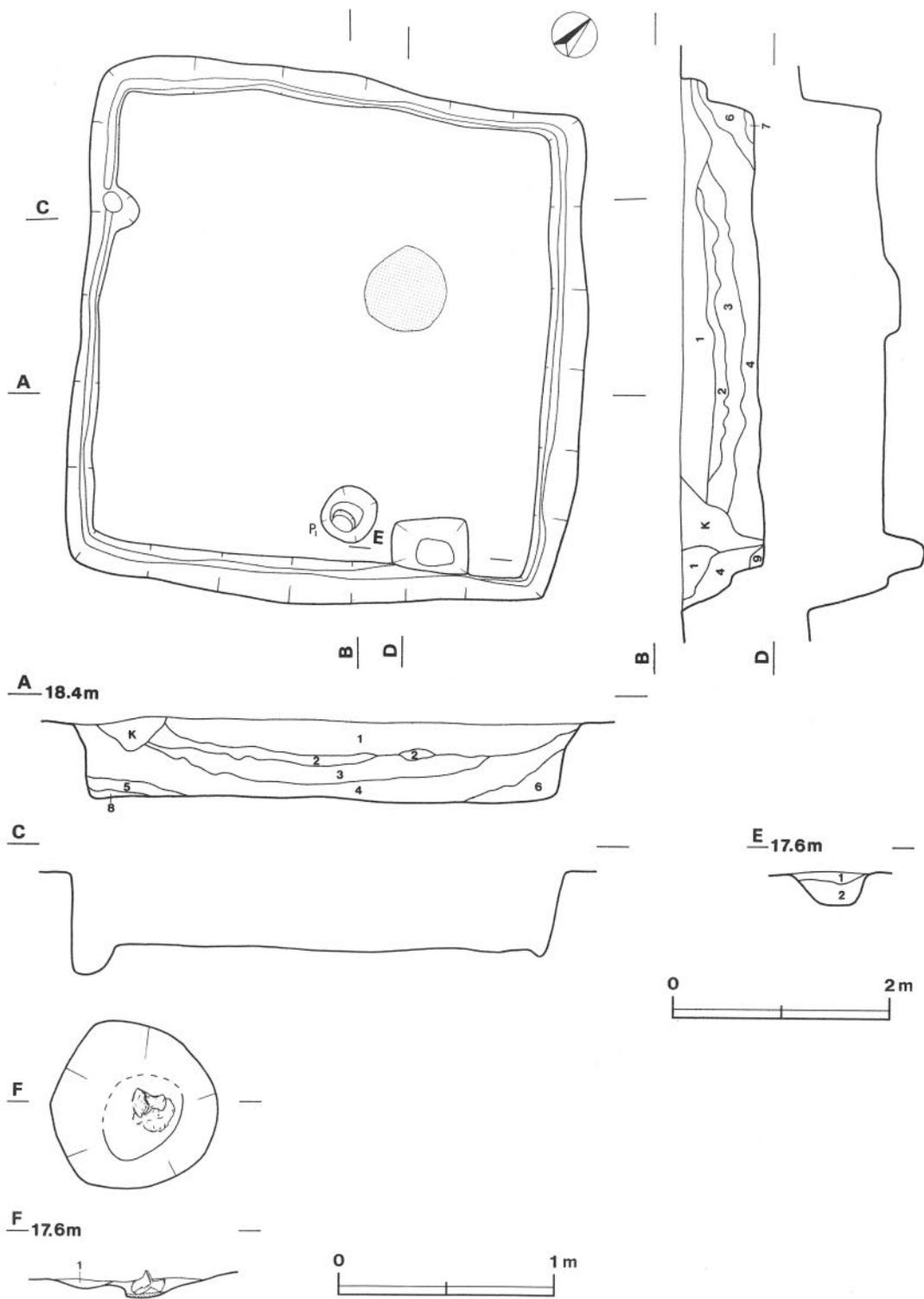
**炉** 主軸線の中央部からやや北側に付設されている。長径80cm、短径76cmの円形で、床を5cm程掘り窪めた地床炉である。覆土は1層で、焼土粒子を多量に含む暗赤褐色土である。

**貯蔵穴** 東コーナー寄りに付設されている。規模は長径72cm、短径50cmの長方形で、深さは40cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。覆土は2層からなり、1層は焼土小・中・大ブロックを多量に含む暗赤褐色土、2層はローム粒子を多量に含む暗褐色土である。

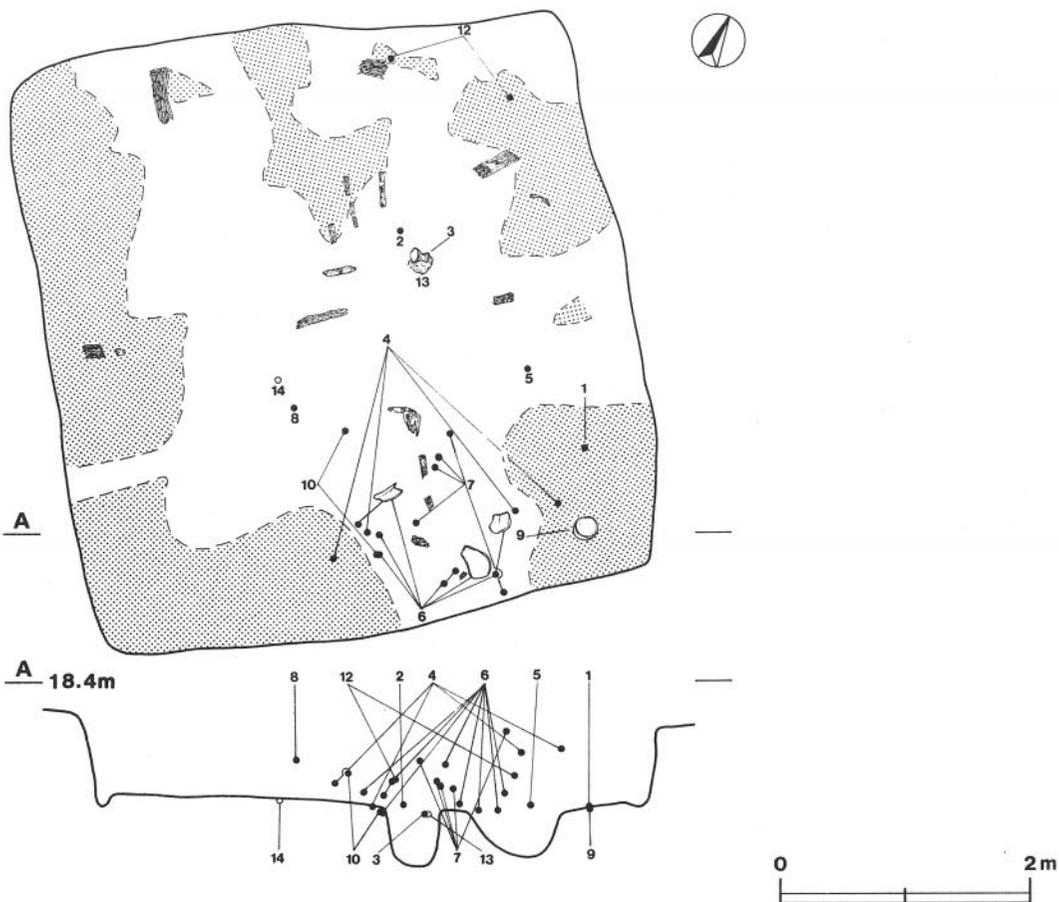
**覆土** 9層からなる。1～3層はローム粒子・焼土粒子を少量含む黒褐色土または黒色土である。4層はローム小ブロックを少量含む暗褐色土で、土師器片は4層から多く出土している。5層は多量の焼土ブロックを多量に含む赤褐色土である。6～9層はローム粒子、焼土粒子を少量含む暗褐色土である。

**遺物** 第9図4の台付甕はP<sub>1</sub>周辺の覆土中層から、5の台付甕はP<sub>1</sub>北側の覆土下層から、第10図12のミニチュア土器は南東壁中央部の覆土中層から、それぞれ散在して出土している。9の甕は東コーナーの覆土下層から、ほぼ正位の状態で出土している。炉床からは13の焼成粘土板上に3の台付甕が置かれた状態で出土している。また、床面から多量の炭化材が確認されている。

**所見** 本跡は、出土遺物等から古墳時代前期の住居跡で、炭化材等の出土状況から焼失家屋と考えられる。



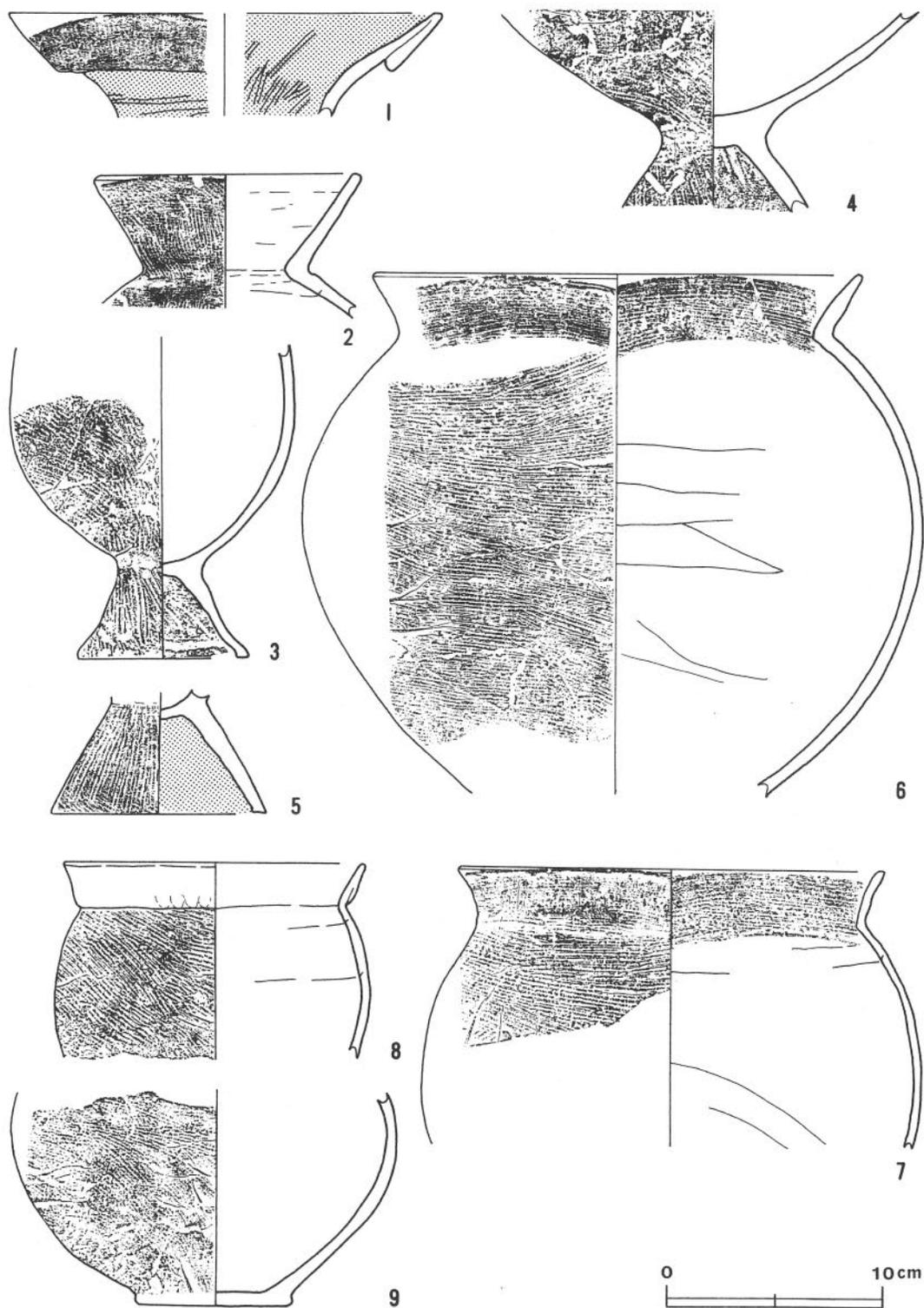
第7图 第1号住居跡実測图



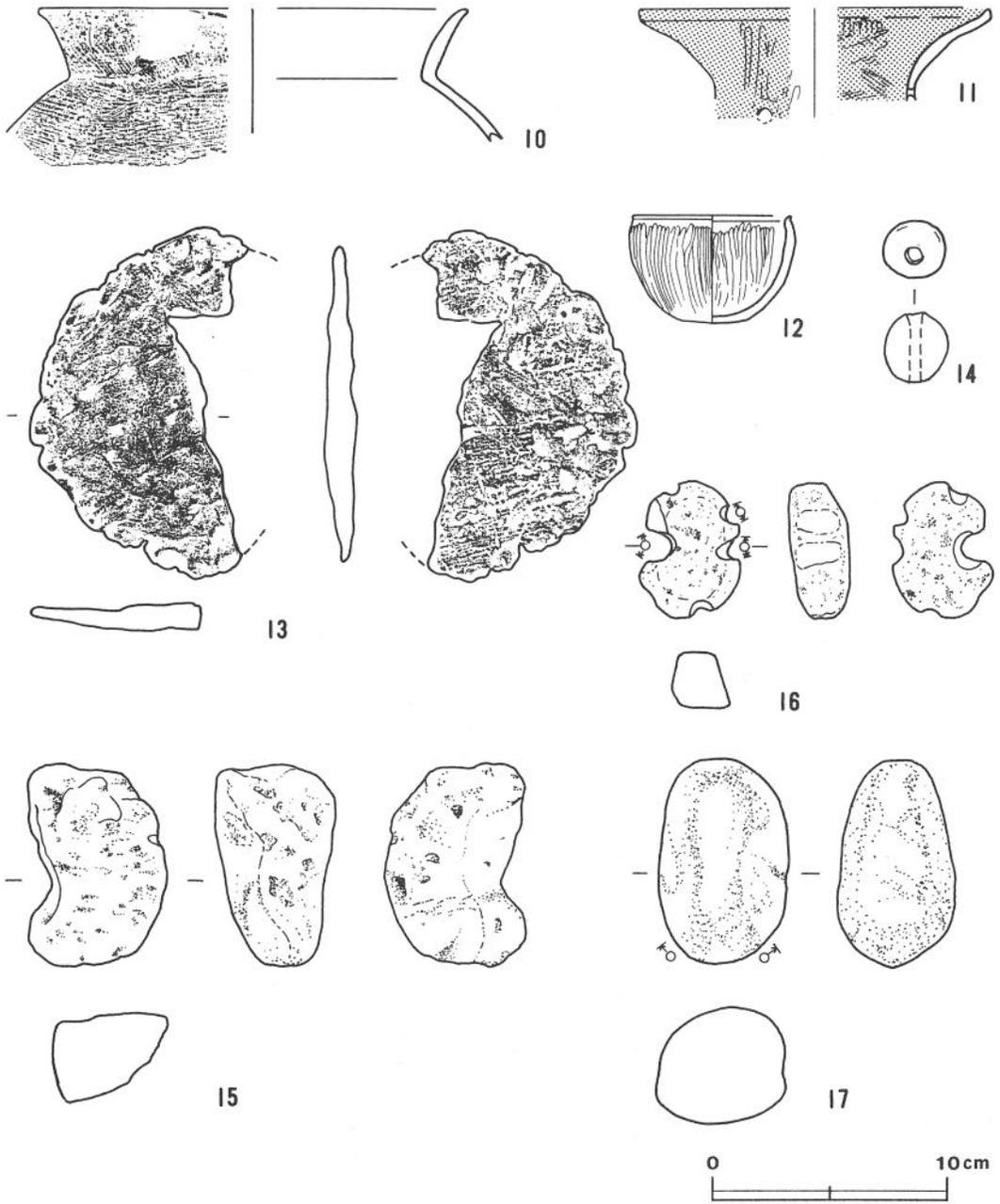
第8図 第1号住居跡遺物出土位置図

第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第9図 1	壺 土師器	A (20.1) B (4.8)	口縁部は頸部から外反して立ち上がる。複合口縁。	口縁部外面網目状捺糸文。頸部内・外面ヘラミガキ。口縁部外面網目状捺糸文帯を除き赤彩。	砂粒, スコリア 赤色 普通	P1 10% 東コーナー 覆土下層
2	壺 土師器	A 12.5 B (6.8)	口縁部は頸部から外傾して立ち上がる。	口縁部縦位のハケ目整形後ナデ。	砂粒, スコリア にぶい橙色 普通	P4 20% 中央部 覆土中層
3	台付壺 土師器	B (14.6) D 7.9 E 4.1	台部はラップ状に開く。体部は内彎して立ち上がる。	台部外面縦位のハケ目整形。体部外面斜位のハケ目整形, 内面剝離。	砂粒 明赤褐色 普通	P3 30% 炉床
4	台付壺 土師器	B (9.3)	台部は「ハ」の字状に開く。体部は内彎気味に立ち上がる。	台部外面縦位のハケ目整形。体部外面斜位のハケ目整形。	砂粒, スコリア 浅黄橙色 普通	P2 30% R1 周辺 覆土下層



第9图 第1号住居跡出土遺物実測図(1)



第10图 第1号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第9図 5	台付甕 土師器	D 9.8 E 5.2	台部片。台部は「ハ」の字状に開く。	台部外面縦位のハケ目整形、内面ナデ。内面赤彩。	砂粒にぶい 橙色 普通	P 5 10% P1 北側 覆土下層
6	甕 土師器	A 22.7 B (24.4)	体部は球状で上位に最大径をもつ。頸部は「く」の字状で、口縁部は外傾して立ち上がる。	体部外面ハケ目整形。口縁部内・外面ハケ目整形後ナデ。	砂粒にぶい 黄橙色 普通	P 6 80% 出入口覆土中層 外面煤付着
7	甕 土師器	A 19.7 B (12.8)	体部下半欠損。頸部は「く」の字状で、口縁部は外傾して立ち上がる。	体部外面ハケ目整形、内面ヘラケズリ。口縁部内・外面ハケ目整形。	砂粒、スコリアにぶい 黄橙色 普通	P 7 30% 出入口北側 覆土中層
8	(台付甕) 土師器	A 14.1 B (9.2)	体部下半欠損。頸部は「く」の字状で、口縁部は外傾して立ち上がる。折り返し口縁。	体部外面ハケ目整形、内面ヘラケズリ。口縁部外面ナデ、内面ハケ目整形。	砂粒 明赤褐色 普通	P 8 50% 東コーナー床面 外面下半部煤付着
9	甕 土師器	B (10.0) C 7.3	平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面ハケ目整形、内面剝離。	砂粒 橙色 普通	P 9 50% 東コーナー-覆土下層 二次焼成
第10図 10	甕 土師器	A [18.4] B (5.4)	口縁部片。頸部は「く」の字状で口縁部は外反して立ち上がる。	体部外面ハケ目整形。口縁部内面ナデ。	砂粒にぶい 橙色 普通	P 10 15% 出入口部北東 覆土上層
11	器台 土師器	A [15.0] B (4.0)	器受部片。器受部は外反し、口縁部はつまみあげられている。頸部に孔が穿たれている。	器受部外面縦位のヘラミガキ、内面横位のヘラミガキ。内・外面赤彩。	砂粒、スコリア 橙色 普通	P 11 10% 南西壁中央部 覆土下層
12	ミニチュア 土器 土師器	A 6.7 B 4.6 C [2.8]	碗形。平底。体部は内彎して立ち上がる。頸部はわずかにくびれ、口縁部は短く外反する。	体部内・外面縦位のヘラミガキ。口縁部内・外面ナデ。	砂粒、スコリア 橙色 普通	P 12 80% 南西壁中央部 覆土下層

図版番号	器種	計測値 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第10図13	焼成粘土板	15.0	(9.2)	1.2	—	(122.3)	50	炉床	DP1
14	土玉	3.0	2.7	—	6.0	16.6	100	覆土中	DP2

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第10図15	砥石	8.7	6.1	3.9	36.8	軽石	西コーナー覆土下層	Q1
16	砥石	5.7	4.3	2.4	10.1	軽石	西コーナー覆土下層	Q2
17	磨石	8.9	5.5	5.0	390.1	蛇紋岩	炉南側覆土下層	Q3

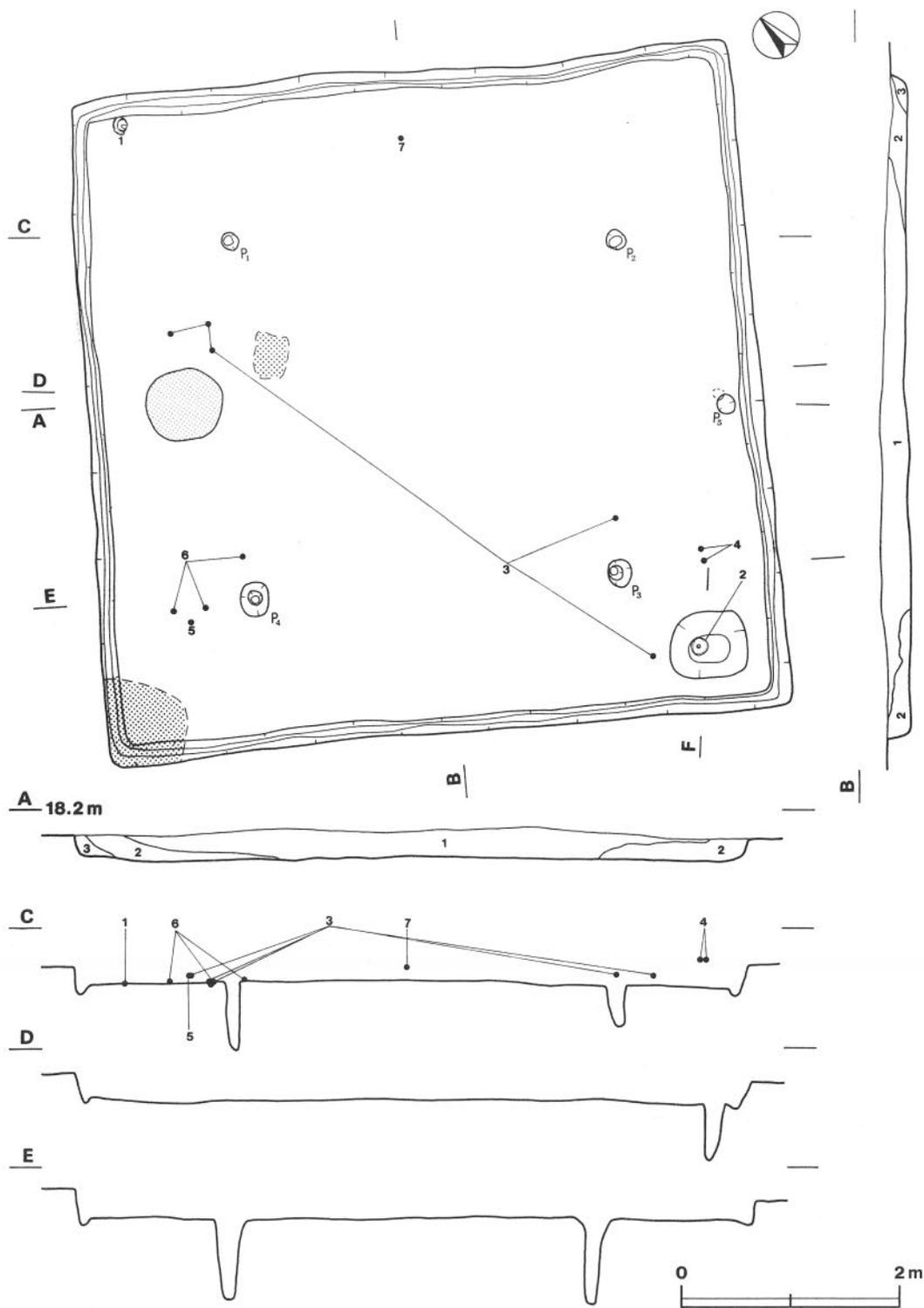
## 第2号住居跡 (第11・12図)

位置 F2c5区

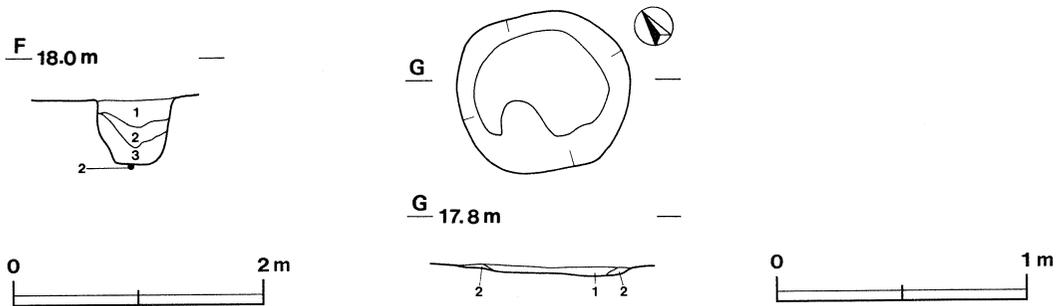
規模と平面形 長軸6.20 m・短軸6.15 mの方形。

主軸方向 N-51°-W

壁 壁高は19~21cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁に沿って、上幅10~15cm、深さ3~5cmで、U字状に掘り込まれた溝が全周している。



第11图 第2号住居跡実測・遺物出土位置図



第12図 第2号住居跡貯蔵穴・炉実測図

床 平坦で、全体に踏み固められている。

ピット 5か所。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は長径7～32cm，短径15～28cmの円形で，深さは40～80cmである。規模や配列から支柱穴と考えられる。P<sub>5</sub>は長径18cm，短径17cmの円形で，深さは53cmである。南東壁際のほぼ中央部に位置しており，出入口施設に伴うピットと考えられる。

炉 主軸線上北西壁寄りに付設されている。長径70cm，短径65cmの円形で，床を6cm程皿状に掘り窪めた地床炉である。覆土は2層からなり，1層は焼土粒子・焼土小ブロックを多量に含む暗赤褐色土，2層は焼土粒子・焼土小ブロックを少量含む暗褐色土である。

貯蔵穴 南コーナーに付設されている。規模は長径70cm，短径60cmの長方形で，深さは64cmである。底面は平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。覆土は3層からなり，1・2層はローム小ブロックを多量に含む暗褐色土，3層はローム粒子を少量含む暗褐色土である。

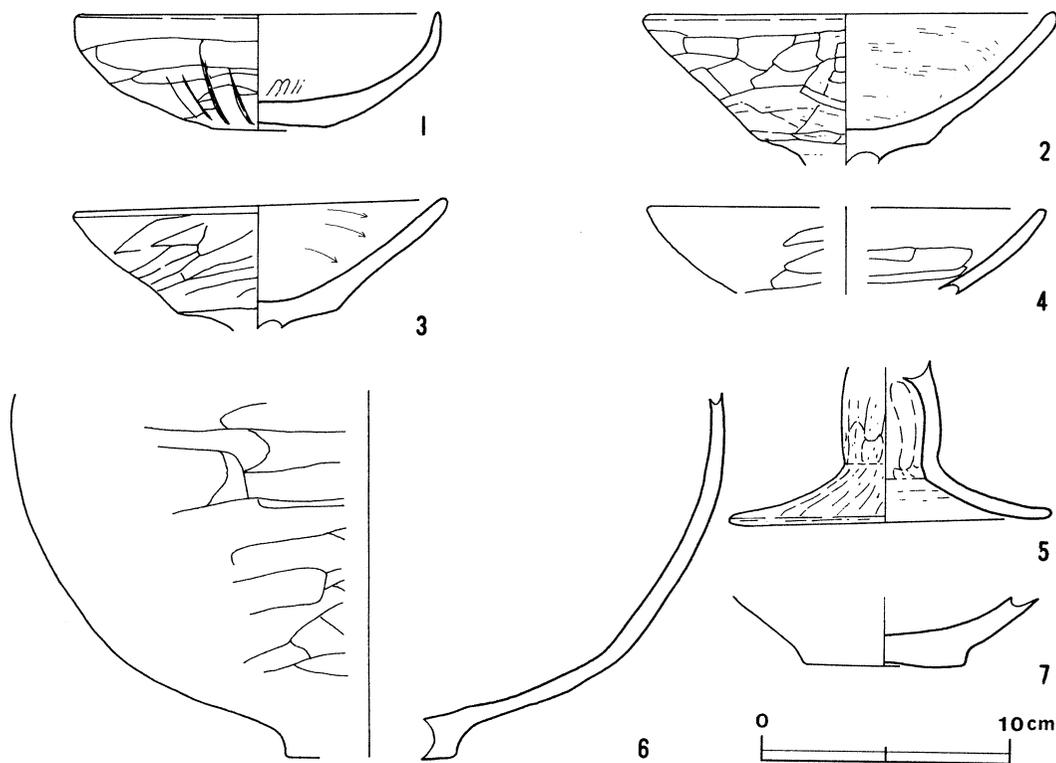
覆土 3層からなる。1層が堆積割合の大半を占める。1・2層はローム粒子，焼土粒子を少量含む黒褐色土または暗褐色土，3層はローム粒子を多量に含む褐色土である。

遺物 遺物は床面から少量出土している。第13図1の坏は北コーナーの床面から正位の状態，西コーナーの床面からは6の甕の破片の間に，5の高坏の脚部が直立した状態で，それぞれ出土している。貯蔵穴の覆土下層からは2の高坏の坏部が正位の状態出土している。

所見 本跡は，出土遺物等から古墳時代中期の住居跡と考えられる。

第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第13図 1	坏 土師器	A 14.7	平底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は直立する。	体部外面横位のヘラケズリ，内面剝離。口縁部内・外面ナデ。	砂粒，長石 赤褐色 普通	P 13 80% 北コーナー床面 体部外面砥石転用
		B 4.7				
		C 4.0				
2	高坏 土師器	A 16.8	坏部片。坏部は下位に稜をもち内彎気味に立ち上がる。	体部外面横位のヘラケズリ。口縁部内・外面ナデ。	長石，スコリア 明赤褐色 普通	P 14 50% 貯蔵穴内 覆土下層
		B (6.1)				



第13図 第2号住居跡出土遺物実測図

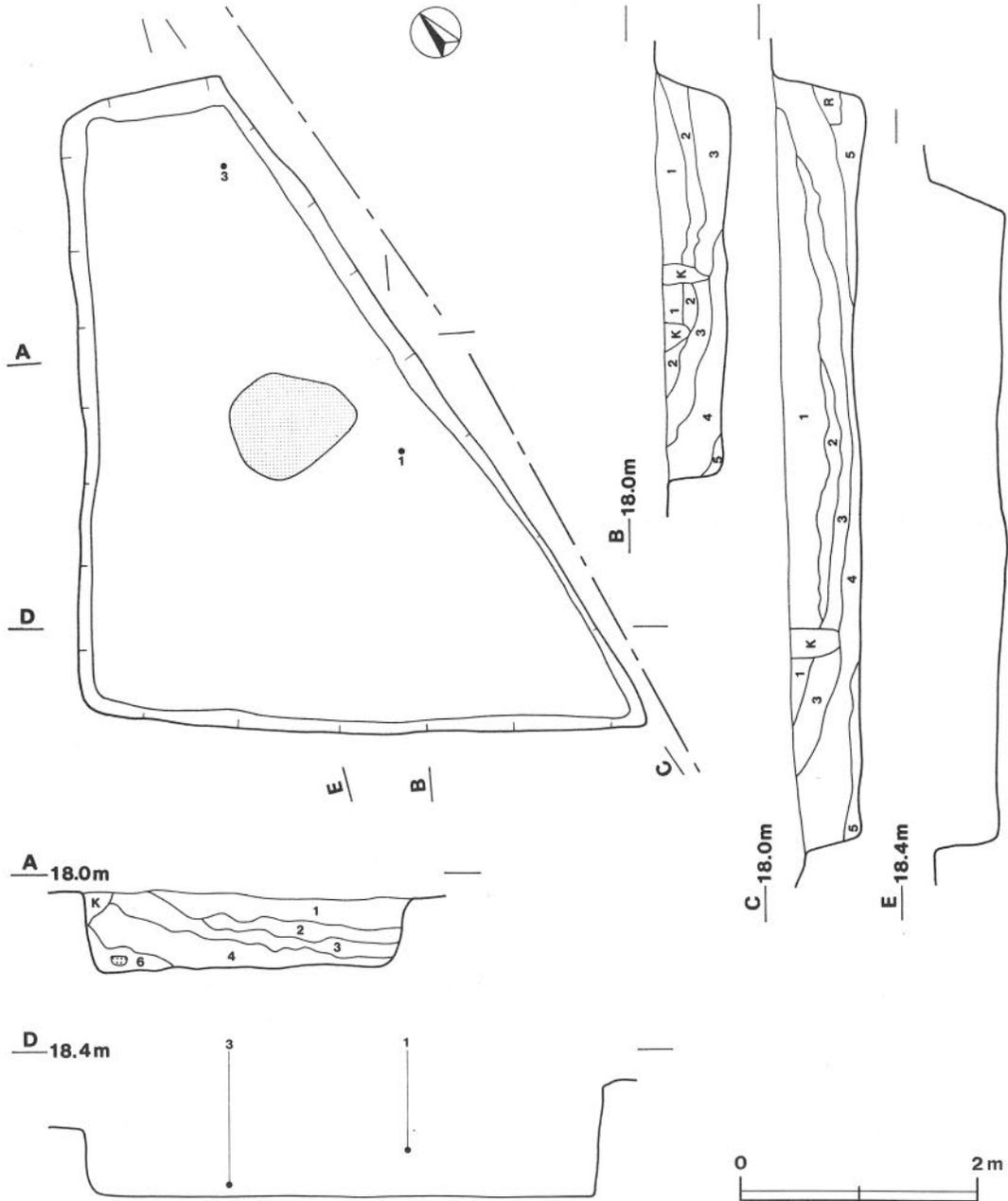
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第13図 3	高坏土師器	A 15.1 B (5.3)	坏部片。坏部は下位に稜をもち外傾して立ち上がる。	体部外面横位のヘラケズリ。口縁部内・外面ナデ。	長石、スコリア 橙色 普通	P 15 30% 南・北部 覆土下層
4	高坏土師器	A [16.2] B (3.4)	坏部片。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面横位のヘラケズリ後ナデ。	長石、スコリア 明赤褐色 普通	P 16 5% 貯蔵穴北東部 覆土上層
5	高坏土師器	D 13.0 E (6.5)	坏部欠損。脚部は円筒状で、裾部はほぼ水平に広がる。裾部にゆがみ有り。	裾部外面縦位のヘラケズリ。脚部外面縦位のヘラケズリ。	長石 赤褐色 普通	P 17 50% 西コーナー 床面
6	甕土師器	B (14.8) C [6.9]	突出した平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面横位のヘラケズリ。	長石 赤褐色 普通	P 18 30% 西コーナー 床面
7	甕土師器	B (2.8) C 6.5	底部片。突出した平底。	底部外面ナデ。	長石 にぶい橙色 普通	P 19 10% 北東壁中央部 覆土中層

第3号住居跡 (第14・15図)

位置 E2j<sub>0</sub>区

規模と平面形 南東部半分が調査区外に延びているため、長軸が不明であるが、短軸5.50 mの方形ないし長方形と思われる。

主軸方向 N-48°-W



第14図 第3号住居跡実測・遺物出土位置図

壁 壁高は、53～64cmでほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦で、全体に踏み固められている。

ピット 確認されなかった。

炉 主軸線上の北西寄りに付設されている。長径106cm・短径90cmの不整楕円形で、床を10cm程掘り窪めた地床炉である。覆土は1層で、焼土粒子を多量、焼土小ブロックを少量含むにぶい赤褐色土である。

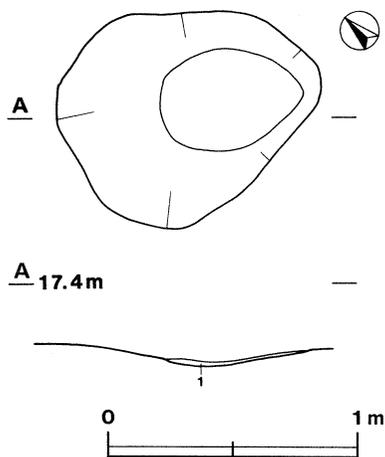
貯蔵穴 確認されなかった。

覆土 6層からなる。1～4層はローム粒子・焼土粒子を少量含む黒褐色または暗褐色土、5層はローム小ブロックを含む褐色土、6層はローム粒子を含む暗褐色土である。

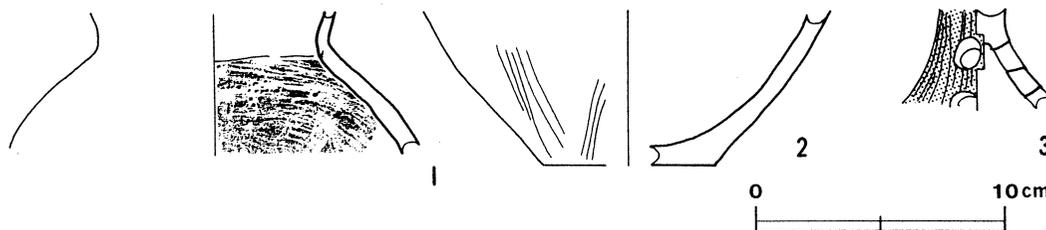
土師器片は主に5層から出土している。

遺物 第16図1の壺は炉南東側の覆土中層から、3の器台は北コーナー覆土下層から、それぞれ出土している。炉床からは土師器の甕の破片が出土している。

所見 本跡は、出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。



第15図 第3号住居跡炉実測図



第16図 第3号住居跡出土遺物実測図

### 第3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第16図 1	壺 土師器	B (5.8)	体部上半部片。	体部外面横ナデ、内面ハケ目整形。頸部外面縦位のヘラミガキ。	長石、スコリア 橙色 普通	P 21 10% 炉南東側 覆土中層
2	甕 土師器	B (6.2) C [7.0]	底部片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面縦位のヘラミガキ、内面横ナデ。	長石 にぶい橙色 普通	P 22 10% 北部 覆土下層
3	器台 土師器	E (4.2)	脚部片。脚部はラッパ状に開く。脚部に3孔が2段に穿たれる。	脚部外面ヘラミガキ。外面赤彩。	長石、スコリア 赤色 普通	P 20 30% 北コーナー 覆土下層

第4号住居跡（第17図）

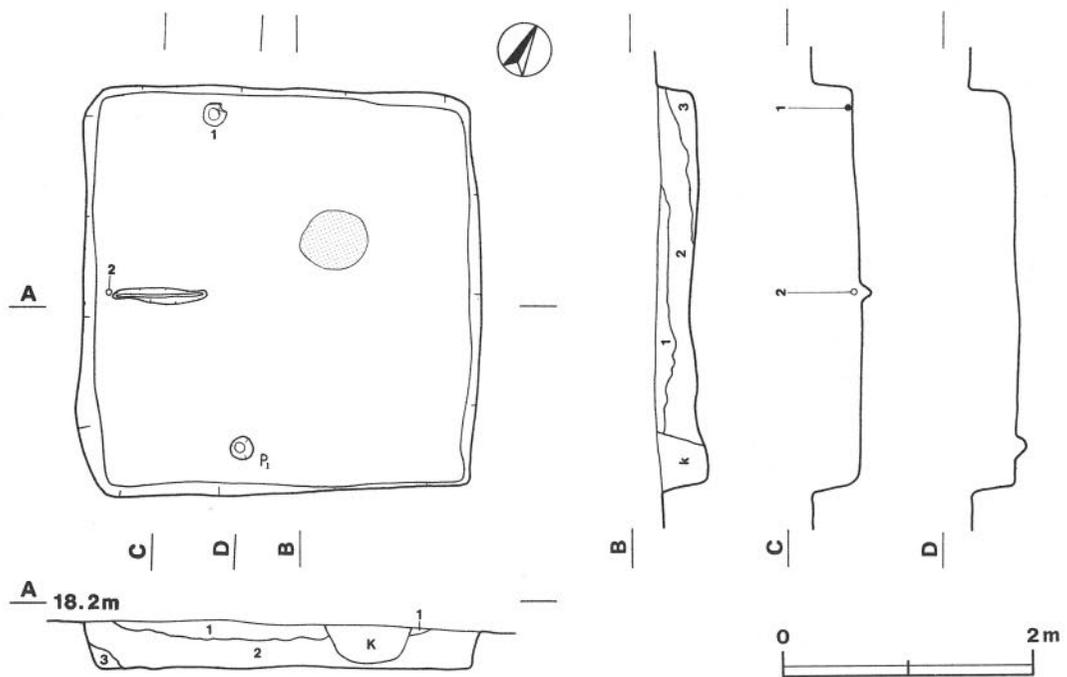
位置 E2i<sub>3</sub>区

規模と平面形 長軸3.25 m・短軸3.20 mの方形。

主軸方向 N-28°-W

壁 壁高は、25~35cmでほぼ垂直に立ち上がっている。

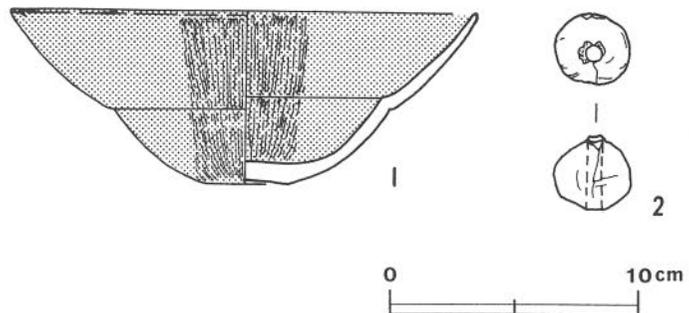
床 平坦で、全体に踏み固められている。特に、床の周囲が堅緻である。南西壁中央部から床中央部に向かって延びる溝が確認されている。長さ77cm，上幅7~13cm，深さ5~7cmで，V字状に掘り込まれており，間仕切り溝と考えられる。



第17図 第4号住居跡実測図

ピット 1か所。P<sub>1</sub>は径28cmの円形で、深さは8cm程である。南東壁寄りのほぼ中央部に位置しており，出入口施設に伴うピットと考えられる。

炉 主軸線上の北西寄りに付設されている。長径54cm，短径47



第18図 第4号住居跡出土遺物実測図

cmの楕円形で、床をわずかに掘り窪めた地床炉である。炉床は火熱を受けた痕跡の確認はできるが、赤変硬化の程度は弱い。

**貯蔵穴** 確認されなかった。

**覆土** 3層からなる。1・2層はローム粒子を少量含む黒褐色または暗褐色土、3層はローム粒子を多量に含む褐色土である。土師器片は主に2層から出土している。

**遺物** 第18図1の鉢は北西壁際の西コーナー寄りの覆土下層から、正位の状態で出土している。2の土玉は南西壁ほぼ中央部の覆土下層から出土している。

**所見** 本跡は、出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。

#### 第4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第18図 1	鉢 土師器	A 18.8	平底。体部は半球状で、中位に稜を持ち、口縁部は大きく内彎気味に立ち上がる。	体部内・外面ヘラミガキ。内・外面赤彩。	スコリア 赤色 普通	P 23 90% 北西壁際の西コーナー寄り 覆土下層
		B 7.0				
		C 3.1				

図版番号	器種	計測値 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第18図2	土玉	3.0	3.1	—	6.0	22.8	100	南西壁中央部覆土下層	DP3

#### 第5号住居跡 (第19図)

**位置** E2c<sub>1</sub>区

**規模と平面形** 長軸3.70 m・短軸3.50 mの方形。

**主軸方向** N-28°-W

**壁** 壁高は、8~12cmでほぼ垂直に立ち上がっている。

**床** 平坦であるが、床の中央部は柔らかく、北東側半分は壁際まで踏み固められている。壁から10~60cm離れて、幅25~70cm、深さ10~20cmの溝状の掘り方が巡っている。

**ピット** 1か所。P<sub>1</sub>は、長径36cm、短径22cmの楕円形で、深さは10cmである。南東壁寄りに位置しており、出入口施設に伴うピットと考えられる。

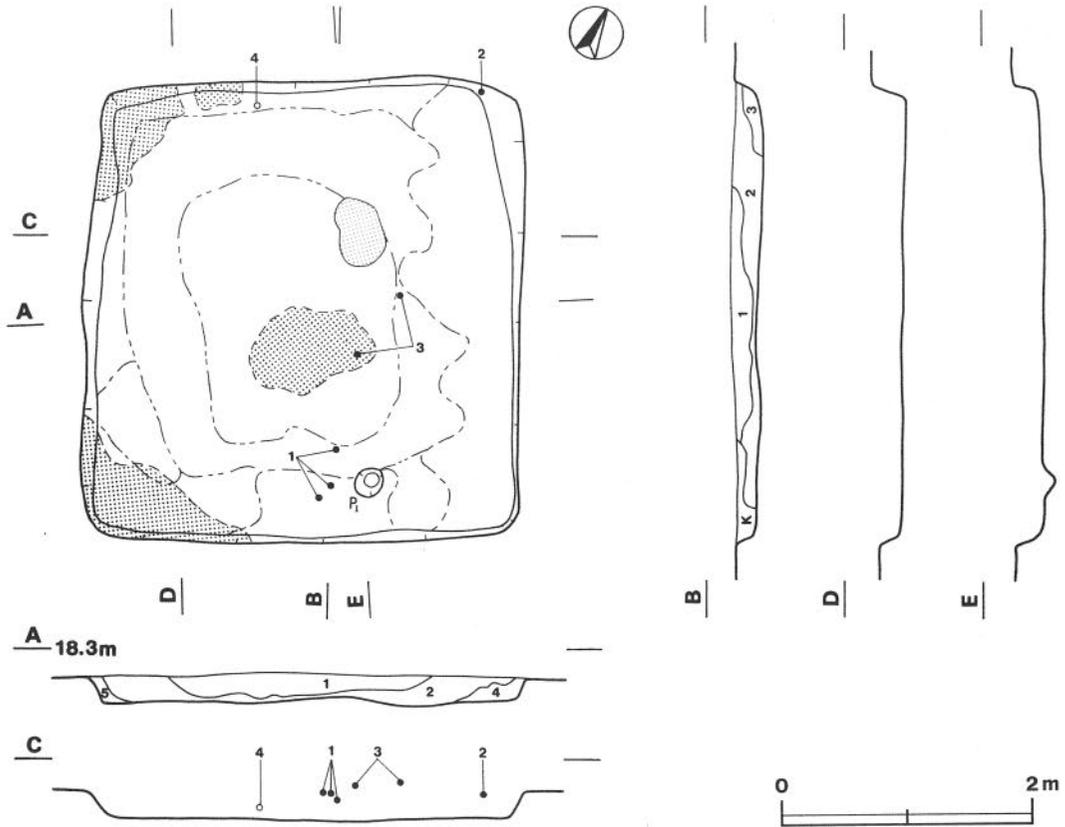
**炉** 主軸線上の北西寄りに付設されている。長径56cm、短径35cmの楕円形で、床を2cm程皿状に掘り窪めた地床炉である。覆土は1層で、焼土粒子を多量、焼土小ブロックを少量含むにぶい赤褐色土である。

**貯蔵穴** 確認されなかった。

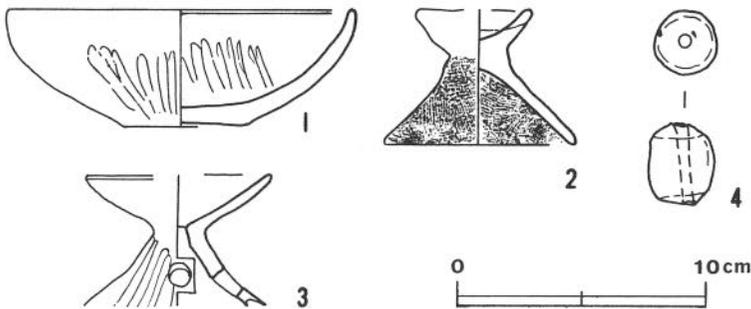
**覆土** 5層からなる。1層はローム粒子を極少量含む黒褐色土、2・3層は焼土粒子、炭化物を含む暗褐色土、4層は焼土粒子を含む暗赤褐色土、5層はローム粒子を少量含む暗褐色土である。

土師器片は主に2層から出土している。

遺物 第20図1の坏はP<sub>1</sub>西側の覆土上層から散在して、2の器台は北コーナー覆土上層から正位の状態で出土している。また、中央部や北コーナーの床面から炭化材が、壁際の床面から多量の焼土が確認されている。



第19図 第5号住居跡実測図



所見 本跡は、出土遺物等から古墳時代前期の住居跡で、炭化材や焼土の出土状況から焼失家屋と考えられる。

第20図 第5号住居跡出土遺物実測図

## 第5号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第20図 1	坏 土師器	A 14.0	平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	底部ヘラケズリ。体部内・外面ヘラミガキ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒、礫 橙色 普通	P 24 90% P <sub>1</sub> 西側 覆土上層
		B 4.7				
		C 4.5				
2	器台 土師器	A [ 4.2]	脚部はラッパ状に開く。器受部は外傾して立ち上がる。	脚部外面縦位のハケ目整形, 内面横位のハケ面整形。器受部外面輪積み痕, 指頭痕有り。	スコリア にぶい橙色 普通	P 25 90% 北コーナー 覆土上層
		B 5.5				
		D 7.1				
		E 3.9				
3	器台 土師器	A [ 7.5]	裾部欠損。脚部はラッパ状に開く。器受部は外傾して立ち上がる。脚部に3孔, 器受部中央に貫通孔が穿たれる。	脚部外面縦位のヘラミガキ。 器受部内面縦位のヘラミガキ, 外面ナデ。	長石 にぶい褐色 普通	P 26 40% 炉南部 覆土上層
		B ( 5.3)				
		E ( 3.1)				

図版番号	器種	計測値 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第20図4	土玉	3.3	2.5	—	4.0	23.3	100	北西壁西寄り覆土下層	DP4

## 第6号住居跡 (第21図)

位置 E1b<sub>4</sub>区

規模と平面形 長軸6.00 m・短軸5.20 mの長方形。

主軸方向 N-60°-W

壁 壁高は、25~40cmでほぼ垂直に立ち上がっている。西コーナーを除き、壁に沿って、上幅5~8 cm、深さ5~7 cmで、U字状に掘り込まれた溝が確認されている。

床 西コーナーが攪乱を受けているが、全体に平坦である。炉の周辺は軟弱であるが、出入口ピットから貯蔵穴の周辺部は踏み固められている。

ピット 1か所。P<sub>1</sub>は長径24cm・短径15cmの楕円形で、深さは35cmである。南東壁際の貯蔵穴の脇に位置しており、出入口施設に伴うピットと考えられる。

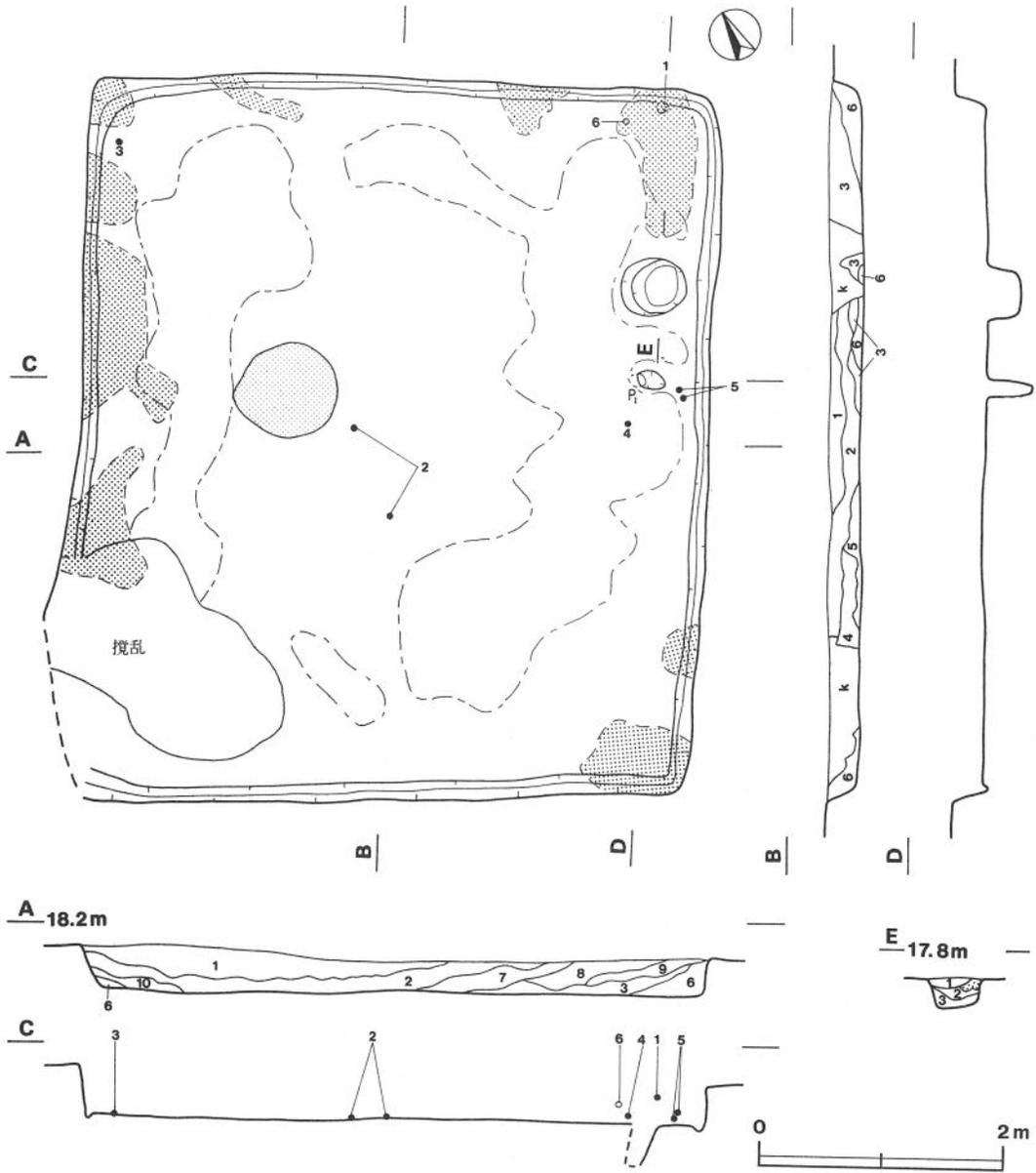
炉 主軸線上北西寄りに付設されている。長径85cm、短径78cmのほぼ円形で、床を3 cm程掘り窪めた地床炉である。覆土は1層で、焼土粒子を多量に含むにぶい赤褐色土である。

貯蔵穴 南東壁際の東コーナー寄りに付設されている。規模は長径55cm、短径48cmの楕円形で、深さは25cmである。底面は皿状で、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は3層からなり、1層は焼土粒子を少量含む暗褐色土、2層は焼土大ブロックを多量に含む暗褐色土、3層はローム粒子を少量含む暗褐色土である。

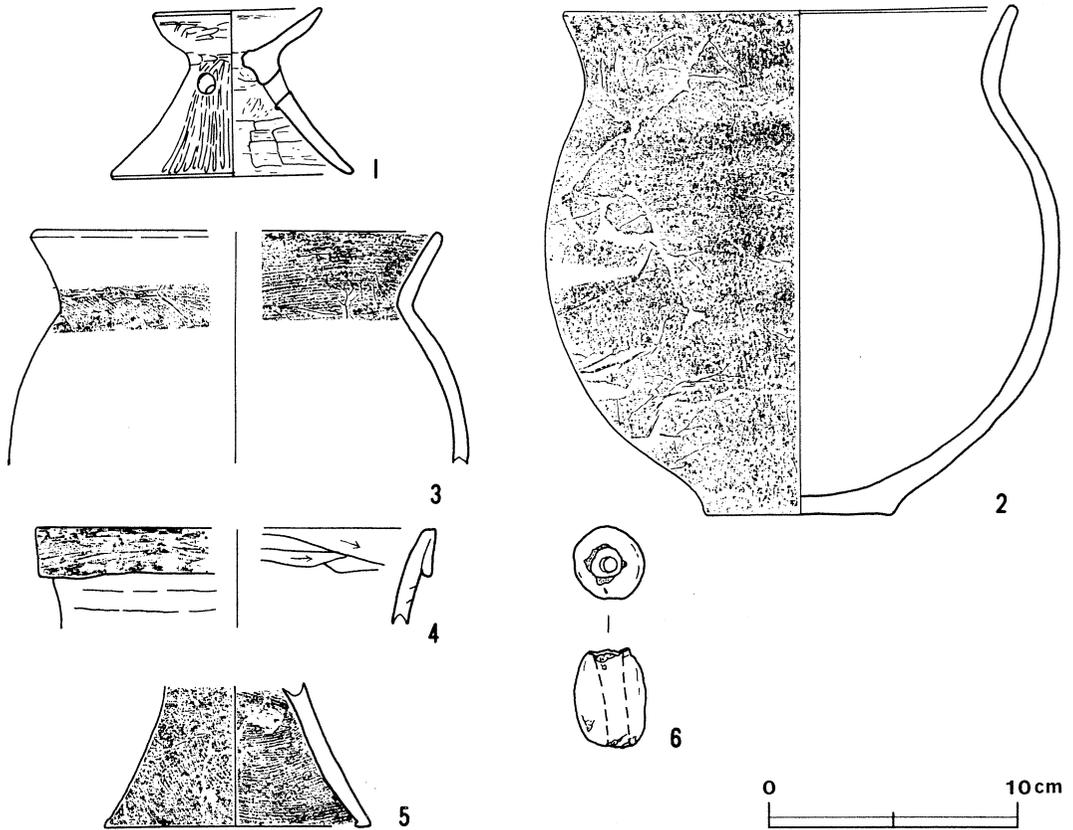
覆土 10層からなる。1~8層はローム小・中ブロックを多量に含む暗褐色土または褐色土で、9・10層はローム粒子を少量含む暗褐色土である。人為的な埋め戻しと思われ、土師器片は、主に2層から出土している。

遺物 第22図2の甕は炉南側の床面からつぶれた状態で、1の器台は東コーナーの覆土上層から斜位の状態出土している。また、1の器台の西側からは6の土玉が出土している。

所見 本跡は、出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。



第21図 第6号住居跡実測・遺物出土位置図



第22図 第6号住居跡出土遺物実測図

第6号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第22図 1	器台 土師器	A 6.9 B 6.7 D 9.9 E 4.8	脚部はラッパ状に開く。器受部は内彎気味に立ち上がる。脚部に3孔、器受部中央に貫通孔が穿たれる。	脚部外面縦位のヘラミガキ、内面横ナデ。器受部内・外面横ナデ。	スコリアにぶい橙色普通	P 27 100% 東コーナー 覆土上層
2	甕 土師器	A 18.4 B 20.5 C 7.7	突出した平底。体部は球状で中位に最大径を持つ。口縁部は緩く外反して立ち上がる。	体部内面剝離、外面ハケ目整形後縦位のヘラミガキ。口縁部内・外面ハケ目整形後縦位のヘラミガキ。	長石赤褐色普通	P 28 70% 炉南側 床面 外面煤付着
3	甕 土師器	A [16.2] B (9.4)	口縁部片。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面ハケ目整形後横ナデ。	スコリアにぶい橙色普通	P 29 10% 北コーナー 覆土下層
4	甕 土師器	A [16.3] B (4.0)	口縁部片。口縁部はやや外反して立ち上がる。折り返し口縁。	頸部外面輪積み痕。口縁部内面横ナデ、外面横位のハケ目整形。	細砂粒にぶい橙色普通	P 30 10% 出入口南側 覆土下層
5	台付甕 土師器	D 10.7 E (5.7)	台部片。台部は「ハ」の字状に開く。	台部外面縦位、内面横位のハケ目整形。	長石、スコリアにぶい橙色普通	P 31 10% 出入口南側 覆土下層

図版番号	器種	計測値 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第22図6	土玉	4.0	2.9	—	11	29.2	100	東コーナー覆土中層	DP 5

### 第7号住居跡 (第23・24図)

位置 E1a7区

規模と平面形 長軸5.40 m・短軸5.00 mの方形。

主軸方向 N-51°-W

壁 壁高は、18~26cmで垂直に立ち上がっている。壁に沿って、上幅10~12cm、深さ5~12cmで、U字状に掘り込まれた溝が全周している。

床 平坦で、全体に踏み固められている。南東壁の中央部から床中央部に向かって延びる、長さ160cm、上幅6~8cm、深さ5cmで、V字状に掘り込まれた、間仕切り溝と考えられる溝が確認されている。

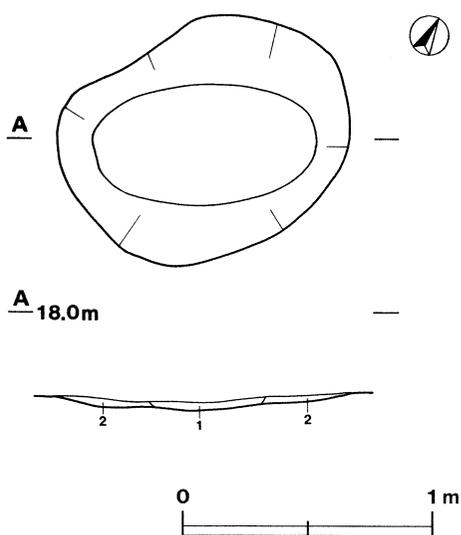
ピット 1か所。P<sub>1</sub>は長径24cm、短径20cmの楕円形で、深さは20cmである。南東壁際の貯蔵穴の脇に位置しており、出入口施設に伴うピットと考えられる。

炉 主軸線上北西寄りに付設されている。長径118cm、短径90cmの楕円形で、床を5cm程掘り窪めた地床炉である。覆土は2層からなり、1層は焼土粒子を少量含む暗赤褐色土、2層は焼土小ブロックを多量に含むにぶい赤褐色土である。

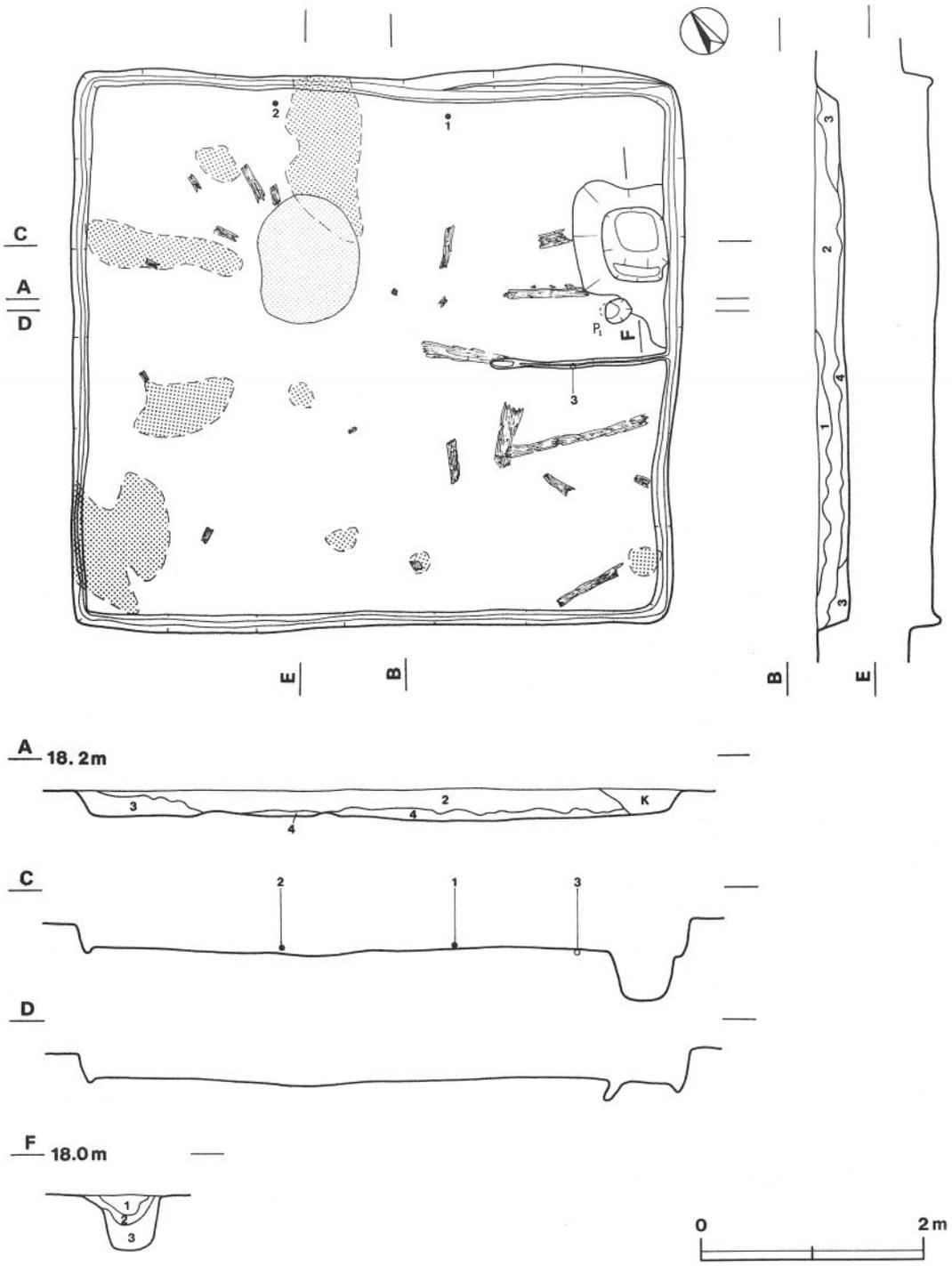
貯蔵穴 南東壁際の東コーナー寄りに付設されている。規模は長径68cm、短径58cmの方形で、深さは46cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。覆土は3層からなり、1層はロームブロックを多量に含む褐色土、2層は焼土粒子を少量含む黒褐色土、3層はローム粒子を多量に含む暗褐色土である。

覆土 4層からなる。1層は自然に堆積したと思われる暗褐色土。2・3層はロームブロックを多量に含む褐色土で、人為的な埋め戻しと思われる。4層は炭化材・焼土粒子を少量含む暗褐色土である。土師器片は主に2層から出土している。

遺物 床面から多量の炭化材が出土している。第25図1の壺は北東壁際中央部の覆土下層から、その北西側からは2の台付甕が、それぞれつぶれた状態で出土している。

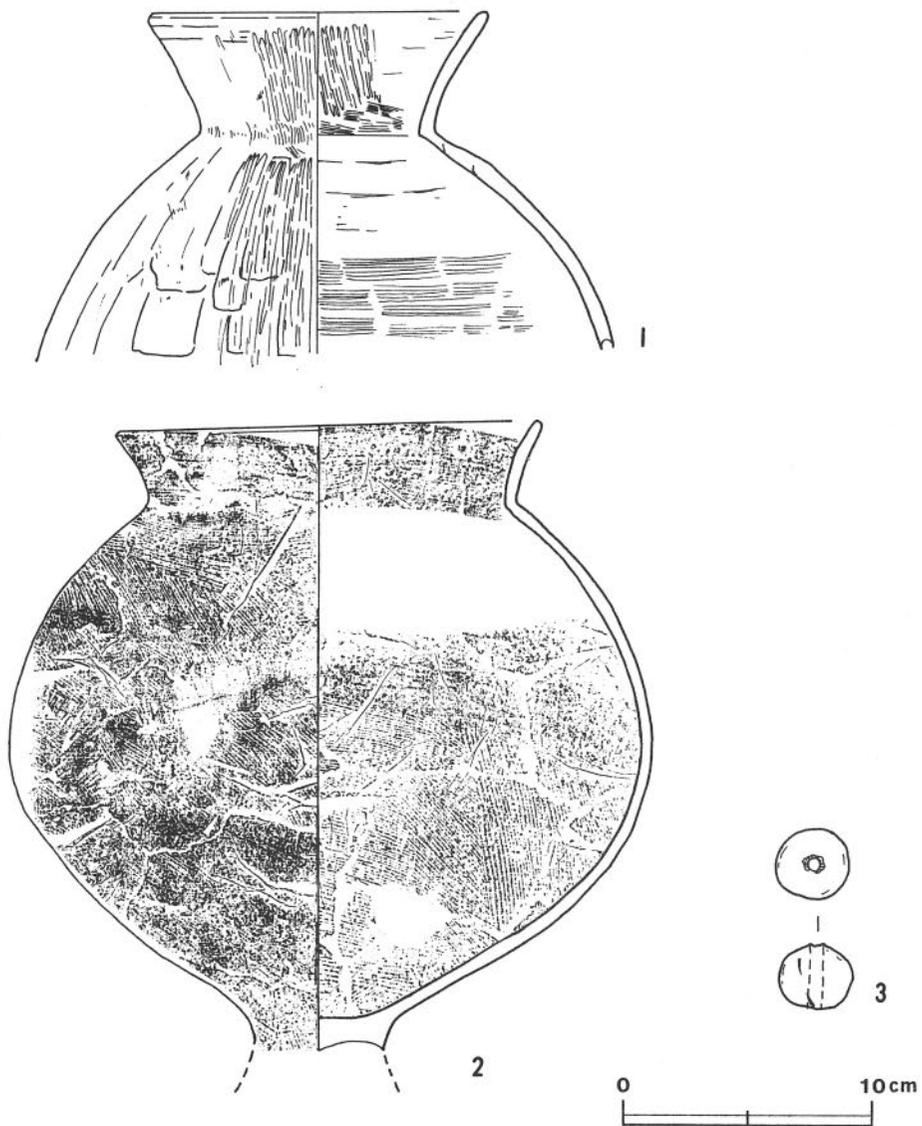


第23図 第7号住居跡炉実測図



第24図 第7号住居跡実測・遺物出土位置図

所見 本跡は、出土遺物等から古墳時代前期の住居跡で、床面から多量の炭化材や焼土が確認されていることから、焼失家屋と考えられる。



第25図 第7号住居跡出土遺物実測図

## 第7号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第25図 1	壺 土師器	A 13.6 B (13.6)	体部下半欠損。体部は内彎して立ち上がる。頸部は「く」の字状で、口縁部は外傾して立ち上がる。	体部外面ハケ目整形後縦位のヘラミガキ、内面ハケ目整形。口縁部内・外面ハケ目整形後縦位のヘラミガキ。	細砂粒 赤褐色 普通	P 32 50% 北東壁中央 覆土下層 外面煤付着
2	台付甕 土師器	A 17.0 B (25.7)	台部欠損。体部は球状で中位に最大径を持つ。頸部は「く」の字状で、口縁部は外反して立ち上がる。	体部外面斜位のハケ目整形後ナデ。口縁部内・外面ハケ目整形。	長石 にぶい橙色 普通	P 33 50% 北東壁北寄り 覆土下層 外面煤付着

図版番号	器種	計測値 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第25図3	土玉	2.6	3.0	—	5.0	18.2	100	出入口西側覆土下層	DP 6

## 第8号住居跡 (第26図)

**位置** E2d<sub>7</sub>区

**規模と平面形** 長軸4.67m・短軸3.50mの長方形。

**主軸方向** N-85°-W

**壁** 壁高は、6～16cmで垂直に立ち上がっている。

**床** 東部に攪乱を受けているが、残存している床面は、踏み固められている。壁下から幅15～50cm、深さ2～4cmの溝状の掘り方が、東壁を除いて巡っている。

**ピット** 確認されなかった。

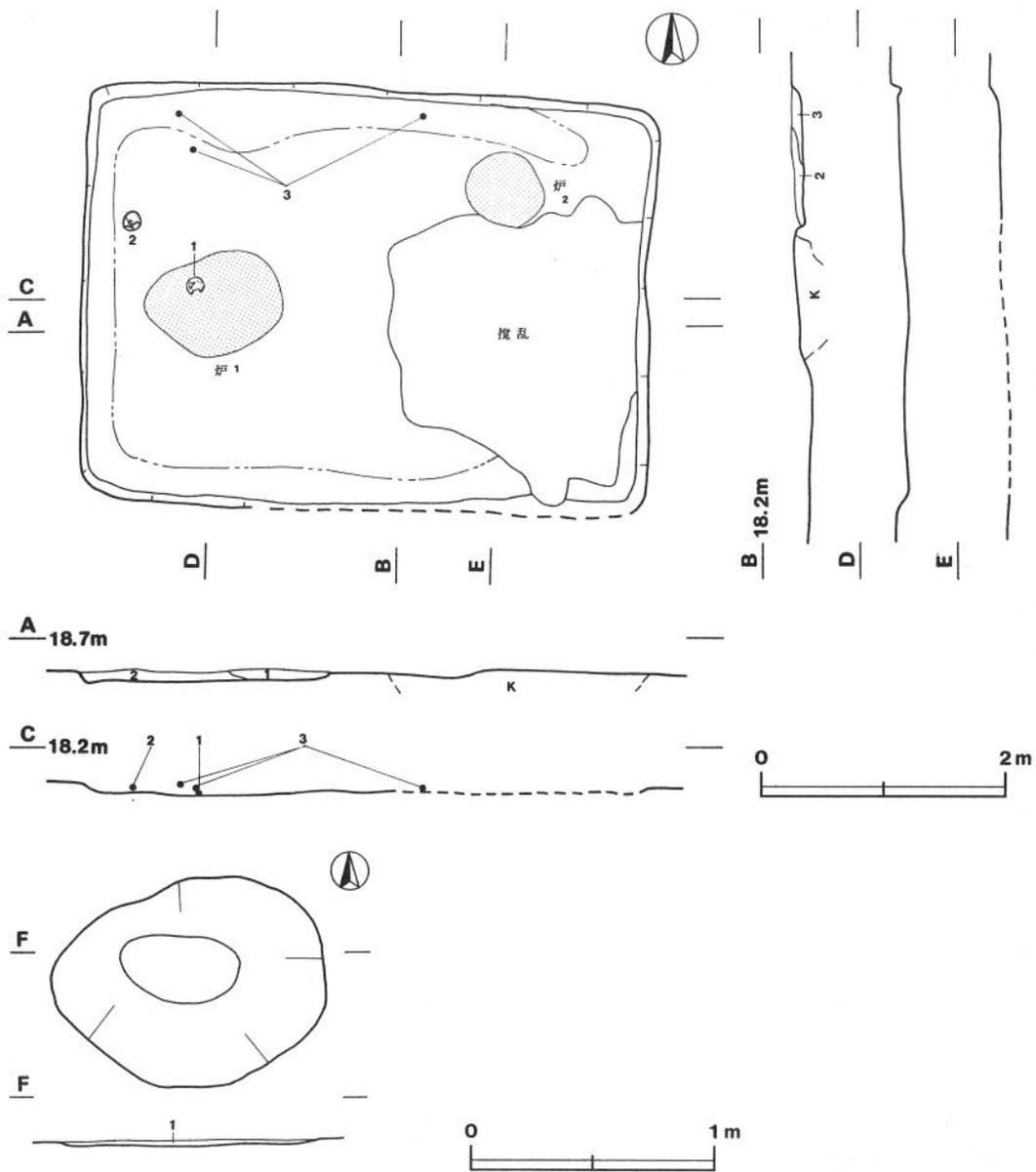
**炉** 主軸線上の西寄り(炉1)と、北東コーナー付近(炉2)の2か所に付設されている。炉1は、長径112cm、短径85cmの楕円形で、床を3cm程掘り窪めた地床炉である。炉2は、長径65cm、短径60cmの円形で、床を2cm程掘り窪めた地床炉である。いずれも覆土は1層であり、焼土粒子を多量に含む暗赤褐色土である。

**貯蔵穴** 確認されなかった。

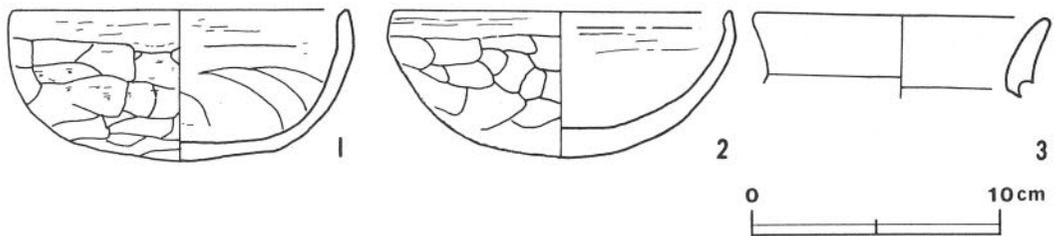
**覆土** 3層からなる。いずれもローム粒子を少量含む、暗褐色及び黒褐色土であり、自然堆積と思われる。

**遺物** 遺物の大半は床面から出土しているが、量は少ない。第27図1の坏は炉北西部の床面から、2の坏は炉北西側の床面から、それぞれ正位の状態で出土している。

**所見** 本跡は、出土遺物等から古墳時代中期の住居跡と考えられる。



第26图 第8号住居跡実測・遺物出土位置図



第27图 第8号住居跡出土遺物実測図

### 第8号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第27図 1	坏 土師器	A 13.6	底体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は内傾する。	体部外面横位のヘラケズリ、内面ヘラミガキ。口縁部内・外面横ナデ。	細礫 赤色 普通	P 35 60% 炉北西部 床面
		B 5.9				
2	坏 土師器	A 13.6	底体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はやや内傾する。	体部外面横位のヘラケズリ、口縁部内・外面横ナデ。	長石、スコリア 明赤褐色 普通	P 34 100% 炉北西側 床面
		B 6.1				
3	甕 土師器	A 12.1	口縁部片。口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	長石、スコリア 橙色 普通	P 36 10% 北西コーナー 覆土下層
		B (3.3)				

### 第9号住居跡（第28・29図）

**位置** E2a区

**規模と平面形** 長軸5.64 m・短軸4.90 mの長方形。

**主軸方向** N-63°-W

**壁** 壁高は、50～60cmで垂直に立ち上がっている。壁に沿って、上幅6～10cm、深さ3～5cmで、U字状に掘り込まれた溝が全周している。

**床** 平坦で、全体に踏み固められているが、特に南西部が堅緻である。北東壁の東コーナー寄りから北東壁に対し直行するように延びる、長さ106cm、上幅5～7cm、深さ10cmで、V字状に掘り込まれた、間仕切り溝が確認されている。

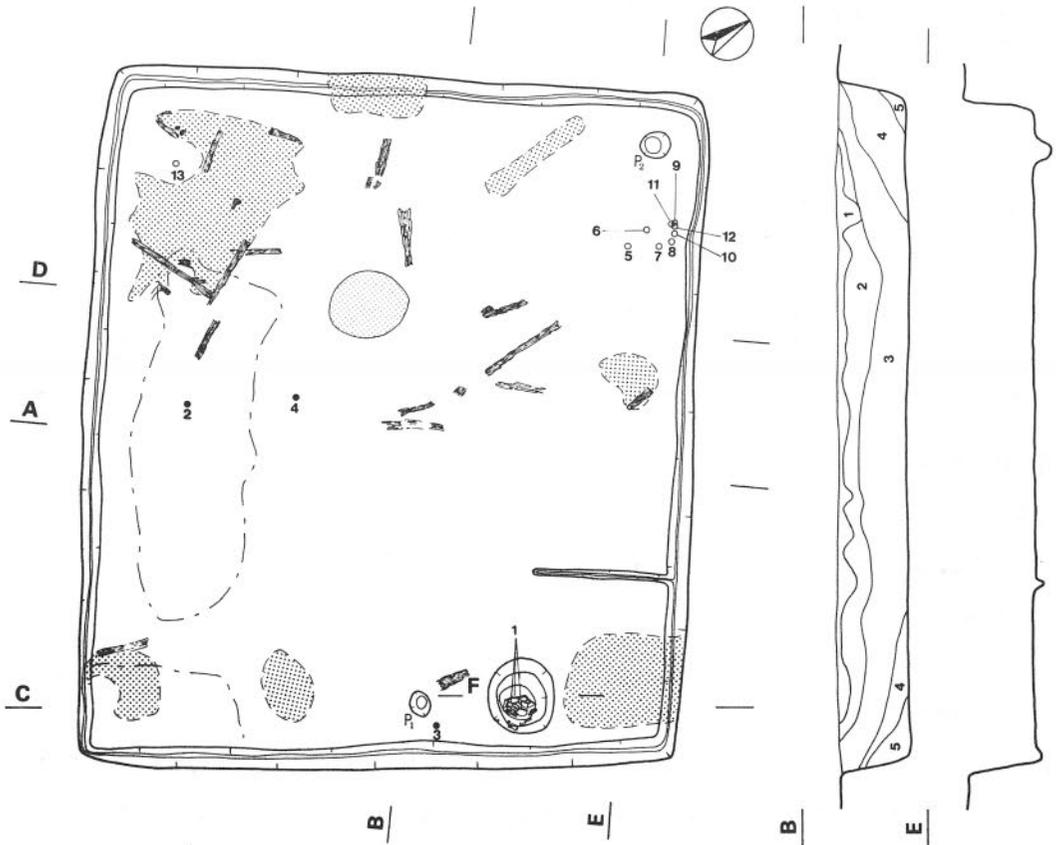
**ピット** 2か所。P<sub>1</sub>は長径22cm、短径16cmの楕円形で、深さは9cmである。南東壁際中央部で貯蔵穴の脇に位置しており、出入口施設に伴うピットと考えられる。P<sub>2</sub>は長径25cm、短径21cmの楕円形で、深さは13cmである。規模や配置から補助柱穴と考えられる。

**炉** 主軸線上北西寄りに付設されている。長径61cm、短径53cmの楕円形で、床を10cm程掘り窪めた地床炉である。覆土は2層からなり、1層は焼土粒子を少量含む褐色土、2層は焼土小ブロックを少量含む暗赤褐色土である。

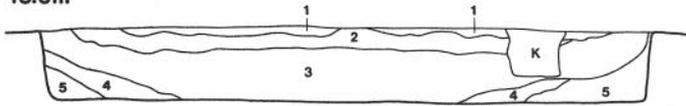
**貯蔵穴** 南東壁際の東コーナー寄りに付設されている。規模は長径61cm、短径53cmの楕円形で、深さは70cmである。底面は皿状で、壁は垂直に立ち上がっている。覆土は2層からなり、1層は焼土小ブロックを少量含む暗褐色土、2層は焼土粒子を少量含む暗褐色土である。

**覆土** 5層からなる。1層は自然に堆積した暗褐色土と思われる。2～4層はローム中ブロックを多量に含む暗褐色土で、人為的な埋め戻しと思われる。土師器片は主に3層から出土している。5層はローム粒子を含む暗褐色土である。

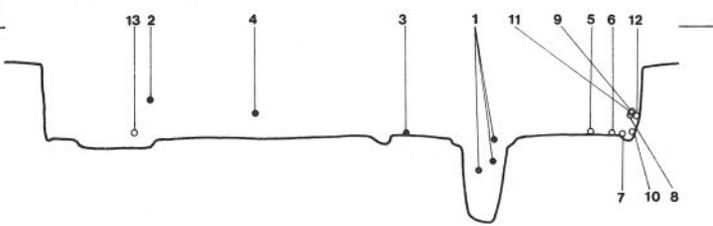
**遺物** 炭化材が、特に北西側の床面から出土している。第30図1の甕は貯蔵穴の覆土上層からつぶれた状態で、3の台付甕は出入口の床面から斜位の状態で出土している。また、北コーナー付近



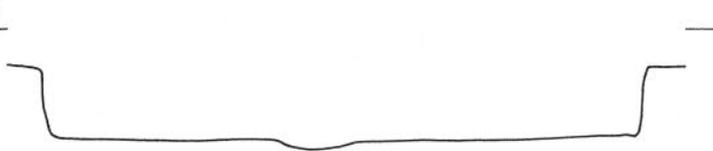
A 18.3m



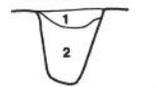
C



D



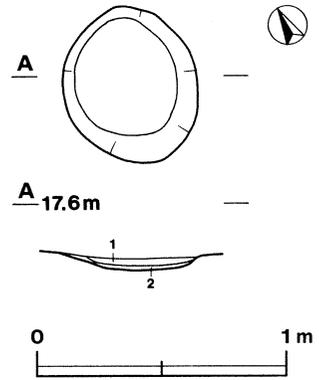
F 17.6m



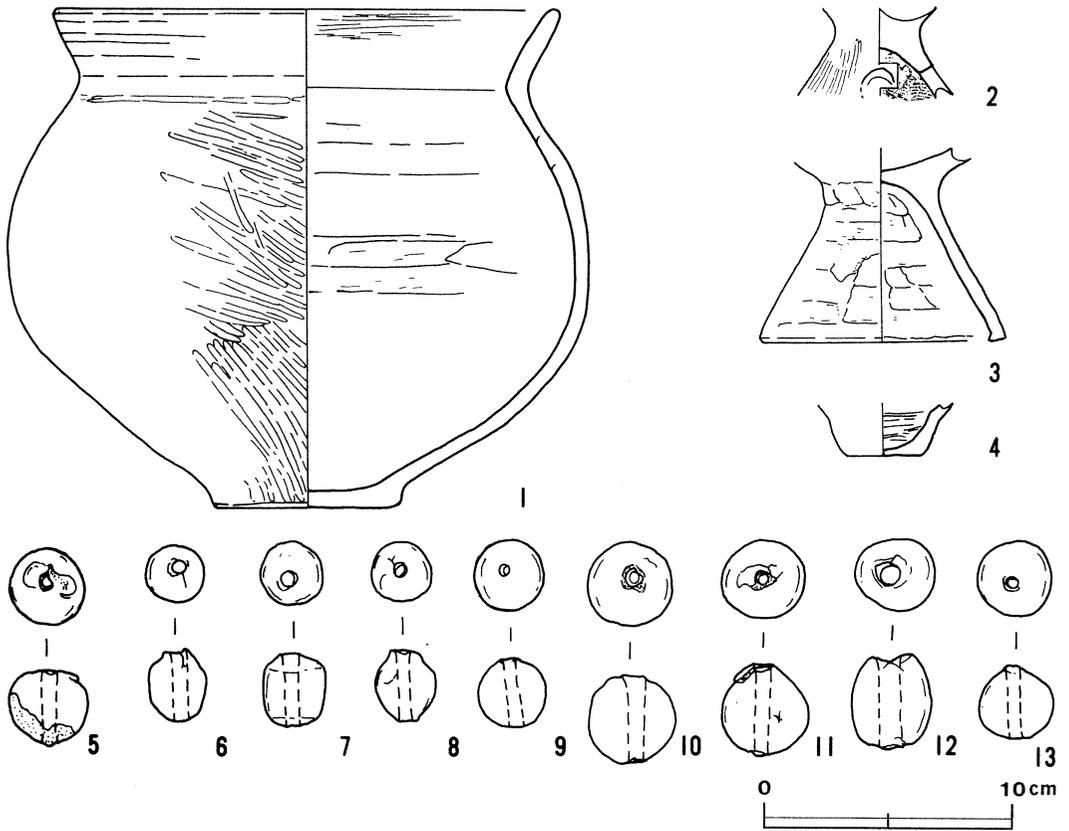
第28図 第9号住居跡実測・遺物出土位置図

の覆土下層からは、5～12の8個の土玉が集中して出土している。

所見 本跡は、出土遺物等から古墳時代前期の住居跡で、床面から多量の炭化材が確認されていることから、焼失家屋と考えられる。



第29図 第9号住居跡炉実測図



第30図 第9号住居跡出土遺物実測図

## 第9号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第30図 1	甕 土師器	A 20.4	突出した平底。体部は球状で、 中位に最大径をもつ。口縁部は 外傾して立ち上がる。	体部外面ハケ目整形後斜位のヘ ラミガキ、内面ヘラナデ。口縁 部内・外面横ナデ。	長石、スコリア 明赤褐色 普通	P 38 80 % 貯蔵穴覆土上層 体部外面煤付着
		B 20.2				
		C 7.4				
2	高坏 土師器	B (3.6)	脚部片。脚部はラッパ状に開 く。脚部に3孔が穿たれる。	脚部外面縦位のヘラミガキ、内 面斜位のハケ目整形。	長石、スコリア 赤色 普通	P 37 20 % 南西壁中央部 覆土上層
3	台付甕 土師器	B (7.3)	台部片。台部は「ハ」の字状に 開く。	体部内・外面ヘラナデ。	長石 にぶい橙色 普通	P 39 10 % 出入口 床面
		D 10.0				
		E 6.5				
4	ミニチュア 土師器	B 2.2	鉢形。平底。体部は外傾気味に 立ち上がり、口縁部は外反する。	体部内・外面横ナデ。	長石 にぶい橙色 普通	P 40 60 % 炉南東側 覆土中層
		C 3.0				

図版番号	器種	計測値 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第30図5	土玉	3.0	3.0	—	6.0	(25.0)	90	北コーナー覆土下層	DP7
6	土玉	2.9	2.3	—	6.0	13.4	100	北コーナー覆土下層	DP8
7	土玉	2.9	2.5	—	6.0	18.0	100	北コーナー覆土下層	DP9
8	土玉	2.9	2.4	—	5.0	14.7	100	北コーナー覆土下層	DP10
9	土玉	2.8	2.8	—	5.0	19.2	100	北コーナー覆土下層	DP11
10	土玉	3.6	3.4	—	7.0	32.8	100	北コーナー覆土下層	DP12
11	土玉	3.7	3.5	—	5.0	32.5	100	北コーナー覆土下層	DP13
12	土玉	3.9	3.2	—	9.0	31.7	100	北コーナー覆土下層	DP14
13	土玉	3.0	3.0	—	5.0	22.5	100	西コーナー覆土下層	DP15

## 第10号住居跡 (第31図)

位置 D1i<sub>0</sub>区

規模と平面形 長軸5.40 m・短軸4.90 mの長方形。

主軸方向 N-77°-W

壁 壁は削平されており、確認されなかった。幅30~50cm、深さ10cm程の溝状の掘り方が、出入口部を除いて巡っている。

床 全体に軟弱であり、上部の硬化面は削平されている。

ピット 1か所。P<sub>1</sub>は長径42cm、短径40cmの円形で、深さは12cmである。南東壁際の貯蔵穴脇に位置しており、出入口施設に伴うピットと考えられる。

炉 主軸線上北西寄りに付設されている。長径94cm、短径90cmの円形で、床を2cm程掘り窪めた地床炉である。

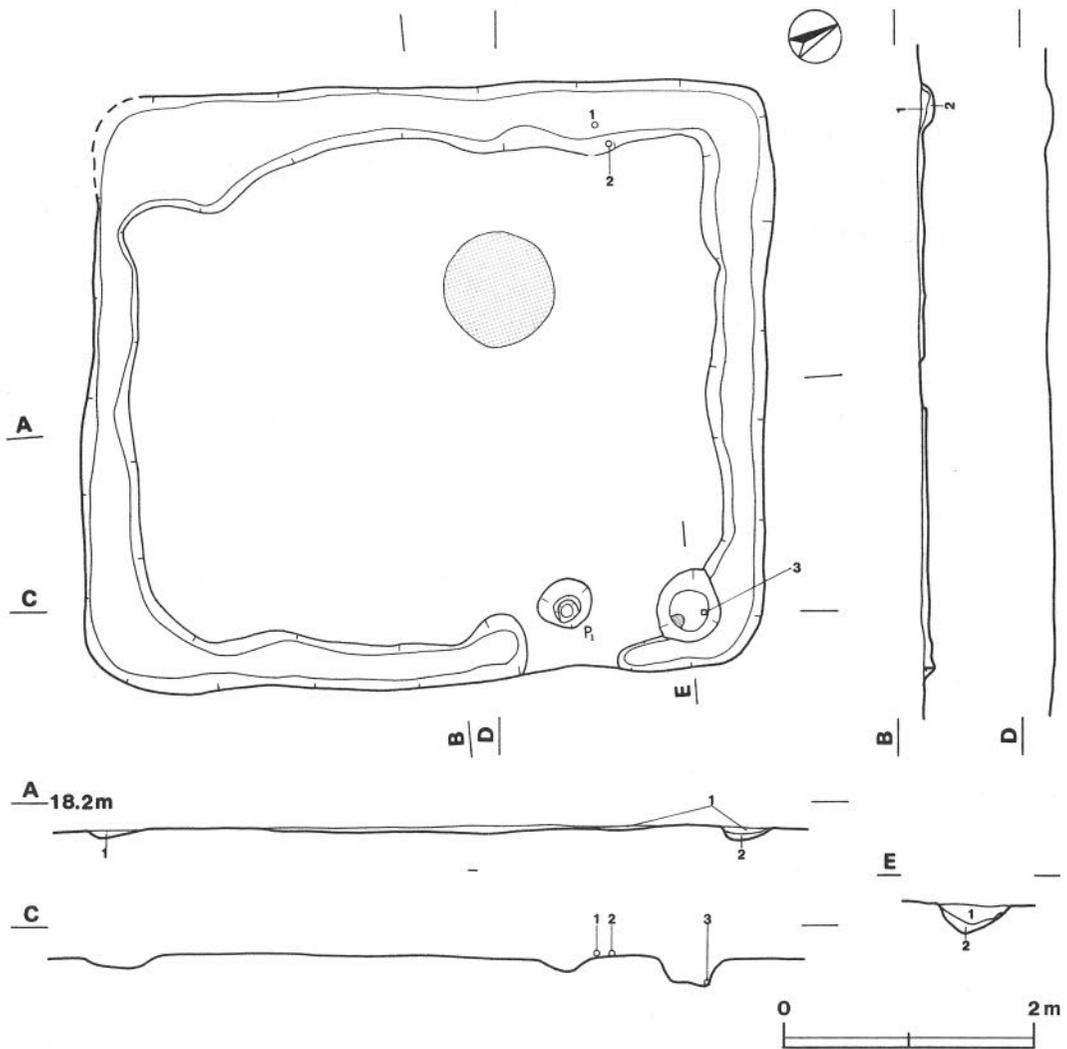
貯蔵穴 東コーナーに付設されている。規模は長径58cm、短径50cmの楕円形で、深さは24cmである。

底面は平坦で、壁は外傾している。底面から砥石と粘土が出土している。覆土は2層からなり、1層はローム粒子を少量含む暗褐色土、2層はローム小ブロックを少量含む褐色土である。

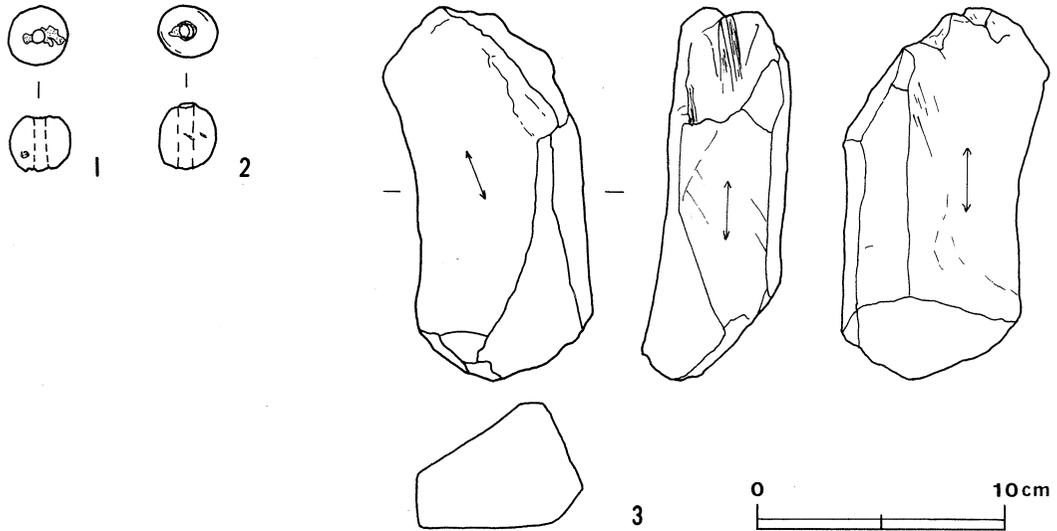
**覆土** 床面まで削平されており、掘り方の覆土として2層を確認したに過ぎない。2層ともローム小ブロックを少量含む、暗褐色土と褐色土である。

**遺物** 土師器の小破片が出土している。北西壁際から土師器の甕の体部片が出土している。貯蔵穴の覆土下層から第32図3の砥石が出土している。

**所見** 本跡は、出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。



第31図 第10号住居跡実測・遺物出土位置図



第32図 第10号住居跡出土遺物実測図

第10号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第32図1	土玉	2.2	2.4	—	6.0	12.3	100	北西壁北寄り覆土下層	DP16
2	土玉	2.6	2.3	—	5.0	13.3	100	北西壁北寄り覆土下層	DP17

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第32図3	砥石	15.2	8.9	4.9	682.0	泥岩	貯蔵穴内下層	Q4

第11号住居跡 (第33・34図)

位置 D2f<sub>6</sub>区

規模と平面形 長軸9.66 m・短軸9.60 mの方形。

主軸方向 N-64°-W

壁 壁高は、11~22cmで垂直に立ち上がっている。壁に沿って、上幅10~15cm、深さ3~5 cmで、U字状に掘り込まれた溝が全周している。

床 全体的に平坦であるが、硬化面は確認されなかった。

ピット 5か所。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は長径26~50cm、短径24~40cmの円形で深さは58~80cmである。規模や配列から主柱穴と考えられる。P<sub>5</sub>は長径28cm、短径24cmの楕円形で、深さ12cmである。南東壁際の貯蔵穴脇に位置しており、出入口施設に伴うピットと考えられる。

炉 7か所。炉1は、主軸線上の中央部に付設されている。長径96cm、短径85cmの楕円形で、床を5cm程掘り窪めた地床炉である。炉2・3は、P<sub>3</sub>とP<sub>4</sub>の間に、炉4・5は、P<sub>1</sub>とP<sub>4</sub>の間に、炉6・7は、P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>の間にそれぞれ付設されている。炉2～7の規模は、長径60～110cm、短径55～74cmの円形ないし楕円形で、床を2～4cm程掘り窪めた地床炉である。いずれの炉床も、火熱を受けた痕跡は確認できるが、炉1よりは赤変硬化の程度は弱い。覆土はいずれも1層で、焼土粒子を多量に含む暗赤褐色土である。

貯蔵穴 南コーナーに付設されている。規模は長径78cm、短径72cmの円形で、深さは43cmである。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がっている。覆土は2層からなり、1層はローム粒子を多量に含む暗褐色土、2層はローム小ブロックを多量に含む褐色土である。

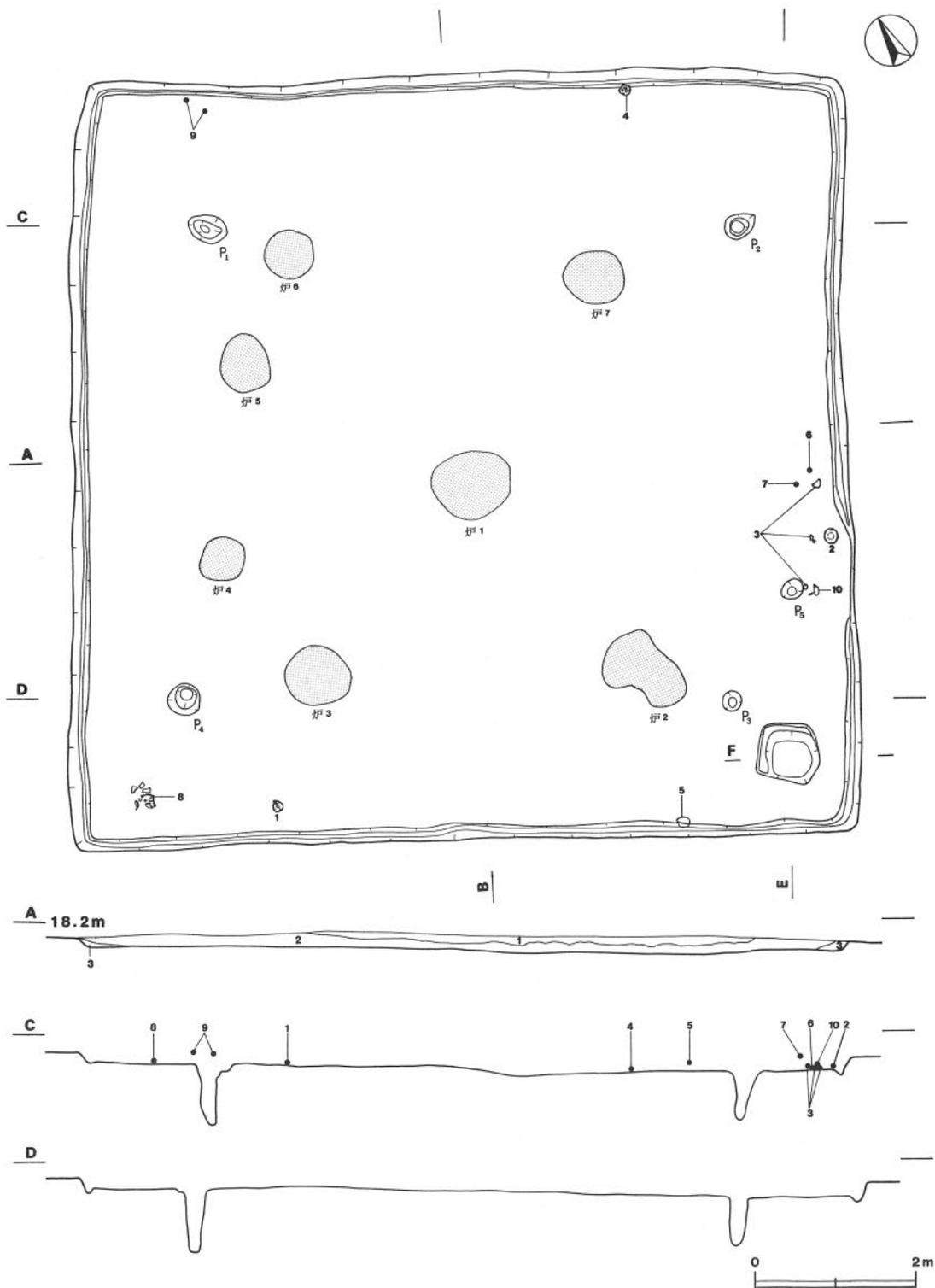
覆土 3層からなる。1・2層はローム粒子極少量を含む暗褐色土、3層はローム粒子を少量含む褐色土である。遺物は主に2層から出土している。

遺物 壁際からの出土量が多く、特に西コーナー付近からの出土が多い。西コーナーの覆土下層からは第35図1の埴が逆位の状態で、8の甕がつぶれた状態で出土している。2の埴は出入口床面から正位の状態で、6の鉢は出入口北東側の床面から正位の状態で出土している。また、10のミニチュア土器（高环形）も出入口床面から出土している。

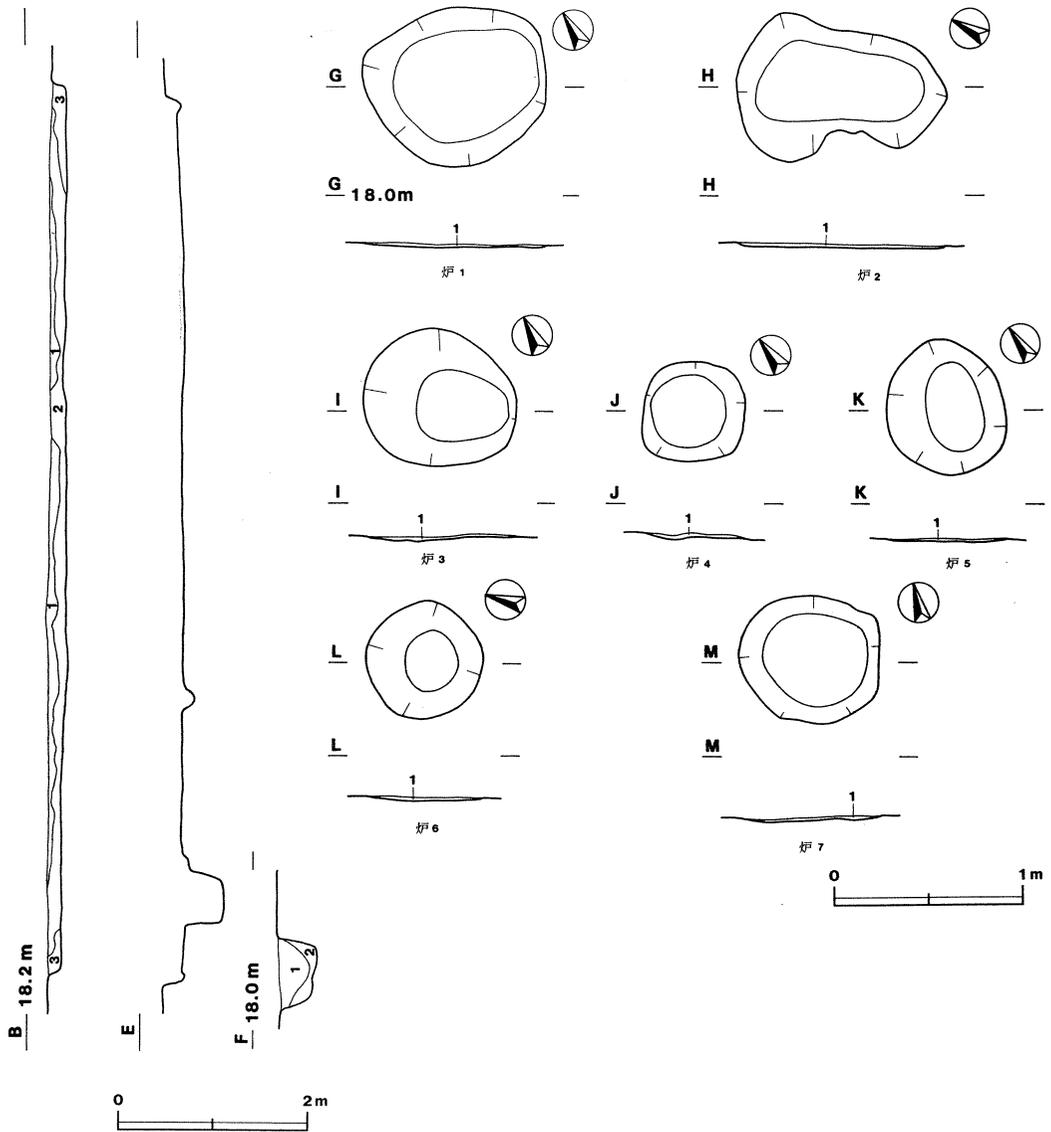
所見 本跡は、当遺跡の中で最大規模の住居跡で、出土遺物等から古墳時代中期の住居跡と考えられる。

第11号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第35図 1	埴 土師器	A 9.9	丸底気味の平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は内傾する。	体部外面ヘラケズリ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒、スコリア 赤褐色 普通	P 41 100% 西コーナー 床面
		B 8.1				
		C 4.4				
2	埴 土師器	A 13.3	焼成後底部穿孔。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は短く外反する。	体部外面横ナデ。内面放射状のヘラミガキ。口縁部内・外面横ナデ。赤彩。	長石、雲母 赤色 普通	P 42 90% 出入口床面 体部外面煤付着
		B (6.0)				
3	埴 土師器	A 13.7	体部は半球状で、口縁部は小さく外反する。	体部外面横位のヘラケズリ、内面放射状のヘラミガキ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒、スコリア 赤橙色 普通	P 43 80% 出入口北東側 覆土下層
		B 6.9				
4	坏 土師器	A 13.8	底体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はやや内傾する。	体部外面横位のヘラケズリ、内面剝離。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒、長石 内赤褐色 普通	P 44 80% 北東壁東寄り 覆土下層
		B 5.5				
5	鉢 土師器	A 15.9	底体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外反する。	体部外面斜位のヘラケズリ、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	長石、雲母 にぶい赤褐色 普通	P 45 90% 貯蔵穴西側 覆土下層
		B 5.9				
6	鉢 土師器	A 16.1	底体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外反する。	体部外面ナデ、内面剝離。口縁部内・外面横ナデ。	長石、雲母 赤褐色 普通	P 46 30% 出入口北東側 床面
		B 4.8				



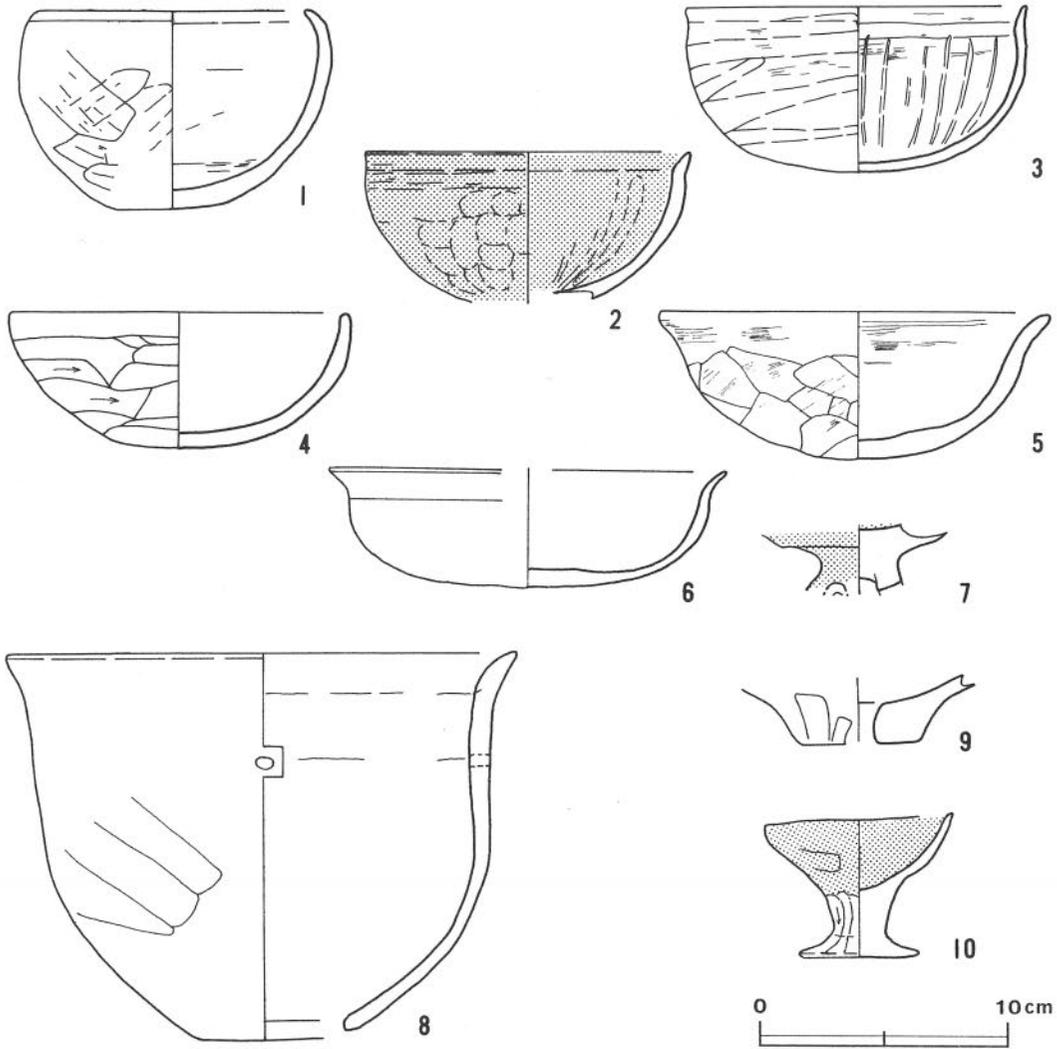
第33图 第11号住居跡実測・遺物出土位置図



第34図 第11号住居跡炉実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第35図 7	高坏 土師器	B (2.6)	坏部下に稜をもつ。	坏部外面縦位，内面放射状のヘラミガキ。	長石 赤色 普通	P 48 10% 出入口北東側 覆土下層
8	甗 土師器	A 20.5 B 15.7 C 6.4	体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外反して立ち上がる。単孔。体部上位に穿孔。	体部外面斜位のヘラケズリ。口縁部内・外面横ナデ。	長石 にぶい橙色 普通	P 49 80% 西コーナー 床面
9	甗 土師器	B (2.7) C (4.7)	底部片。突出した平底。単孔。	体部下端外面縦位のヘラケズリ。	砂粒，スコリア 浅黄橙色 普通	P 50 10% 北コーナー 覆土下層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第35図 10	ミニチュア	A	7.6	高坏形。裾部は扁平で小さい。脚部外面縦位のヘラケズリ。坏部内・外面ナデ。坏部内・外面赤彩。	長石、スコリア 赤色 普通	P 47 90% 出入口 床面
	土器	B	5.8			
	土器	D	4.8			
	土器	E	2.0			



第35図 第11号住居跡出土遺物実測図

## 第12号住居跡（第36図）

位置 D2g<sub>5</sub>区

規模と平面形 長軸6.20 m・短軸4.80 mの長方形。

主軸方向 N-60°-W

壁 壁高は、3～12cmで垂直に立ち上がっている。出入口部を除く壁に沿って、上幅5～15cm、深さ3～7cmで、U字状に掘り込まれた溝が確認されている。

床 平坦であるが、硬化面は確認されず全体的に軟らかい。

ピット 1か所。P<sub>1</sub>は長径45cm、短径28cmの楕円形で、深さは34cmである。南西壁際中央部に位置しており、出入口施設に伴うピットと考えられる。

炉 3か所。炉1は、主軸線上の北東寄りに付設されている。長径105cm、短径73cmの楕円形で、床を2cm程掘り窪めた地床炉である。炉2は、炉1の北西側に付設されている。長径78cm、短径46cmの楕円形で、床を4cm程掘り窪めた地床炉である。炉3は、炉1の南側に付設されている。長径56cm、短径50cmの楕円形で、床を6cm程掘り窪めた地床炉である。覆土はいずれも2層からなり、1層は焼土粒子を中量含む暗赤褐色土、2層は焼土小ブロックを少量含む暗赤褐色土である。

貯蔵穴 確認されなかった。

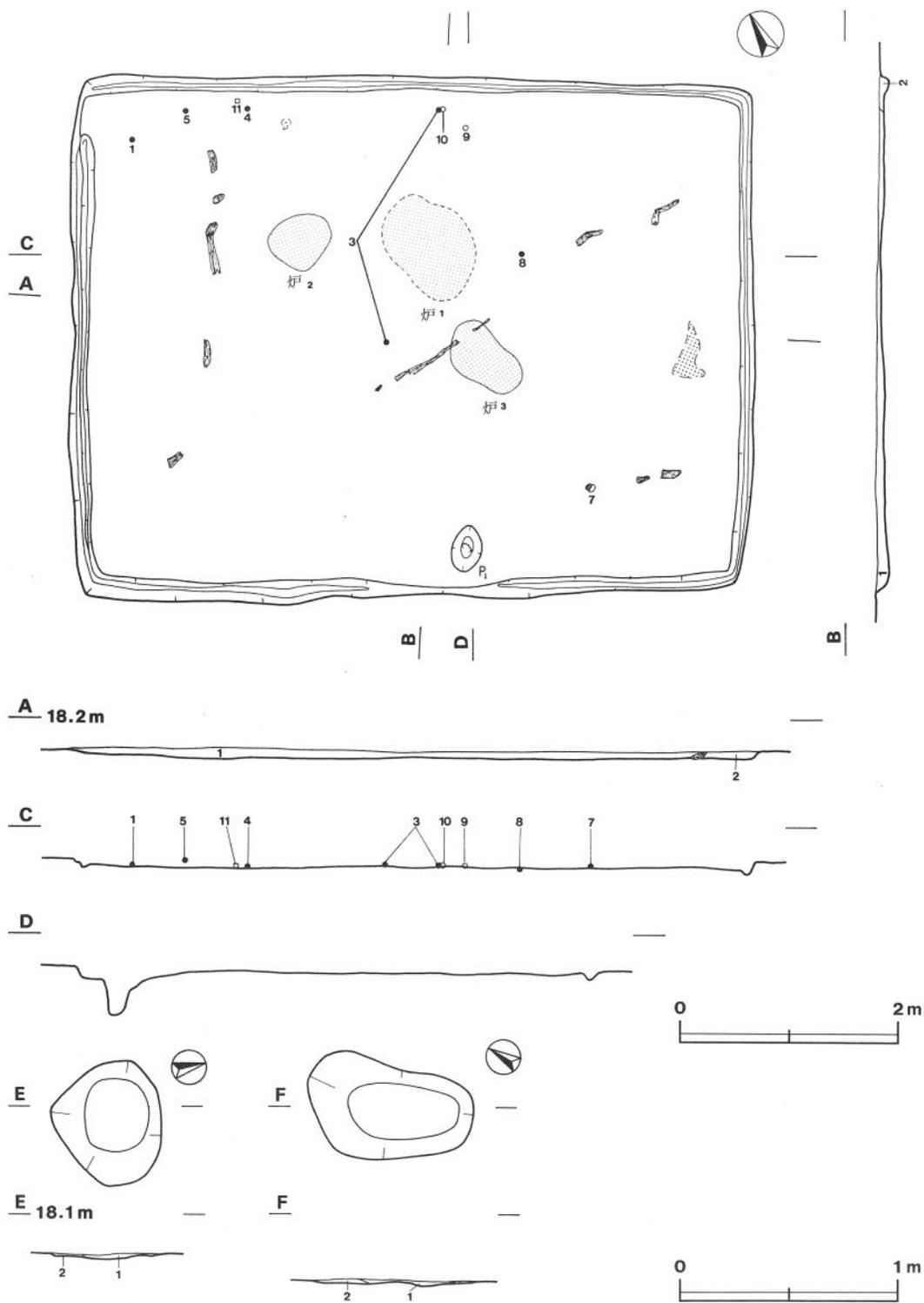
覆土 2層からなる。1層はロームブロックを多量に含む褐色土、2層はローム粒子を少量含む暗褐色土で、人為的な埋め戻しと考えられる。

遺物 床面から炭化材が出土している。第37図4の台付甕は北コーナーの床面から出土している。7のミニチュア土器（甕形）は南コーナーの床面から斜位の状態で、9の舟形土製品と10の土玉は北東壁中央部の床面から、それぞれ出土している。

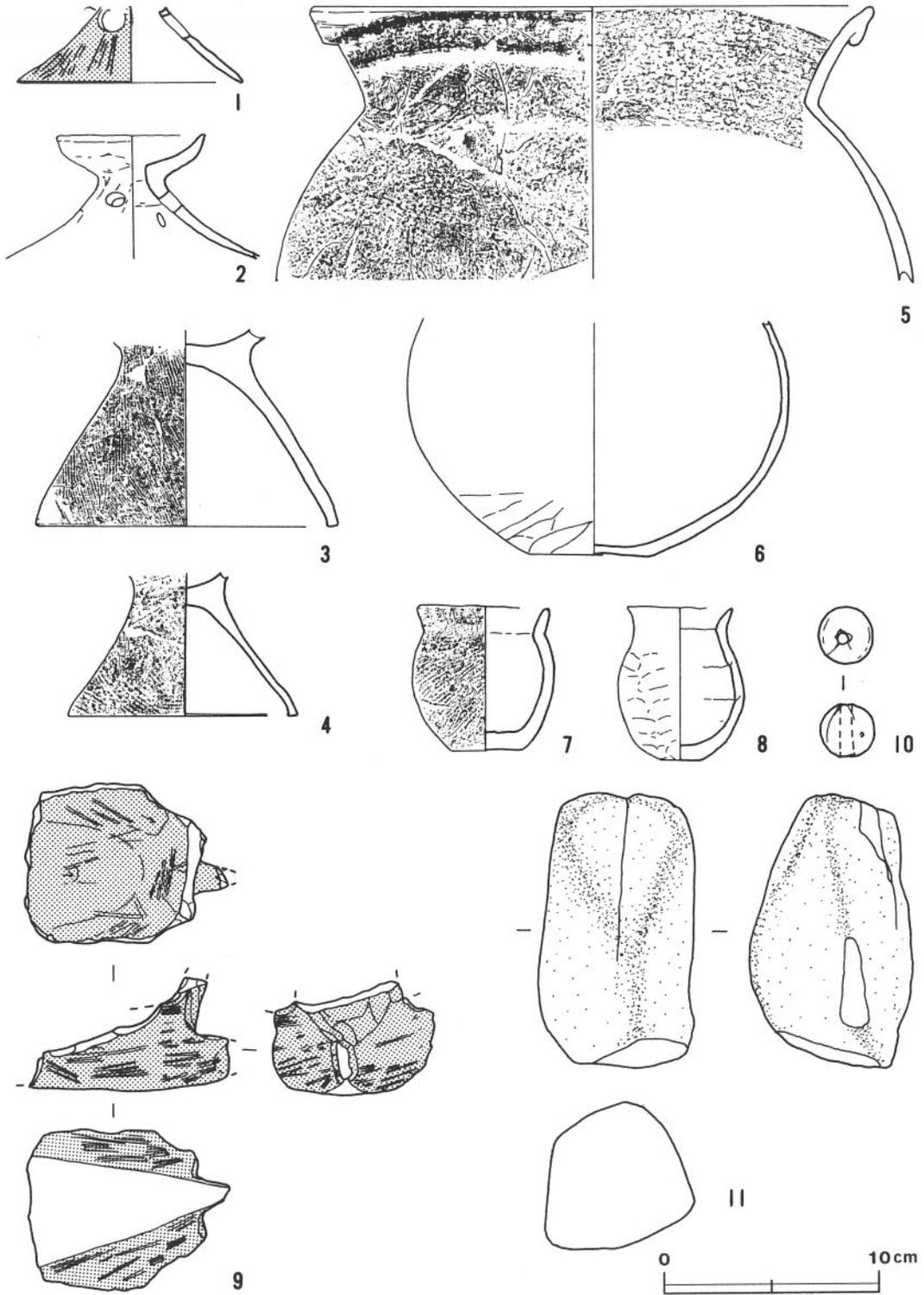
所見 本跡は、出土遺物等から古墳時代前期の住居跡で、炭化材の出土状況から焼失家屋と思われる。

### 第12号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第37図 1	器台 土師器	D 10.5 E (3.7)	脚部片。脚部はラッパ状に開く。脚部に3孔が穿たれる。	脚部外面縦位のヘラミガキ、内面ハケ目整形後ナデ。脚部外面赤彩。	砂粒 赤色 普通	P 51 20% 北コーナー 床面
2	器台 土師器	A 6.9 B (5.8) E (3.7)	脚部はラッパ状に開く。器受部は皿状で中央に貫通孔。脚部に4孔が穿たれる。	脚部外面縦位のヘラミガキ、内面横位のハケ目整形。器受部外面横位のヘラケズリ後ナデ、内面横位のヘラミガキ。	長石 にぶい橙色 普通	P 52 60% 北コーナー 床面



第36图 第12号住居跡実測・遺物出土位置図



第37图 第12号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第37図 3	台付甕 土師器	B (8.8) D 14.1 E 8.3	台部片。台部は「ハ」の字状に開く。	台部外面縦位のハケ目整形、内面横ナデ。	長石 橙色 普通	P 53 10% 中央部 床面
4	台付甕 土師器	B (6.7) D 10.8 E (5.8)	台部片。台部は「ハ」の字状に開く。	台部外面斜位のハケ目整形、内面横ナデ。	長石 にぶい橙色 普通	P 54 10% 北コーナー床面 二次焼成
5	甕 土師器	A 26.4 B (13.0)	体部上半から口縁部にかけての破片。口縁部は頸部から外反する。折り返し口縁。	体部外面斜位のハケ目整形後ナデ。内面剝離。口縁部内面横位のハケ目整形。	細砂粒, スコリア にぶい橙色 普通	P 55 30% 北コーナー 床面
6	甕 土師器	B (11.0) C 5.8	体部下半から底部にかけての破片。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面斜位のヘラケズリ後ナデ。	細砂粒 灰褐色 普通	P 56 20% 東コーナー 覆土上層
7	ミニチュア 土器 土師器	A 6.1 B 6.9 C 3.4	甕形。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は緩く外反する。	体部外面斜位のハケ目整形、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒, スコリア にぶい橙色 普通	P 57 100% 南コーナー 床面
8	ミニチュア 土器 土師器	A 5.0 B 7.2 C 1.8	甕形。丸底気味の平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外反する。	体部外面横位のヘラケズリ。	長石, スコリア にぶい橙色 普通	P 58 70% 第1号炉東側 床面

図版番号	器種	計測値 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第37図9	舟形土製品	(9.3)	(8.0)	(5.6)	—	(124.3)	10	北東壁中央部床面	DP18
10	土玉	2.4	2.6	—	5.0	14.1	100	北東壁中央部床面	DP19

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第37図11	磨石	13.0	7.3	6.9	1011.3	砂岩	北コーナー覆土下層	Q5

### 第13号住居跡 (第38図)

位置 E3a<sub>1</sub>区

規模と平面形 住居跡の北西部が確認されたのみで、大部分は調査区外に延びているため詳細は不明である。現存長軸5.10m, 現存短軸1.80mである。

主軸方向 N-62°-W

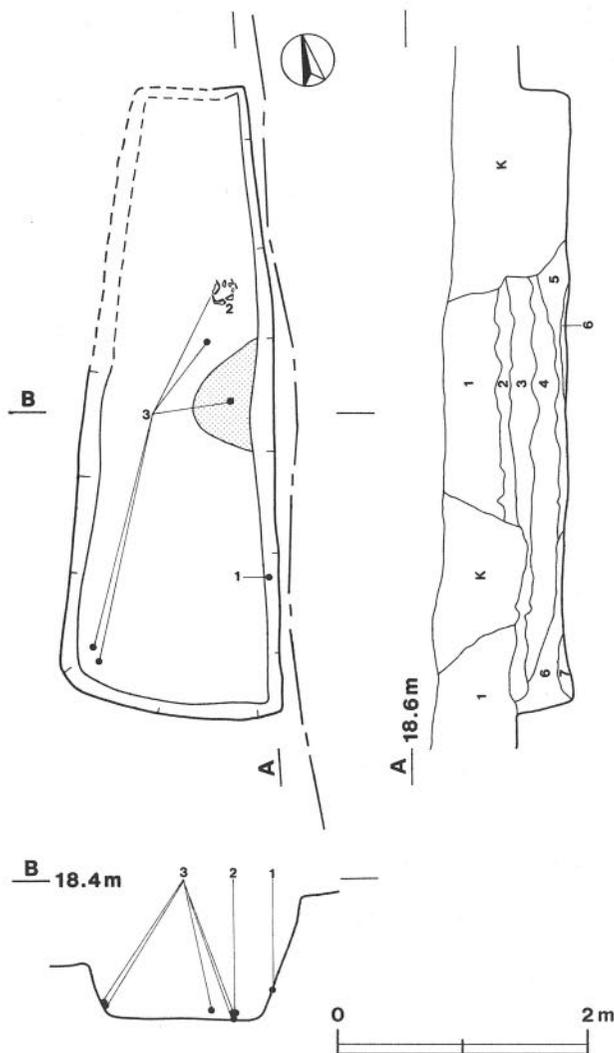
壁 壁高は、40~43cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦であるが、硬化面は確認されない。

ピット 確認されなかった。

炉 大部分は調査区外に延びているため、平面形は不明である。現存長径91cm, 現存短径46cmで、床を3cm程掘り窪めた地床炉である。

貯蔵穴 確認されなかった。



第38図 第13号住居跡実測・遺物出土位置図

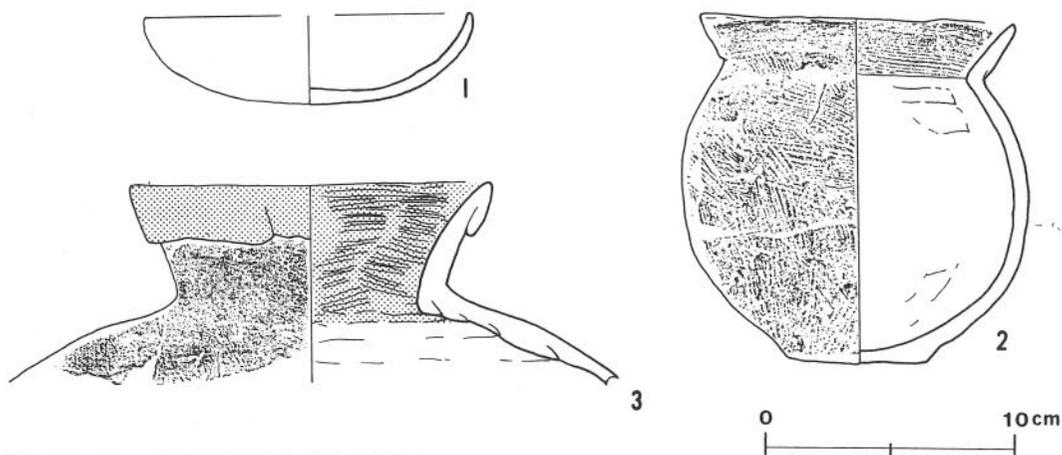
第13号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第39図 1	坏 土師器	A [13.3] B 3.6	体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はやや内傾する。	体部外面斜位のヘラケズリ後ナデ。内面剥離。口縁部内・外面横ナデ。	長石、スコリア 明赤褐色 普通	P 59 20% 南壁寄り 覆土上層
2	甕 土師器	A 12.8 B 13.9 C 5.5	突出した平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾して立ち上がる。	底部ヘラケズリ。体部外面斜位の粗いハケ目整形。口縁部外面横ナデ、内面横位のハケ目整形。	長石 にぶい橙色 普通	P 60 80% 炉北側床面 体部外面煤附着
3	壺 土師器	A 14.7 B (8.2)	口縁部片。頸部は「く」の字状で、口縁部は外傾して立ち上がる。複合口縁。	口縁部外面横ナデ、内面横位のハケ目整形。口縁部内・外面赤彩。	長石 にぶい橙色 普通	P 61 20% 炉北側床面 二次焼成

**覆土** 7層からなる。1層は表土である。2～4層は黒褐色土主体で自然堆積と思われる。5～7層はロームブロック、焼土ブロックを含み、人為的な埋め戻しと思われる。住居跡に伴う遺物は主に5層から、流れ込みと思われる遺物は主に4層から出土している。

**遺物** 第39図2の甕は炉北側の床面からつぶれた状態で出土している。南壁寄りの覆土上層からは流れ込みと思われる1の坏が出土している。

**所見** 本跡は、出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。



第39図 第13号住居跡出土遺物実測図

### 第14号住居跡（第40・41図）

位置 D2d<sub>1</sub>区

規模と平面形 長軸6.80 m・短軸5.75 mの長方形。

主軸方向 N-58°-W

壁 壁高は、30~40cmで垂直に立ち上がっている。壁に沿って上幅7~12cm、深さ5~12cmで、U字状に掘り込まれた溝が全周している。

床 平坦で、全体に踏み固められている。北東壁の東コーナー寄りから住居跡中央に向かって延びる、長さ106cm、上幅5~10cm、深さ7cm程で、V字状に掘り込まれた間仕切り溝が確認されている。

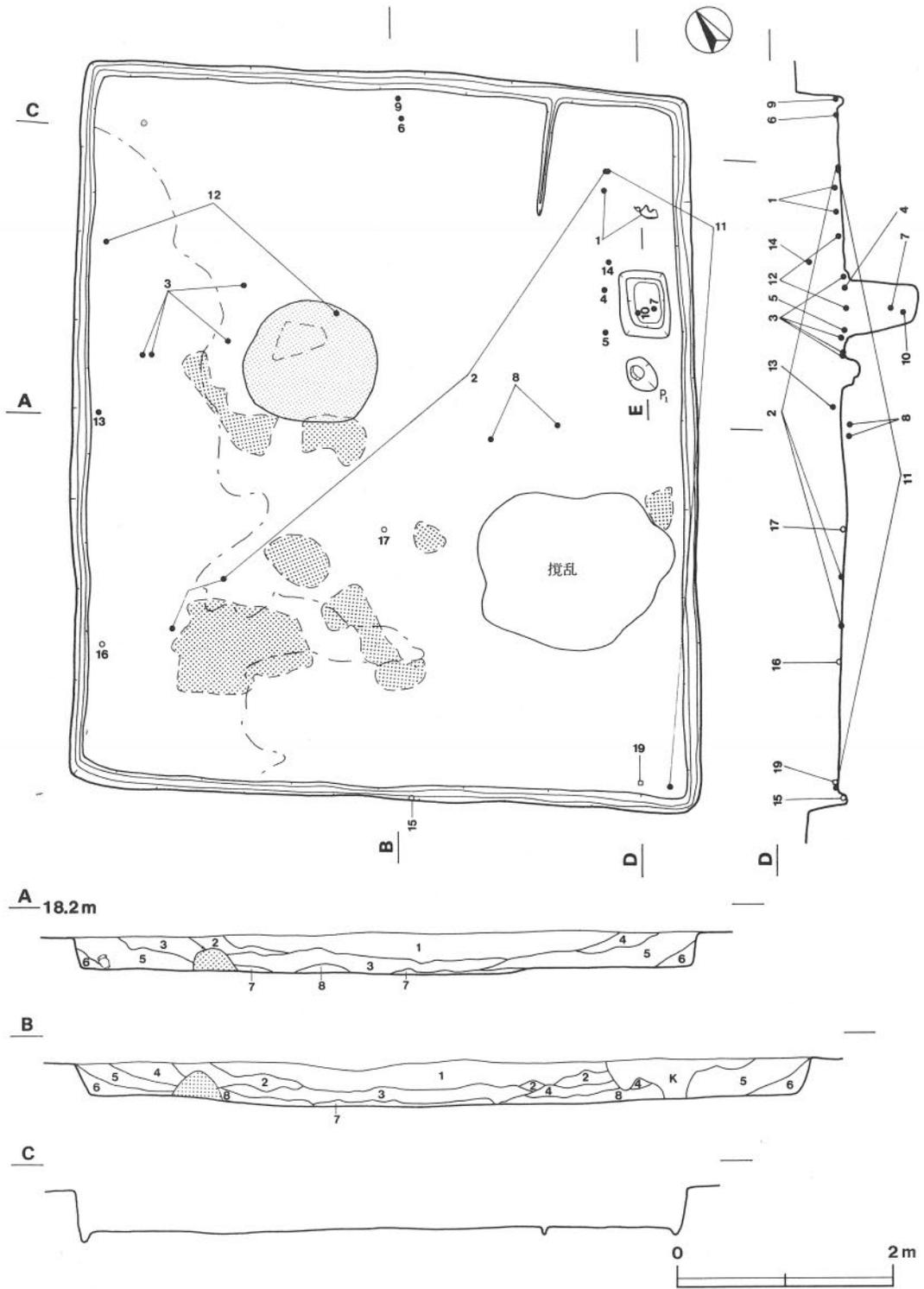
ピット 1か所。P<sub>1</sub>は長径35cm、短径25cmの楕円形で、深さは17cmである。南東壁際の貯蔵穴脇に位置しており、出入口施設に伴うピットと考えられる。

炉 主軸線上の北西寄りに付設されている。長径125cm、短径114cmの円形で、床を6cm程掘り窪めた地床炉である。覆土は2層からなり、1層は焼土小ブロックを少量含む暗褐色土、2層はローム粒子を極少量含む暗褐色土である。

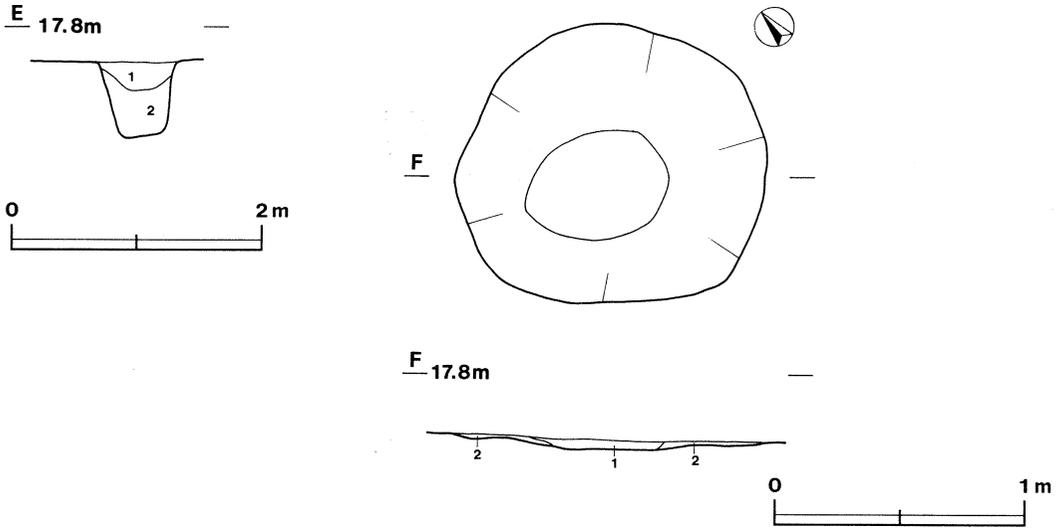
貯蔵穴 東コーナー寄りに付設されている。規模は長径63cm、短径46cmの長方形で、深さは71cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。覆土は2層からなり、1層はローム中ブロックを多量に含む暗褐色土、2層はローム粒子を少量含む暗褐色土である。

覆土 8層からなる。1~3層はローム粒子、焼土粒子を少量含む黒褐色土、4~8層はローム粒子、ロームブロックを多量に含み、人為的な埋め戻しと思われる。遺物は主に5層から出土している。

遺物 第42図2の壺は東・西の両コーナーの覆土下層から散在して、4と5の器台は貯蔵穴西側の



第40图 第14号住居跡実測・遺物出土位置図



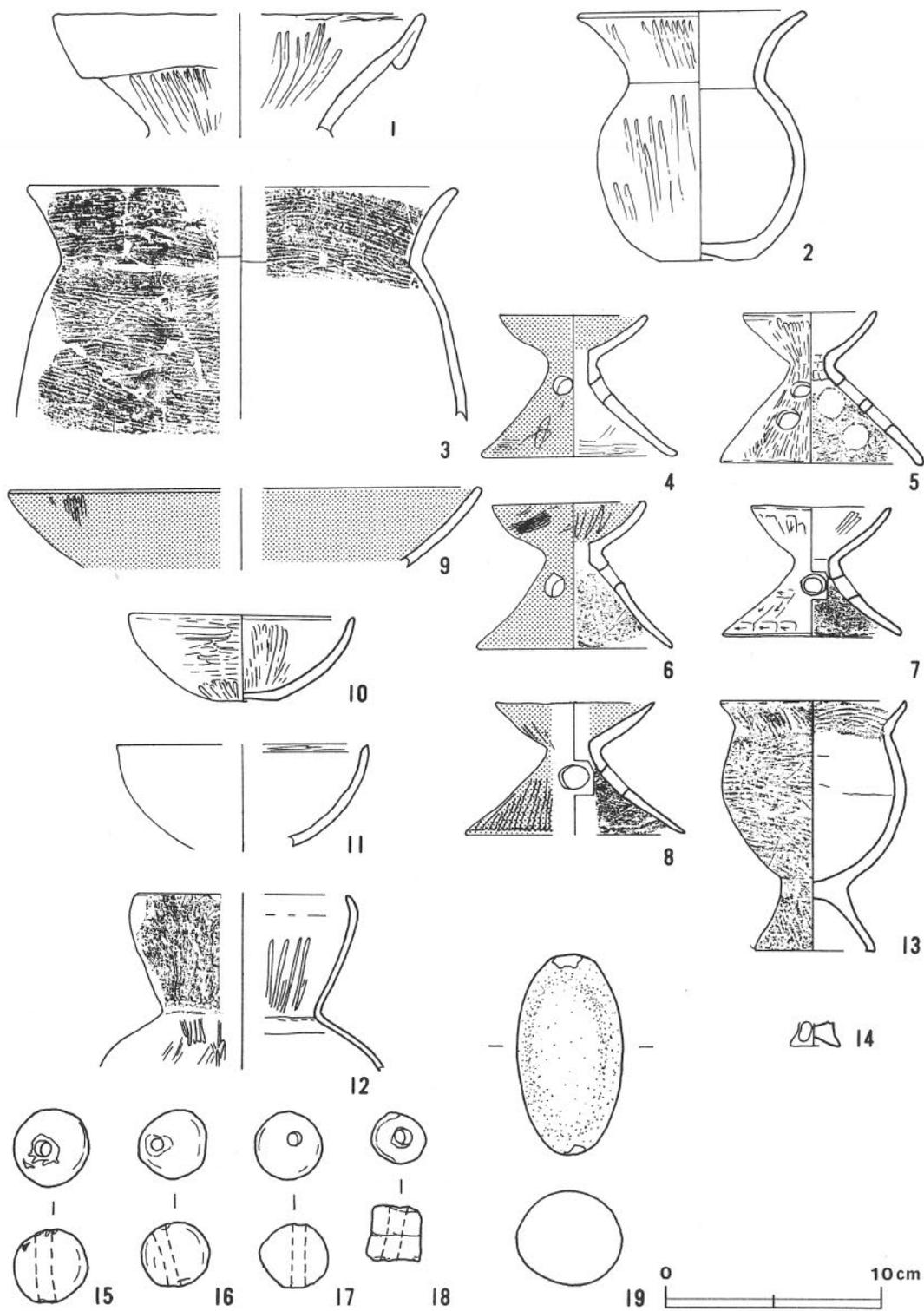
第41図 第14号住居跡炉実測図

床面から横位の状態で、6の器台は北東壁中央部の床面から横位の状態で、8の器台は中央部の床面から斜位の状態で、それぞれ出土している。また、貯蔵穴の覆土中層から7の器台が、下層から10の壙が出土している。

所見 本跡は、出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。

第14号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第42図 1	壺 土師器	A [17.4] B (5.8)	口縁部は頸部から外反して立ち上がる。複合口縁。	頸部内・外面縦位のヘラミガキ、口縁部内・外面横ナデ。	砂粒、スコリア にぶい黄橙色 普通	P 62 10% 東コーナー 覆土下層
2	壺 土師器	A 10.7 B 11.6 C 4.1	中央が窪む平底。体部は球状で、口縁部は頸部から大きく外反して立ち上がる。	体部外面ハケ目整形後縦位、内面斜位のヘラミガキ。口縁部内・外面ハケ目整形後、内面横位、外面縦位のヘラミガキ。	スコリア にぶい黄橙色 普通	P 63 80% 東・西コーナー 覆土下層
3	甕 土師器	A [20.0] B (11.0)	口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反して立ち上がる。	体部外面横位のハケ目整形、内面剝離。口縁部内・外面ハケ目整形後ナデ。	細砂粒 にぶい褐色 普通	P 64 20% 炉北側 床面
4	器台 土師器	A 6.8 B 6.6 D 9.1 E 4.7	脚部はラッパ状に開く。器受部は内彎気味に立ち上がる。脚部3孔、器受部中央に貫通孔が穿たれる。	脚部外面縦位のヘラミガキ、内面ハケ目整形。器受部内・外面ヘラミガキ。脚部外面、器受部内・外面赤彩。	砂粒、スコリア 赤色 普通	P 65 95% 貯蔵穴西側 床面
5	器台 土師器	A 6.3 B 7.2 D 9.5 E 4.7	脚部は「ハ」の字状に開く。器受部は外傾して立ち上がる。が。脚部上下2段に6孔、器受部中央に貫通孔が穿たれる。	脚部外面縦位のヘラミガキ、内面横位のハケ目整形。器受部外面縦位のヘラミガキ。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	P 67 90% 貯蔵穴西側 床面



第42图 第14号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第42図 6	器台 土師器	A 7.2	脚部はラッパ状に開く。器受部は内彎気味に立ち上がる。脚部に3孔, 器受部中央に貫通孔が穿たれる。	脚部外面縦位のヘラミガキ, 内面横位のハケ目整形。器受部内面放射状のヘラミガキ。脚部外面, 器受部内・外面赤彩。	砂粒, スコリア 赤色 普通	P 66 100 % 北東壁中央部 床面
		B 6.9				
		D 9.2				
		E 4.7				
7	器台 土師器	A 6.5	脚部はラッパ状に開く。器受部は内彎気味に立ち上がる。脚部に3孔, 器受部中央に貫通孔が穿たれる。	脚部外面ヘラケズリ後縦位のヘラミガキ, 内面横位のハケ目整形。器受部外面縦位のヘラケズリ, 内面放射状のヘラミガキ。	砂粒, スコリア にぶい黄橙色 普通	P 68 80 % 貯蔵穴内 覆土中層
		B 6.0				
		D 8.3				
		E 3.5				
8	器台 土師器	A 7.5	脚部はラッパ状に開く。器受部は内彎気味に立ち上がる。脚部は3孔と思われる。器受部中央に貫通孔が穿たれる。	脚部外面縦位のヘラミガキ, 内面ハケ目整形。器受部内・外面ヘラミガキ。脚部外面, 器受部内・外面赤彩。	砂粒, スコリア 赤色 普通	P 69 60 % 中央部 床面
		B 6.2				
		D [10.3]				
		E 4.0				
9	高坏 土師器	A [22.0]	坏部の口縁部片。口縁部は内彎気味に立ち上がる。	坏部内・外面縦位のヘラミガキ, 内・外面赤彩。	長石, スコリア 暗赤色 普通	P 70 10 % 北東壁中央部 床面
		B (3.7)				
10	坩 土師器	A 10.6	上げ底気味の平底。体部は内彎して立ち上がる。口縁部内削ぎ。	体部外面横位, 内面縦位のヘラミガキ。	スコリア にぶい褐色 普通	P 71 95 % 貯蔵穴内 覆土下層
		B 3.9				
		C 2.9				
11	坩 土師器	A [11.7]	体部は内彎して立ち上がる。口縁部内削ぎ。	体部内・外面剝離。口縁部内・外面横ナデ。	長石 赤褐色 普通	P 72 20 % 東・西コーナー 床面
		B (4.8)				
12	壺 土師器	A [9.8]	口縁部片。口縁部は内彎して立ち上がる。	口縁部外面ハケ目整形後縦位のヘラミガキ。内面横ナデ後縦位のヘラミガキ。	砂粒, スコリア にぶい黄褐色 普通	P 73 10 % 炉・北西壁北寄り 床面
		B (8.1)				
13	ミニチュア 土器 土師器	A 8.7	台付甕形。台部は「ハ」の字状に開く。体部は球状で最大径を中位に持つ。口縁部は外反して立ち上がる。	台部外面縦位のハケ目整形。体部外面横位のハケ目整形, 内面剝離。口縁部外面斜位, 内面横位のハケ目整形。	長石 赤色 普通	P 74 80 % 北西壁中央部 床面
		B 11.7				
		D 5.6				
		E 3.1				
14	手握 土器 土師器	D 2.3	高环形。脚部はラッパ状に開く。	外面指頭痕。	スコリア 明褐色 普通	P 75 50 % 貯蔵穴北側 覆土上層
		E (1.1)				

図版番号	器種	計測値 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第42図15	土玉	3.4	3.6	—	8.0	38.7	100	南西壁中央部覆土下層	DP20
16	土玉	3.0	3.2	—	6.0	29.7	100	西コーナー覆土下層	DP21
17	土玉	3.0	3.1	—	6.0	26.1	100	炉南側覆土下層	DP22
18	管状土錘	2.7	2.4	—	8.0	16.5	100	覆土中	DP23

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第42図19	敲石	9.3	5.0	4.4	297.3	頁岩	南コーナー覆土下層	Q6

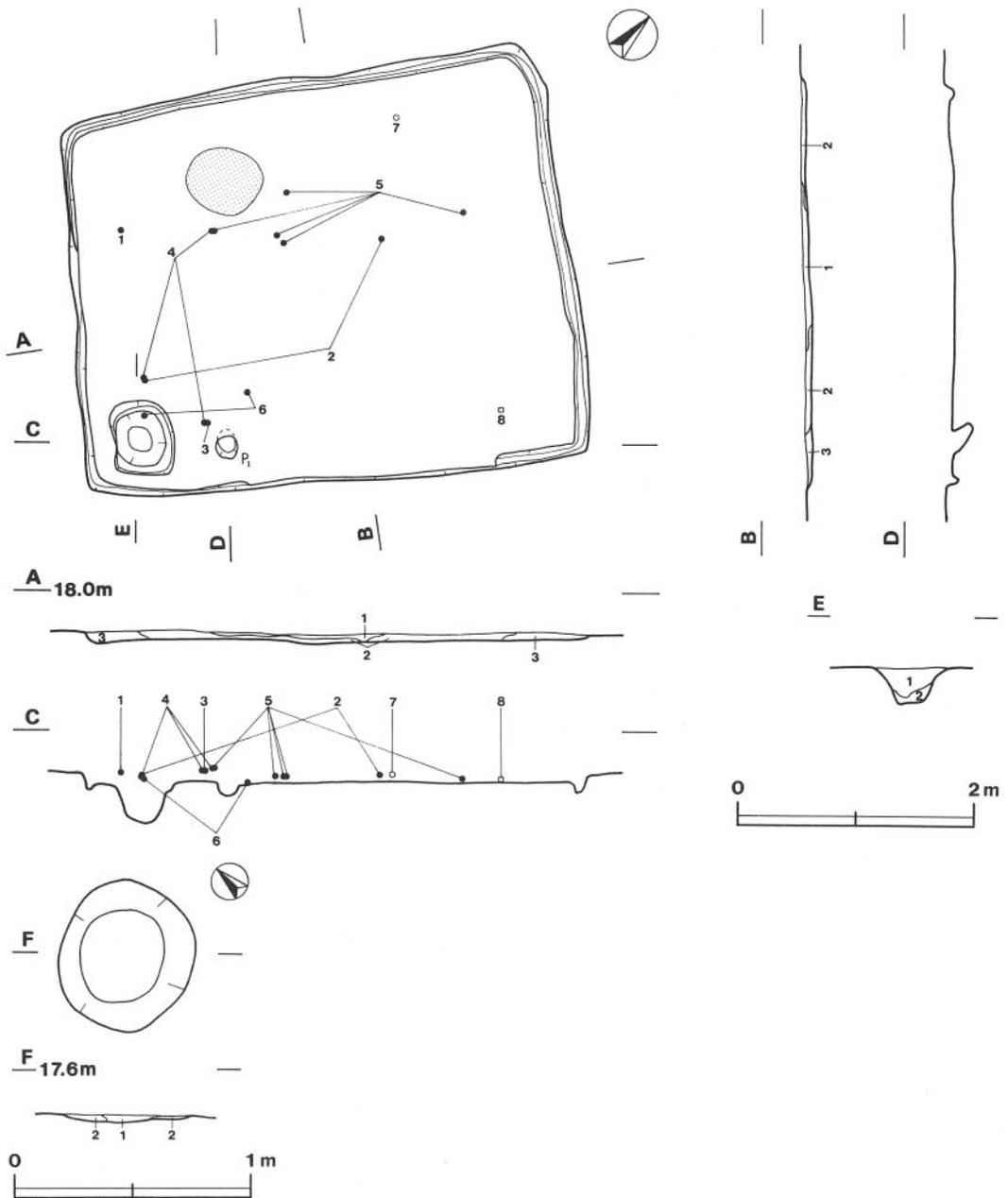
第15号住居跡 (第43図)

位置 C3f<sub>1</sub>区

規模と平面形 長軸4.25 m・短軸3.44 mの長方形。

主軸方向 N-36°-W

壁 壁高は、3~10cmでほぼ垂直に立ち上がっている。南東壁の中央部を除いた壁に沿って、上幅



第43図 第15号住居跡実測・遺物出土位置図

6～8 cm、深さ4～8 cmで、U字状に掘り込まれた溝が確認された。

**床** 平坦で、全体に踏み固められている。

**ピット** 1か所。P<sub>1</sub>は径20cmの円形で、深さは12cmである。南東壁際の貯蔵穴脇に位置しており、出入口施設に伴うピットと考えられる。

**炉** 主軸線上の北西寄りに付設されている。長径65cm、短径56cmの楕円形で、床を3 cm程掘り窪めた地床炉である。覆土は2層からなり、1層は焼土粒子を中量含むにぶい赤褐色土、2層は焼土小ブロックを中量含む赤褐色土である。

**貯蔵穴** 南コーナーに付設されている。規模は長径64cm、短径50cmの長方形で、深さは36cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。覆土は2層からなり、1層はローム中ブロックを中量含む暗褐色土、2層はローム中ブロックを多量に含む褐色土である。

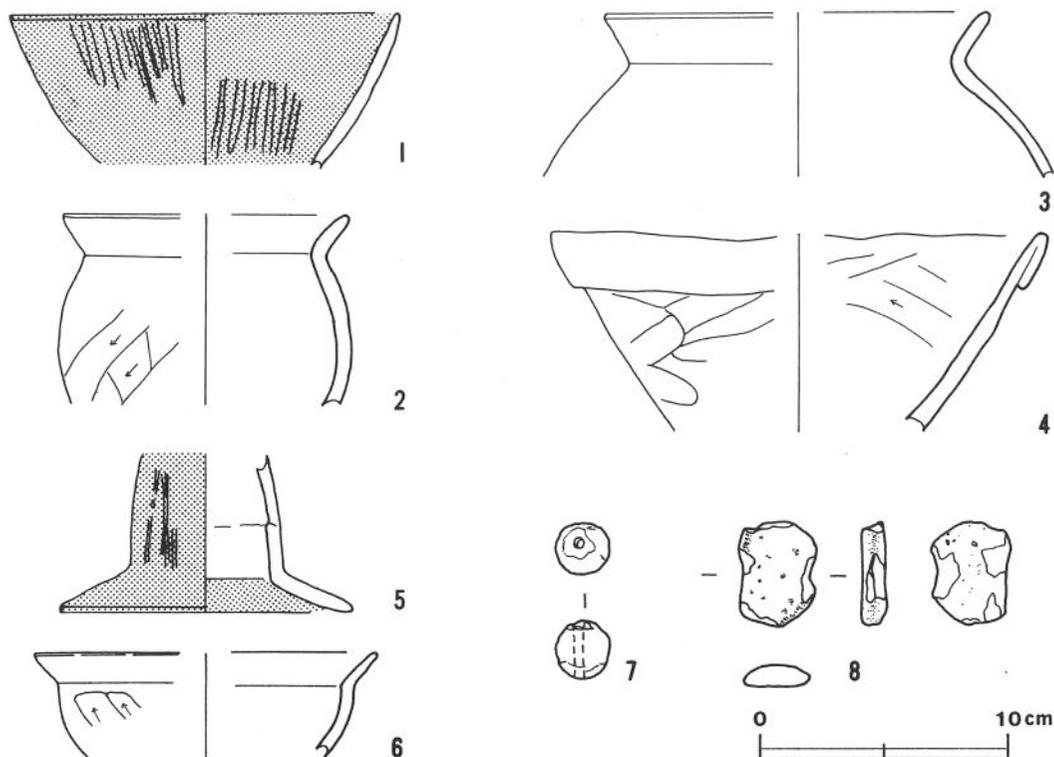
**覆土** 3層からなる。1層はローム粒子を少量含む暗褐色土、2・3層はロームブロックを含む褐色土である。

**遺物** 炉周辺と南コーナーの床面から土師器片が出土している。第44図4の甑は貯蔵穴北西側の床面と炉南側の床面から、5の高坏は炉東側の床面から、それぞれ散在して出土している。また、貯蔵穴周辺の床面から6の鉢が出土している。

**所見** 本跡は、出土遺物等から古墳時代中期の住居跡と考えられる。

第15号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第44図 1	大形埴 土師器	A 15.7 B (6.4)	口縁部片。口縁部は内彎気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ後ヘラミガキ。口縁部内・外面赤彩。	長石 赤色 普通	P 76 10% 南西壁中央部 覆土下層
2	甕 土師器	A [11.1] B (7.8)	体部上半片。頸部は「く」の字状で、口縁部は外反して立ち上がる。	体部外面斜位のヘラケズリ、口縁部内・外面横ナデ。	長石 橙色 普通	P 77 20% 中央部・貯蔵穴北西側 覆土下層
3	甕 土師器	A [15.6] B (6.7)	口縁部片。頸部は「く」の字状で、口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	長石 赤色 普通	P 78 20% 出入口 覆土下層
4	甑 土師器	A [20.1] B (8.1)	口縁部片。口縁部は外傾して立ち上がる。	体部外面縦位のヘラケズリ後ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	細砂粒 明赤褐色 普通	P 79 20% 炉南側・貯蔵穴北西側 床面
5	高坏 土師器	D 11.8 E (6.4)	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開き中空。	裾部外面横位のヘラミガキ、内面横ナデ。脚部外面縦位のヘラミガキ。脚部外面、裾部赤彩。	長石 赤色 普通	P 80 30% 炉東側 床面
6	鉢 土師器	A [13.8] B (4.3)	口縁部片。口縁部は外傾して立ち上がる。内面の体部と口縁部の間に稜をもつ。	体部外面横位のヘラケズリ後ナデ、内面剝離。口縁部内・外面横ナデ。	細砂粒 にぶい褐色 普通	P 81 30% 貯蔵穴周辺 床面



第44図 第15号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第44図7	土玉	2.2	2.2	—	4.0	9.3	100	北西壁北寄り覆土下層	DP24

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第44図8	石錘	4.1	3.2	0.9	15.0	安山岩	東コーナー覆土下層	Q7

### 第16号住居跡 (第45図)

位置 B3h<sub>5</sub>区

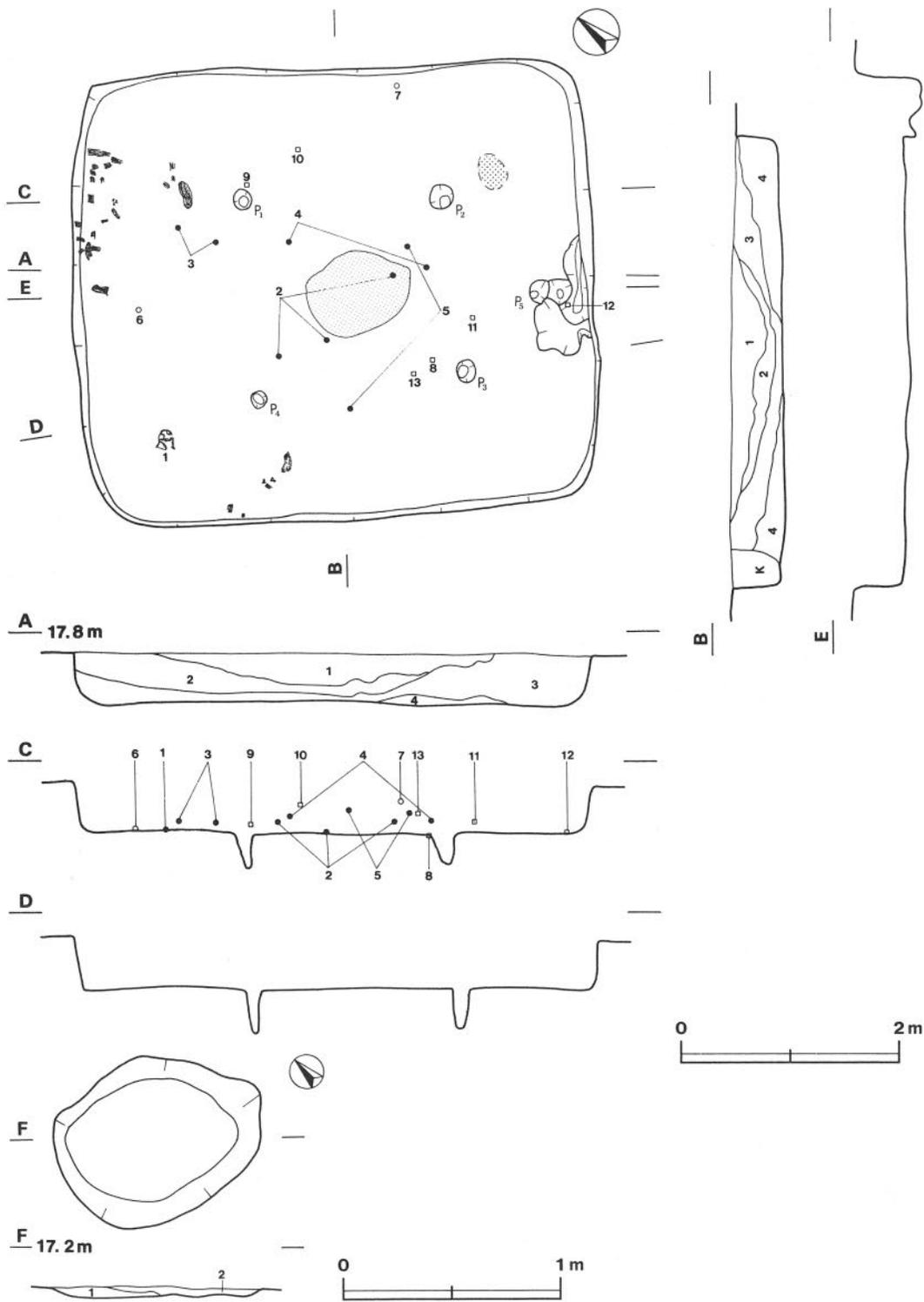
規模と平面形 長軸4.83 m・短軸4.21 mの隅丸長方形。

長軸方向 N-42°-W

壁 壁高は、45~50cmでほぼ垂直に立ち上がっている。

床 全体に平坦で、踏み固められている。特に、炉の周囲が堅緻である。

ピット 5か所。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は長径16~25cm, 短径14~22cmの円形で、深さは30~44cmである。規模や配列から支柱穴と考えられる。P<sub>5</sub>は長径23cm, 短径18cmの楕円形で、深さは10cmである。南東



第45图 第16号住居跡実測・遺物出土位置図

壁際中央部に位置しており、出入口施設に伴うピットと考えられる。

**炉** 主軸線上の中央部に付設されている。長径95cm、短径75cmの楕円形で、床を4cm程掘り窪めた地床炉である。覆土は2層からなり、1層は焼土粒子・灰を中量含むにぶい赤褐色土、2層は焼土小ブロックを中量含む暗褐色土である。

**覆土** 4層からなる。1・2層はローム粒子を少量含む黒褐色土である。3層はローム粒子を多量に含む暗褐色土で、4層は炭化物を少量含むローム主体の褐色土である。遺物は主に床面及び3層から出土している。

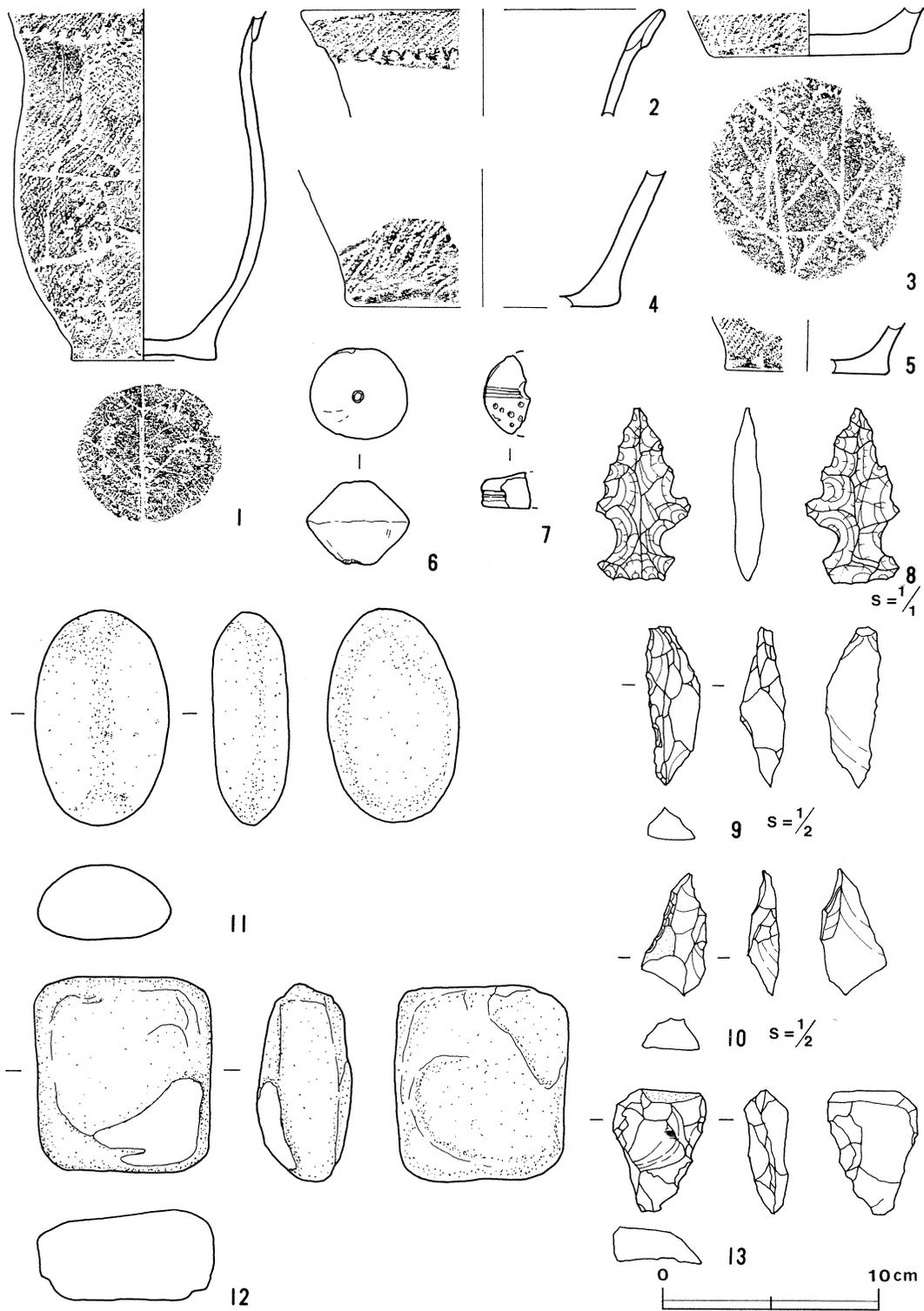
**遺物** 北コーナー付近及び南西壁ほぼ中央部から、炭化材が出土している。住居跡の床面及び覆土中から、弥生式土器片が出土している。第46図1の広口壺は西コーナー床面から横位の状態で、6の紡錘車は北西壁中央部の床面から、7の紡錘車は北東壁際の東コーナー寄りの覆土中層から、それぞれ出土している。

**所見** 本跡は、出土遺物等から弥生時代後期の住居跡で、床面から炭化材が出土していることから焼失家屋と考えられる。

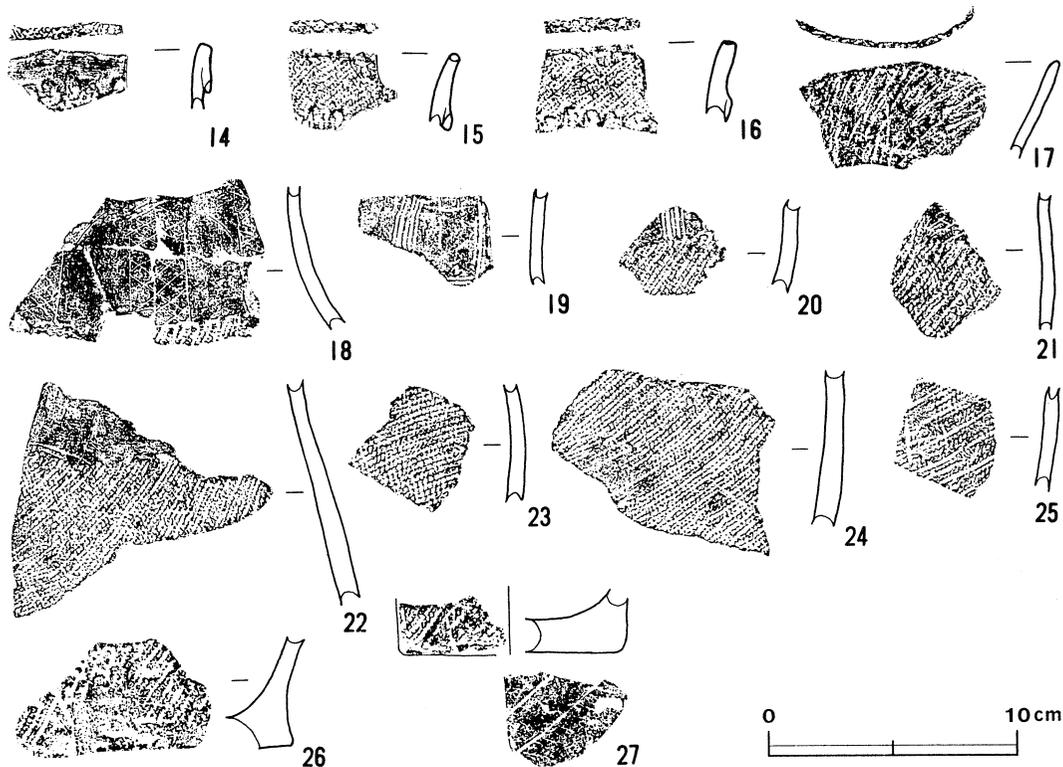
第47図14～27は、第16号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。14～16は広口壺の口縁部片である。14は無文の複合口縁で、口縁下端に丸棒状工具による押圧が施され、口唇部にはキザミが施されている。15・16は口縁部に付加条一種（付加2条）の縄文が施文され、口唇部にはキザミが施されている。17は高坏の口縁部片である。単口縁で、口縁部には付加条の縄文が施文されている。

18～22は頸部片である。18は格子目文が施されている。19・20は5本櫛歯のスリット手法による縦区画線があり、区画内は破片では無文である。21は格子目文が施され、胴部には付加条一種（付加2条）の縄文が施文されている。22の頸部は無文で、胴部には付加条一種（付加2条）の縄文が施文されている。

23～25は胴部片である。23～25は付加条一種（付加2条）の縄文がそれぞれ施文されている。26・27は底部に至る破片であり、胴部には付加条一種（付加2条）の縄文が施文されている。27の底部には木葉痕が見られる。



第46图 第16号住居跡出土遺物実測図



第47図 第16号住居跡出土遺物拓影図

第16号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第46図 1	広口壺 弥生式土器	B (16.2) C 6.8	平底。胴部は長胴形で、頸部にかけて内彎して立ち上がる。胴部には付加条一種（付加2条）の縄文が施文されている。頸部は縄文原体によって区画され、区画内には雑な格子目文が施されている。複合口縁の下端部には縄文原体による圧痕が巡らされている。底部木葉痕。	長石, 石英 赤褐色 普通	P 82 80% 西コーナー 床面 胴部外面煤付着
2	広口壺 弥生式土器	A [16.8] B (5.0)	口縁部片。頸部無文帯。口縁部外面には付加条一種（付加2条）の縄文が施文され、複合口縁の下端部には棒状工具による刺突が巡らされている。	長石, 石英 灰褐色 普通	P 83 10% 炉南西部 床面
3	壺 弥生式土器	B (2.2) C 9.2	底部片。平底。胴部外面下端に付加条の縄文が施文されている。底部木葉痕。	長石, 石英, 雲母 にぶい褐色 普通	P 84 10% 炉北側 覆土下層
4	壺 弥生式土器	B (6.4) C [12.8]	底部片。平底。胴部外面下端に付加条一種（付加2条）の縄文が施文されている。底部木葉痕。	長石, 石英, 雲母 にぶい褐色 普通	P 85 10% 炉東・北側 覆土中層
5	壺 弥生式土器	B (2.4) C [7.6]	底部片。平底。胴部外面下端に付加条一種（付加2条）の縄文が施文されている。底部木葉痕。	長石, 石英, 雲母 にぶい赤褐色 普通	P 86 10% 炉東・南側 覆土中層

図版番号	器 種	計測値 (cm)			孔 径 (mm)	重 量 (g)	現存率 (%)	出 土 地 点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚					
第46図6	紡 錘 車	4.2	4.7	3.9	6.0	50.2	100	北西壁中央部床面	DP25
7	紡 錘 車	(3.7)	(2.2)	(1.7)	(8.0)	(13.7)	40	北東壁際東コーナー寄りの覆土中層	DP26

図版番号	器 種	計 測 値				石 質	出 土 地 点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第46図8	石 鏃	2.6	1.5	0.4	1.2	頁 岩	炉南側覆土下層	Q8
9	ナイフ形石器	5.0	1.6	1.0	7.0	安山岩	P <sub>1</sub> 東側覆土中層	Q9
10	ナイフ形石器	3.8	2.0	1.0	5.3	安山岩	P <sub>1</sub> 東側覆土上層	Q10
11	磨 石	10.0	6.1	3.5	313.3	安山岩	P <sub>2</sub> ・P <sub>3</sub> 間覆土中層	Q11
12	台 石	9.2	8.1	4.2	557.0	砂 岩	出入口覆土下層	Q12
13	剝 片	5.7	4.2	1.6	38.6	チャート	炉南側覆土中層	Q13

### 第17号住居跡 (第49図)

位置 B3a<sub>7</sub>区

規模と平面形 長軸4.37 m・短軸3.40 mの長方形。

長軸方向 N-30°-W

壁 削平されており、壁は確認されなかったが、幅45~80cm、深さ10cm程の溝状の掘り方が北東側を除いて巡っている。

床 削平されており、確認できなかった。

ピット 1か所。P<sub>1</sub>は長径20cm、短径17cmの楕円形で、深さは20cmである。南東壁際の貯蔵穴脇に位置しており、出入口施設に伴うピットと考えられる。

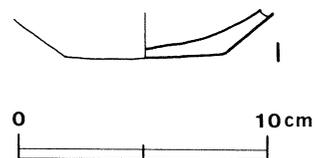
炉 主軸線上の北西寄りに付設されている。長径75cm、短径60cmの楕円形で、床をわずかに掘り窪めた地床炉である。

貯蔵穴 東コーナーに付設されている。規模は長径40cm、短径35cmの楕円形で、深さは46cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。覆土は2層からなり、2層ともローム主体の暗褐色土であるが、下層には極少量の焼土粒子が含まれる。

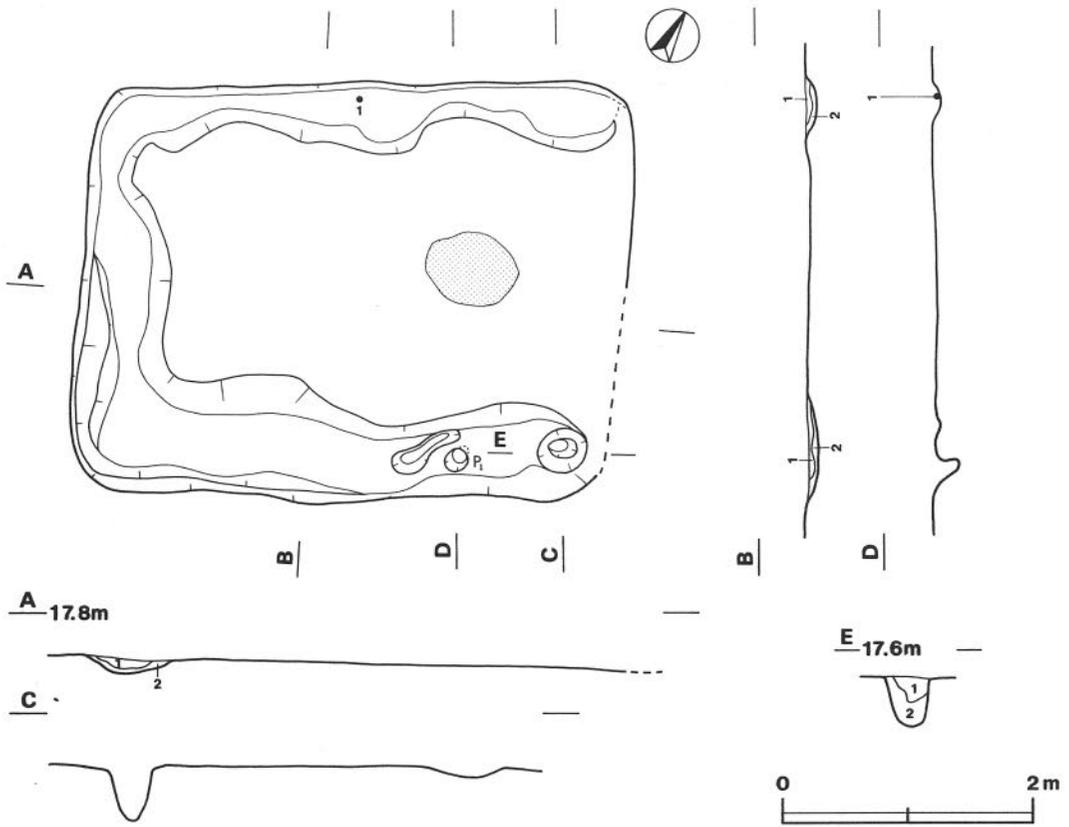
覆土 床面まで削平されているため、貯蔵穴内の覆土(2層)のみを確認した。

遺物 出土遺物は、土師器の細片が多い。第48図1の甕の体部片は北西壁際中央部の床面から出土している。

所見 本跡は、出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。



第48図 第17号住居跡出土遺物実測図



第49図 第17号住居跡実測・遺物出土位置図

第17号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第48図 1	甕 土師器	B (1.7) C 6.5	底部片。平底。	底部外面ヘラケズリ，内面ナデ。	長石 にふい 橙色 普通	P 87 10% 北西壁中央部 床面

表2 姥ヶ谷津遺跡竪穴住居跡一覽表

住居 番号	位置	主(長)軸 方 向	平 面 形	規 模	壁高 (cm)	床面	内 部 施 設					炉	覆土	出 土 遺 物	備 考
				長軸×短軸 (m)			壁溝	柱穴	貯蔵穴	ピット	入口				
1	E2i1	N-46°-W	方 形	4.80 × 4.67	63~73	平坦	有	0	有	1	1	1	人為	土師器, 土製品, 石器・石製品	焼失家屋, 焼成粘土板
2	F2c5	N-51°-W	方 形	6.20 × 6.15	19~21	平坦	有	4	有	5	1	1	人為	土師器	
3	E2j0	N-48°-W	[ 方 形 ]	(3.20) × 5.50	53~64	平坦	無	0	無	0	0	1	人為	土師器	
4	E2i3	N-28°-W	方 形	3.25 × 3.20	25~35	平坦	無	0	無	1	1	0	人為	土師器, 土製品	
5	E2c1	N-28°-W	方 形	3.70 × 3.50	8~12	平坦	無	0	無	1	1	1	人為	土師器, 土製品	焼失家屋
6	E1b4	N-60°-W	長 方 形	6.00 × 5.20	25~40	平坦	有	0	有	1	1	1	人為	土師器, 土製品	
7	E1a7	N-51°-W	方 形	5.40 × 5.00	18~26	平坦	有	0	有	1	1	1	人為	土師器, 土製品	焼失家屋
8	E2d7	N-85°-W	長 方 形	4.67 × 3.50	6~16	平坦	無	0	無	0	0	2	人為	土師器	
9	E2a4	N-63°-W	長 方 形	5.64 × 4.90	50~60	平坦	有	0	有	2	1	1	人為	土師器, 土製品	焼失家屋
10	D1i0	N-77°-E	長 方 形	5.40 × 4.90	/	平坦	無	0	有	1	1	1	不明	土製品, 石器	
11	D2f6	N-64°-W	方 形	9.66 × 9.60	11~22	平坦	有	4	有	5	1	7	人為	土師器	
12	D2g6	N-60°-W	長 方 形	6.20 × 4.80	3~12	平坦	有	0	無	1	1	3	人為	土師器, 土製品, 石器	焼失家屋, 舟形土製品
13	E3a1	N-62°-W	[ 方 形 ]	[5.10] × [5.00]	40~43	平坦	無	0	無	0	0	1	人為	土師器	
14	D2d1	N-58°-W	長 方 形	6.80 × 5.75	30~40	平坦	有	0	有	1	1	1	人為	土師器, 土製品, 石器	
15	C3f1	N-36°-W	長 方 形	4.25 × 3.44	3~10	平坦	有	0	有	1	1	1	人為	土師器, 土製品, 石器	
16	B3h5	N-42°-W	隅丸長方形	4.83 × 4.21	45~50	平坦	無	4	無	5	1	1	自然	弥生式土器, 土製品, 石器	焼失家屋
17	B3a7	N-30°-W	長 方 形	4.37 × 3.40	/	平坦	無	0	有	1	1	1	不明	土師器片	

## 2 土 坑

当遺跡からは、23基の土坑が確認されたが、出土遺物が少なく時期や性格について不明な点が多い。ここでは、土坑のうち形状や規模、覆土の状態や出土遺物について特徴がある7基の土坑について個々に説明を加え、その他については一覧表（表3）にした。

### 第1号土坑（第50図）

位置 E2g<sub>8</sub>区

規模と平面形 長径0.90 m・短径0.75 mの円形で、深さは0.20 mである。

長径方向 N-27°-W

壁面 なだらかに立ち上がっている。

底面 皿状である。

覆土 下層はローム粒子を含む褐色土で、上層はローム小ブロックを少量含む暗褐色土である。

遺物 出土していない。

所見 本跡の時期や性格については不明である。

### 第4号土坑（第50図）

位置 E2i<sub>8</sub>区

規模と平面形 長径1.50 m・短径1.20 mの楕円形で、深さは0.84 mである。

長径方向 N-23°-W

壁面 西壁はほぼ垂直、東壁は外傾して立ち上がっている。

底面 平坦である。

覆土 4層はローム小ブロックを少量含む褐色土であり、1～3層はローム粒子を少量含む暗褐色土である。

遺物 出土していない。

所見 本跡の時期や性格については不明である。

### 第8号土坑（第50図）

位置 E2g<sub>6</sub>区

規模と平面形 長径1.32 m・短径1.10 mの楕円形で、深さは0.22 mである。

長径方向 N-20°-E

壁面 なだらかに立ち上がっている。

底面 皿状である。

**覆土** 下層はローム粒子を少量含む褐色土であり、上層はローム粒子を少量含む暗褐色土である。

**遺物** 覆土上層から、第53図2の磨石が出土している。

**所見** 本跡は、出土遺物等から縄文時代の土坑と思われる。性格については不明である。

#### 第21号土坑（第51図）

**位置** G3i<sub>1</sub>区

**規模と平面形** 長径1.24 m・短径1.00 mの楕円形で、深さは0.23 mである。

**長径方向** N-26°-E

**壁面** なだらかに立ち上がっている。

**底面** 平坦である。

**覆土** 下層はローム小ブロックを含む暗褐色土であり、上層はローム粒子を少量含む黒褐色土である。

**遺物** 出土していない。

**所見** 本跡の時期や性格については不明である。

#### 第50号土坑（第51図）

**位置** C3b<sub>2</sub>区

**規模と平面形** 長径1.00 m・短径1.00 mの円形で、深さは0.30 mである。

**長径方向** N-0°

**壁面** ほぼ垂直に立ち上がっている。

**底面** 平坦である。

**覆土** 3層からなり、1・2層はローム粒子を含む黒・暗褐色土、3層はローム中・大ブロックを含む褐色土である。

**遺物** 覆土中層から石片が6点出土している。

**所見** 本跡の時期や性格については不明である。

#### 第52号土坑（第52図）

**位置** B2i<sub>7</sub>区

**規模と平面形** 長径2.32 m・短径1.54 mの長方形で、深さは0.40 mである。

**長径方向** N-63°-W

**壁面** ほぼ垂直に立ち上がっている。

**底面** 平坦である。

覆土 3層はローム大ブロック・炭化材を含む褐色土であり、1・2層は砂粒子・炭化材を含む褐色土である。

遺物 出土していない。

所見 本跡の時期や性格については不明である。

#### 第68号土坑（第52図）

位置 B2e<sub>9</sub>区

規模と平面形 長径1.33 m・短径0.98 mの楕円形で、深さは0.44 mである。

長径方向 N-39°-W

壁面 なだらかに外傾して立ち上がっている。

底面 皿状である。

覆土 2層はローム主体の暗褐色土であり、1層はローム粒子・焼土粒子を含む暗褐色土である。

遺物 ほぼ中央部の覆土下層から、第53図1の深鉢がつぶれた状態で出土している。

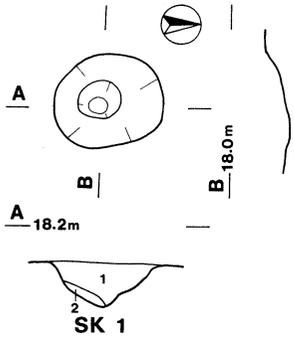
所見 本跡は、出土遺物から縄文時代中期（加曾利E III式期）の土坑と思われるが、性格については不明である。

#### 第68号土坑出土遺物観察表

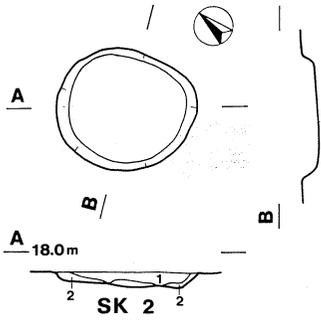
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第53図 1	深鉢 縄文式土器	A (26.8) B (20.2)	口縁部から胴部に至る破片。口縁部は波状口縁で、無文帯をもつ。胴部には2条の沈線で区画した磨消帯を垂下させている。地文には縦位回転の絡条体の縄文が施されている。口縁部内面は横位、胴部は縦位のナデが施されている。	砂粒、パミス 橙色 普通	P 88 40% 中央部 覆土下層 外面煤付着

#### 第8号土坑出土遺物観察表

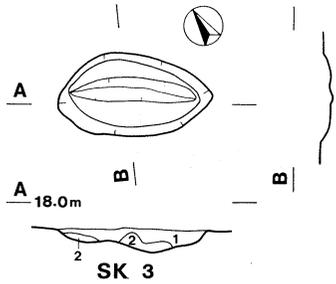
図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第53図2	磨石	(6.6)	7.8	3.8	(290.7)	安山岩	SK-8覆土上層	Q 29



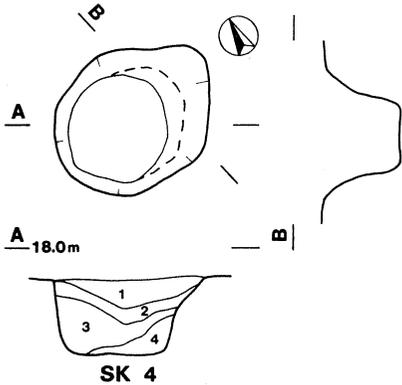
SK-1 土層解説  
 1 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック極少量  
 2 褐色 ローム粒子中量



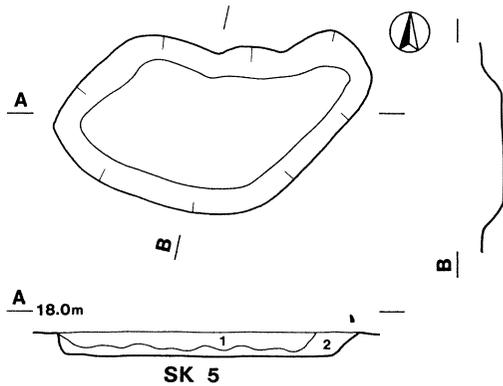
SK-2 土層解説  
 1 褐色 ローム粒子中量  
 2 褐色 ローム粒子多量



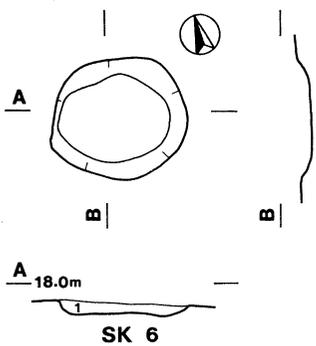
SK-3 土層解説  
 1 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック極少量  
 2 褐色 ローム粒子多量



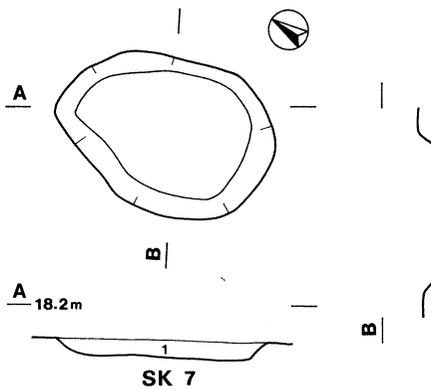
SK-4 土層解説  
 1 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック極少量  
 2 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量  
 3 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量  
 4 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量



SK-5 土層解説  
 1 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量  
 2 褐色 ローム粒子・黒色土粒子少量



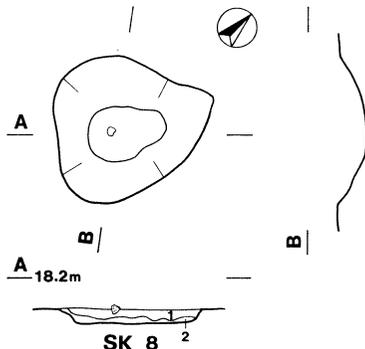
SK-6 土層解説  
 1 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量



SK-7 土層解説  
 1 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量

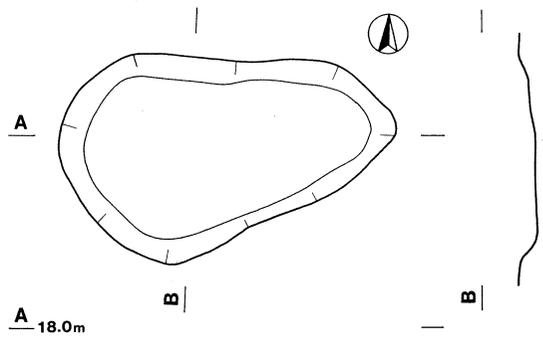


第50図 土坑実測図(1)



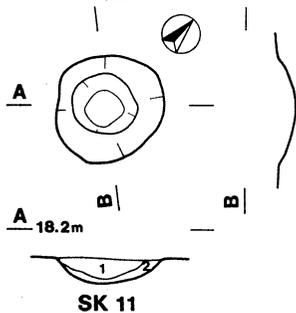
SK-8 土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量, ローム中ブロック中量
- 2 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量



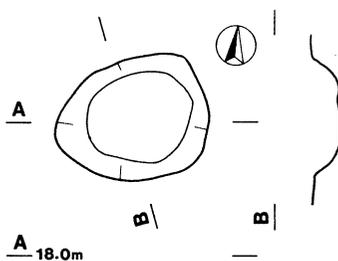
SK-19 土層解説

- 1 暗褐色 ローム中ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量



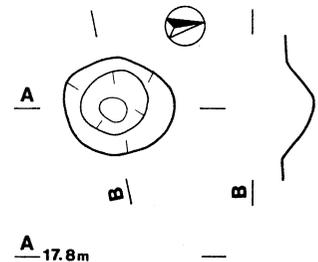
SK-11 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量, ローム中ブロック極少量
- 2 褐色 黒色土粒子極少量



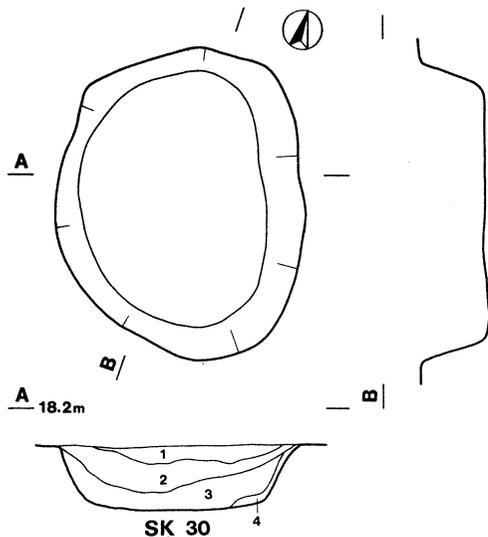
SK-21 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量

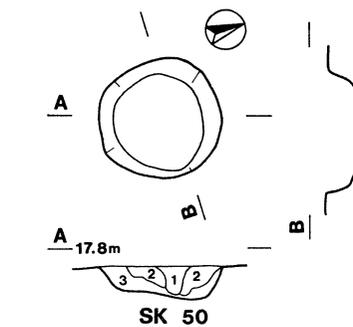


SK-41 土層解説

- 1 暗褐色 ローム中ブロック中量



SK 30



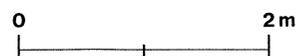
SK 50

SK-30 土層解説

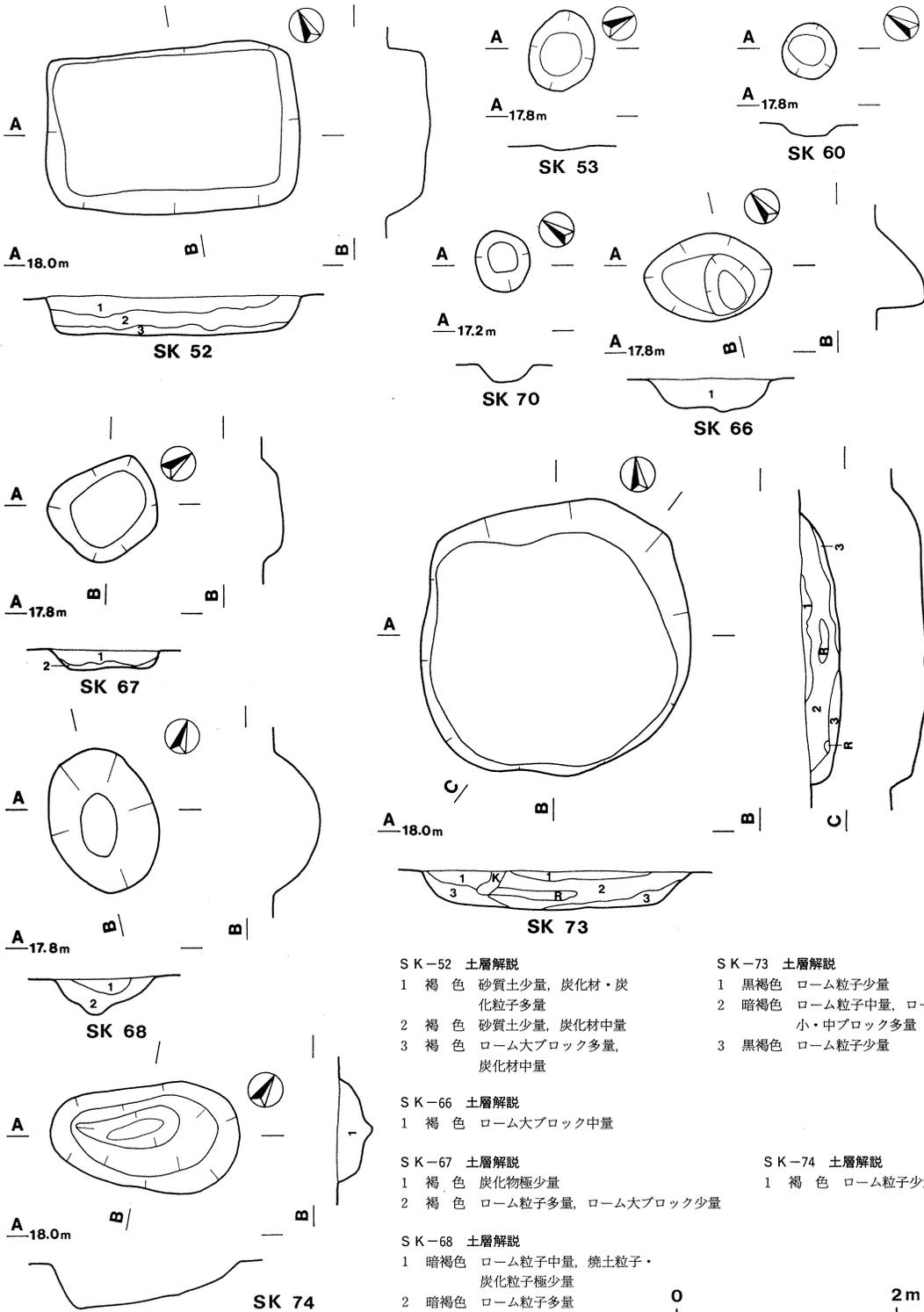
- 1 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量
- 3 褐色 ローム粒子多量, ローム小・中ブロック中量
- 2 褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック中量

SK-50 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子極少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量
- 3 褐色 ローム中・大ブロック多量



第51図 土坑実測図(2)



SK-52 土層解説

- 1 褐色 砂質土少量, 炭化材・炭化粒子多量
- 2 褐色 砂質土少量, 炭化材中量
- 3 褐色 ローム大ブロック多量, 炭化材中量

SK-66 土層解説

- 1 褐色 ローム大ブロック中量

SK-67 土層解説

- 1 褐色 炭化物極少量
- 2 褐色 ローム粒子多量, ローム大ブロック少量

SK-68 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子極少量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量

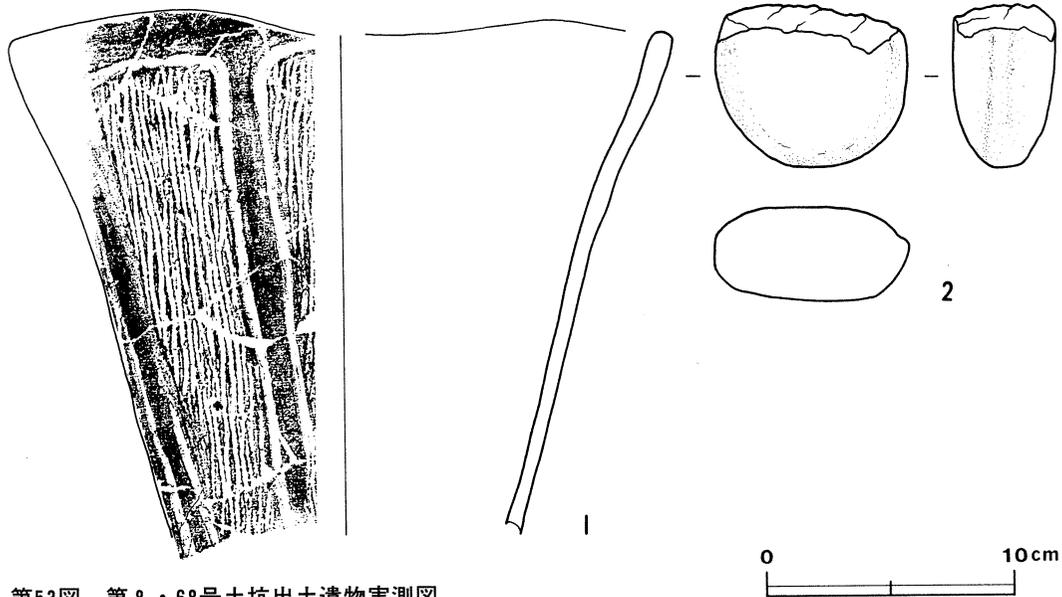
SK-73 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小・中ブロック多量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量

SK-74 土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量

第52図 土坑実測図(3)



第53図 第8・68号土坑出土遺物実測図

表3 姥ヶ谷津遺跡土坑一覽表

土坑 番号	位 置	長径方向 (長軸方向)	平 面 形	規 模 (m)		壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考	図 版 番号
				長径×短径	深さ						
1	E2g8	N-27°-W	円 形	0.90×0.75	0.20	緩斜	皿状	自然	縄文式土器片		第50図
2	E2j6	N-38°-W	楕 円 形	1.18×0.96	0.15	緩斜	平坦	自然	縄文式土器片		50
3	E2b8	N-50°-W	楕 円 形	1.20×0.68	0.12	緩斜	凹凸	自然			50
4	E2i8	N-23°-W	楕 円 形	1.50×1.20	0.84	外傾	平坦	自然	縄文式土器片, 土師器片		50
5	E2i9	N-74°-W	不整楕円形	2.60×1.36	0.18	緩斜	皿状	自然			50
6	E2h8	N-90°-W	楕 円 形	1.12×0.98	0.11	緩斜	皿状	不明			50
7	E2h7	N-25°-W	楕 円 形	1.78×1.26	0.18	緩斜	平坦	不明			50
8	E2g6	N-20°-E	楕 円 形	1.32×1.10	0.22	緩斜	皿状	自然	縄文式土器片, 石器		51
11	E2e5	N-14°-E	円 形	0.92×0.84	0.13	緩斜	皿状	自然			51
19	D3i1	N-10°-W	不整楕円形	2.70×1.48	0.15	緩斜	皿状	自然	縄文式土器片, 弥生式土器片, 土師器片		51
21	G3i1	N-26°-E	楕 円 形	1.24×1.00	0.23	緩斜	平坦	自然	縄文式土器片, 土師器片		51
30	D1g8	N-22°-W	楕 円 形	2.48×1.99	0.55	外傾	平坦	自然			51
41	C3h1	N-16°-E	円 形	0.90×0.79	0.25	緩斜	鍋底	不明			51
50	C3b2	N-0°	円 形	1.00×1.00	0.30	緩斜	皿状	人為	石片		51

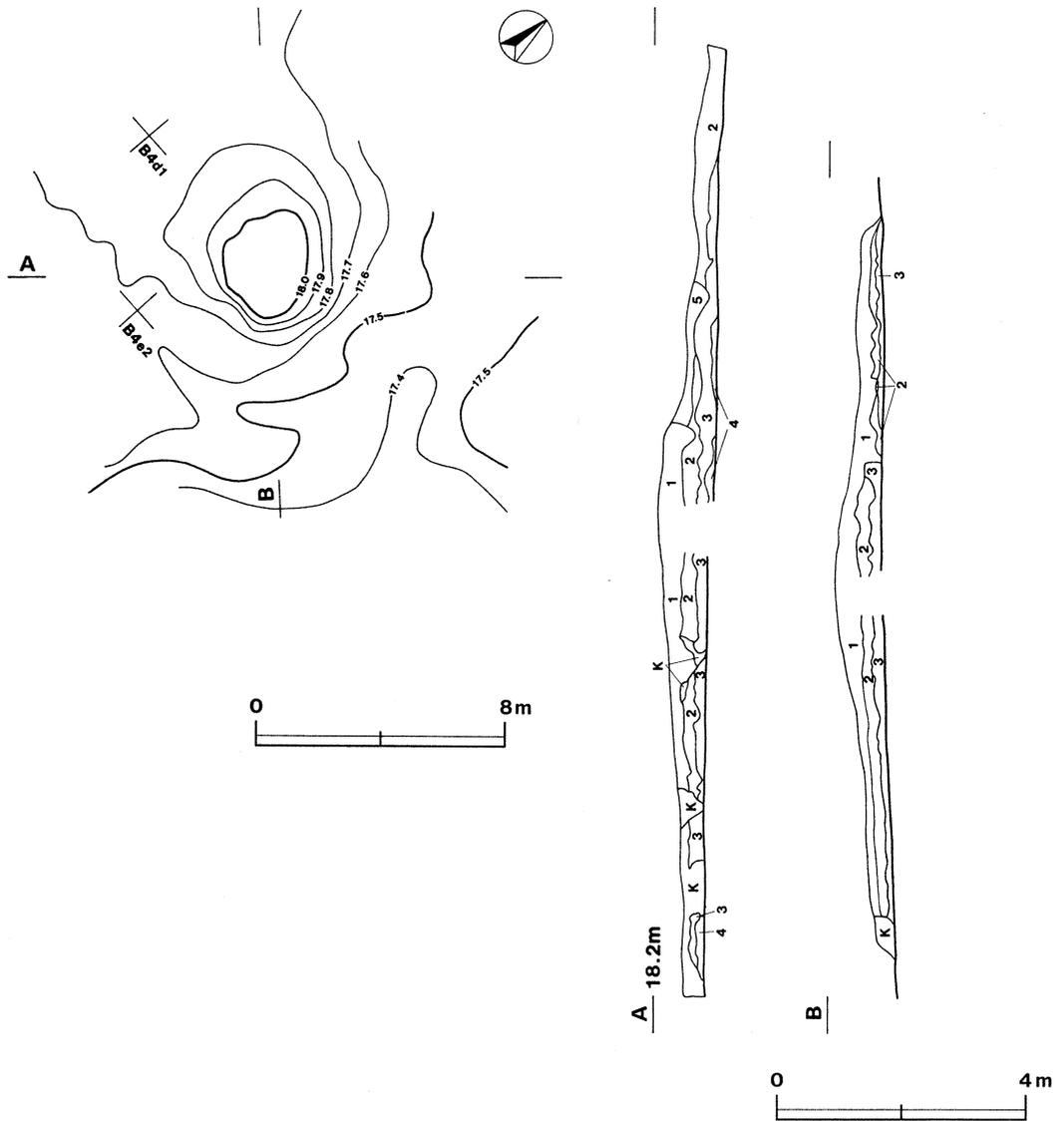
土坑 番号	位 置	長径方向 (長軸方向)	平 面 形	規 模 (m)		壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考	図 版 番号
				長径×短径	深さ						
52	B2 i6	N-63°-W	長 方 形	2.32 × 1.54	0.40	緩斜	平坦	人為	縄文式土器片, 土師器片, 炭化材		第52図
53	C3 d4	N-47°-W	橢 円 形	0.75 × 0.57	0.04	緩斜	皿状	不明	縄文式土器片		52
60	C3 a4	N-73°-E	円 形	0.52 × 0.49	0.12	緩斜	皿状	不明			52
66	B3 g8	N-57°-W	橢 円 形	1.17 × 0.80	0.43	外傾	皿状	人為	縄文式土器片, 土師器片		52
67	B3 g8	N-32°-W	橢 円 形	0.96 × 0.83	0.17	緩斜	皿状	人為			52
68	B2 e9	N-39°-W	橢 円 形	1.33 × 0.98	0.44	外傾	皿状	自然	縄文式土器 (加曾利E III式深鉢)		52
70	A4 j5	N-59°-E	円 形	0.56 × 0.51	0.16	緩斜	皿状	不明			52
73	B3 e6	N-50°-E	円 形	2.77 × 2.61	0.33	緩斜	皿状	人為	弥生式土器片		52
74	C2 g7	N-77°-E	橢 円 形	1.74 × 0.94	0.43	外傾	皿状	自然			52

### 3 塚

当遺跡からは、大小3基の塚が確認されたが、出土遺物がなく構築時期や性格について明らかにすることは困難であった。ここでは、調査結果に基づき塚の規模や形状等を中心に記載する。

#### 第1号塚（第54図）

**現状と確認状況** 伐開後の調査によって存在が確認されたもので、周囲の地表面に比べわずかに高まりが認められる程度である。



第54図 第1号塚実測図

位置 B4区

規模と形状 長軸13.0m・短軸12.0mの不整形状で、高さは0.5m前後である。

構築状況 周囲の旧地表（褐色土や暗褐色土）を互層に積み上げている。盛土には、木根等による攪乱が多く見られる。盛土の土層は、1層はローム主体で黒色土を極少量含む褐色土、2層はローム粒子・ローム小ブロックを少量含む暗褐色土、3層はローム粒子を極少量含む暗褐色土、4層はローム粒子・黒色土小ブロックを少量、ローム小ブロックを極少量含む暗褐色土、5層はローム粒子、ローム小ブロックを極少量含む暗褐色土である。

遺物 出土していない。

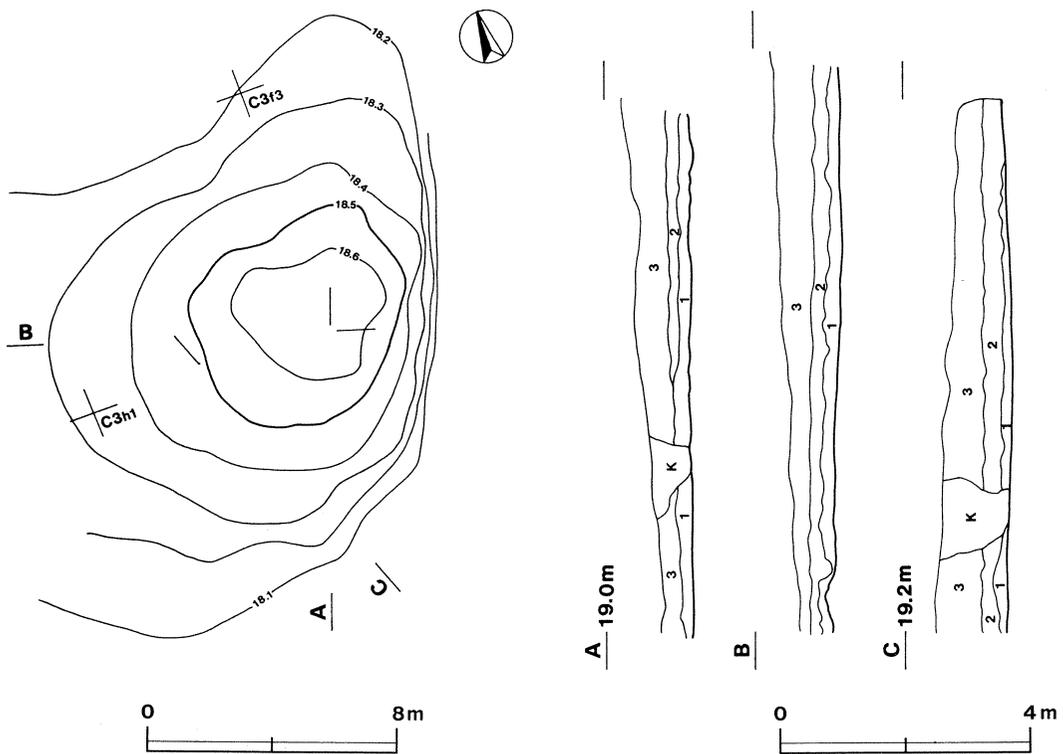
所見 本跡は出土遺物もなく、時期や性格については不明である。

### 第2号塚（第55図）

現状と確認状況 第1号塚と同様、伐開後の調査によって存在が確認されたもので、周囲の地表面に比べわずかに高まりが認められる程度である。

位置 C3区

規模と形状 長軸14.0m・短軸12.0mの不整形状で、高さは0.4m前後である。



第55図 第2号塚実測図

**構築状況** 周囲の旧地表を互層に積み上げている。盛土には、木根等による攪乱が多く見られる。盛土の土層は、1層は黒色土・褐色土ブロックを少量含む暗褐色土、2層は褐色土ブロックを少量含む黒褐色土、3層は砂粒子を多量に含む暗褐色土である。

**遺物** 出土していない。

**所見** 本跡は出土遺物もなく、時期や性格については不明である。

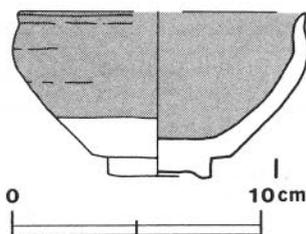
### 第3号塚（第57図）

**現状と確認状況** 伐開後の調査によって存在が確認されたもので、周囲の地表面に比べわずかに高まりが認められる程度である。

**位置** E1区

**規模と形状** 南側3分の1程が調査区外に延びているが、長軸22.0m・短軸12.0mの不整形状で高さは0.5m前後である。

**構築状況** 盛土の土層は、1層は褐色土小ブロックを中量含む暗褐色土、2層はローム粒子・ローム小ブロックを少量含む暗褐色土、3層はローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量含む褐色土、4層はローム粒子少量、ローム小ブロックを極少量含む暗褐色土、5層はローム粒子・ローム小ブロックを極少量含む暗褐色土である。6層は地山、7層は黒色土である。8層はローム粒子を極少量含む暗褐色土、9層はローム小ブロックを少量含む暗褐色土、10層はローム小



第56図 第3号塚出土遺物実測図

ブロックを中量含む明褐色土、11・12層はローム粒子を少量含む暗褐色土、13層はローム粒子を中量含む暗褐色土、14層はローム粒子を斑状に含む暗褐色土、15・16層はローム粒子を少量含む暗褐色土、17層は黒色土塊、18層はローム粒子を多量に含む褐色土、19層は粘土粒子を中量含む褐色土である。

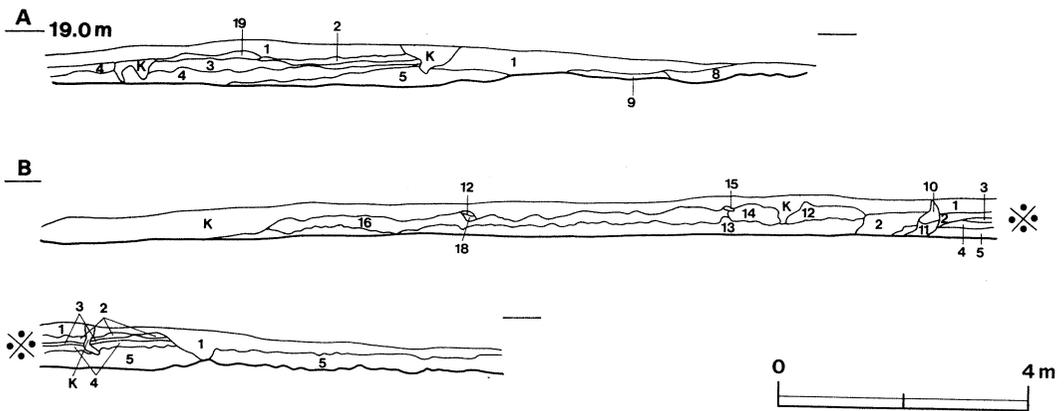
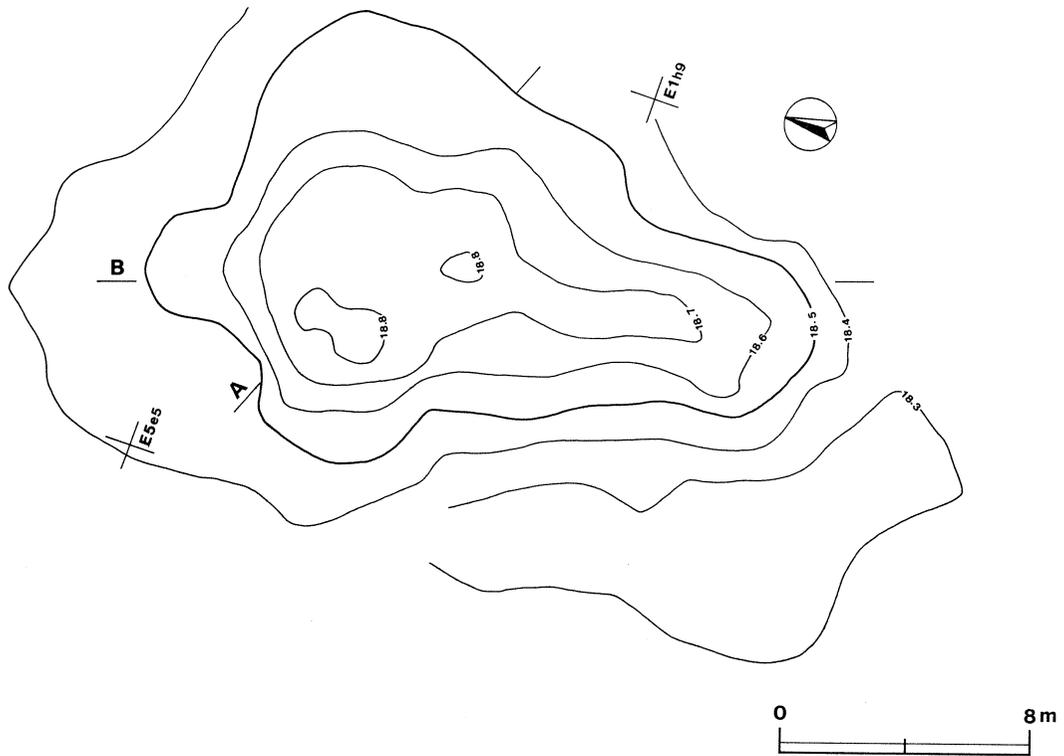
盛土の上層には、木根等による攪乱が多く見られる。

**遺物** 南側裾部の盛土上層から、第56図1の碗（鉄釉天目碗）が出土している。

**所見** 本跡は出土遺物から、近世の塚の可能性が高い。

### 第3号塚出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第56図 1	碗 陶器	A 〔11.6〕 B 6.8 D 4.2 E 0.9	天目碗。低い削り出し高台が付く。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はスッポン口状である。体部外面下半露胎。鉄釉。	水挽き成形。	(胎土) 灰褐色 (釉) 黒色 (焼成) 普通	P 89 40% 南側裾部盛土上層 18世紀前半 瀬戸・美濃系

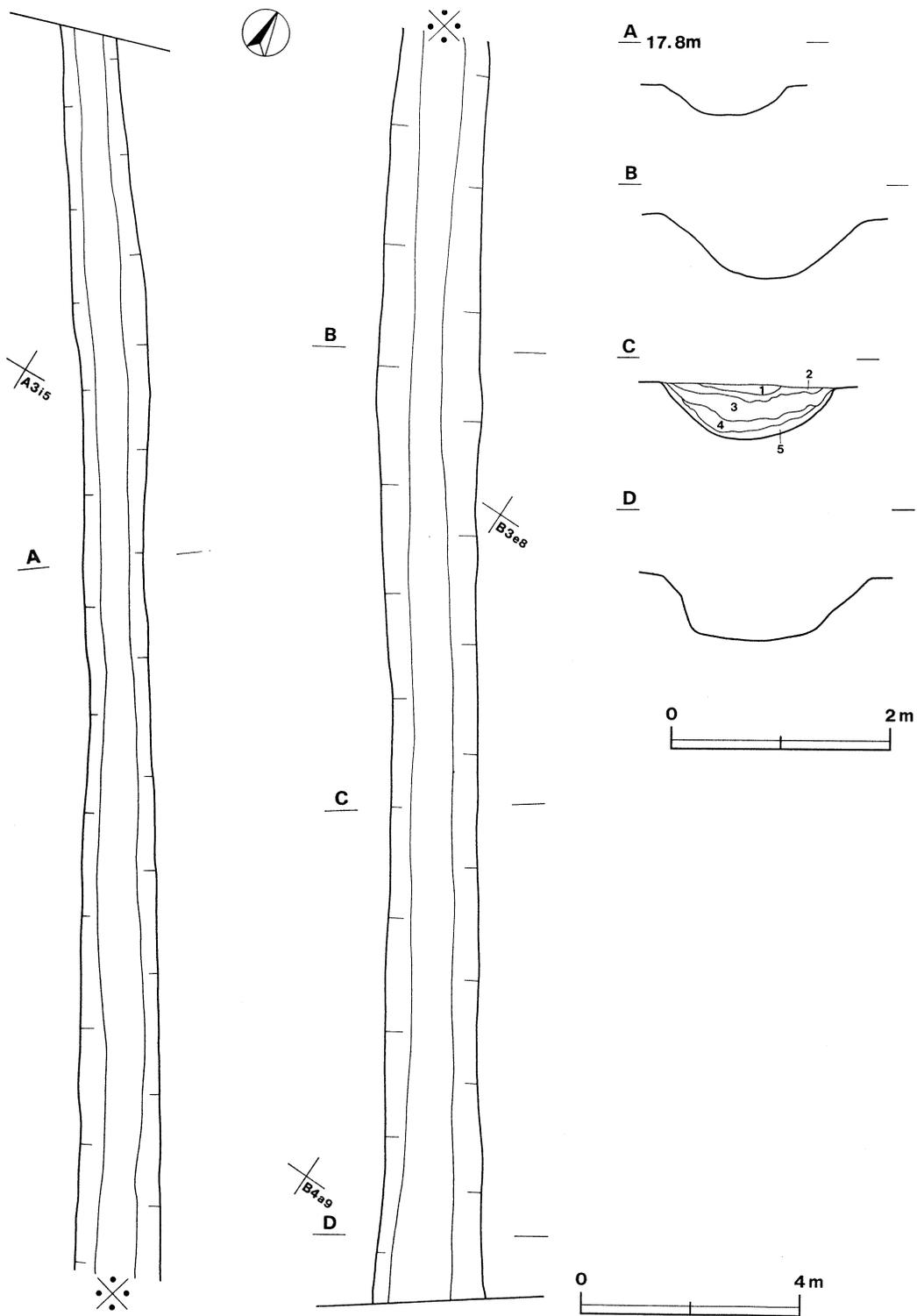


第57図 第3号塚実測図

#### 4 溝

当遺跡からは、1条の溝が確認されたが、出土遺物がなく時期や性格について明らかにすることは困難であった。ここでは、調査結果に基づき溝の規模や形状等を中心に記載する。

##### 第1号溝 (第58図)



第58图 第1号沟实测图

**位置** A3～B3区

**規模と形状** 北西から南東へ直線的に伸び、確認された長さ44.70m、上幅1.0～1.9m、下幅0.5～1.1m、深さ0.3～0.6mで、断面皿状に掘り込まれている。溝の両端共、調査区外に延びている。

**方向** N-35°-W

**覆土** 5層からなる。1～4層はローム粒子を少量含む暗褐色土で、5層はローム小ブロックを少量含む褐色土であり、自然堆積したものと思われる。

**遺物** 覆土中から、少量の縄文式土器片、弥生式土器片、土師器片が出土している。

**所見** 本跡は、遺構に伴う出土遺物もなく、時期や性格については不明である。

## 5 遺構外出土遺物

当調査区の遺構外出土遺物について、観察表、実測図及び拓影図でその一部を紹介する。

縄文式土器（第59・60・61図）

第1群の土器 縄文時代早期に比定される土器群を本群とする。（第59図）

第1類 縄文時代早期前葉の撚糸文系土器に比定される土器を本類とする。

a種 細い撚糸による施文が施されているもの。

1～24は口縁部片である。1～13は口縁部に無文帯をもち、口唇部は丸味をもっている。14～24の口縁部には撚糸による縦位の押圧が施されている。25～38は胴部片であり、撚糸による縦位の押圧が施されている。（稲荷台式土器）

b種 太い撚糸による施文が施されているもの。

39・40は胴部片であり、粗い撚糸による押圧が施されている。（稲荷原式土器）

c種 細い沈線が施されているもの。

41の口縁部は同じ厚さで直立し、縦位の細い沈線が施されている。（木の根式土器）

第2類 縄文時代早期中葉の条痕文系土器に比定される土器を本類とする。

42～49は胴部片である。いずれも表裏に貝殻腹縁文が施されている。（茅山式土器）

第2群の土器 縄文時代前期から中期に比定される土器群を本群とする。（第60図）

第1類 前期後葉に比定される土器を本類とする。

50・51は口縁部片である。横位の結節状浮線文が施され、同一個体と思われる。52は粗い縄文地文に細い結節状浮線文が施されている。（十三菩提式土器）

第2類 前期末から中期初頭に比定される土器を本類とする。

a. 53は口縁部片である。口縁部には横位の結節文が施され、下位に横位と斜位に半截竹管による

集合沈線が施されている。54・55は胴部片であり、53と同一個体と思われる。

b. 56～66は口縁部片である。56～58の口縁部には幾何学的に縄文原体が押圧されている。56・57は波状口縁であり、56は波状部の下にボタン状の貼り瘤が施されている。56～58は同一個体と思われる。60は波状口縁であり、口縁部には粗い縄文が施されている。59, 61の口縁部には斜位の縄文や結節文が施されている。63は口縁部が外反し、口縁下端には隆帯が巡らされている。64・65は複合口縁で、粗い縄文が施されている。66は口唇部に半截竹管による刺突が施され、口縁部は横位の波状文を施した後、半截竹管による横位の沈線が巡らされている。67～83は胴部片である。67～71は横位や斜位の波状文や沈線が施されている。72～80は地文の縄文の上に結節文が施されている。81・82は横位に羽状縄文が施されている。83は縦位の羽状縄文の上に縦位の結節文が施されている。

(粟島台式土器)

第3類 中期前葉に比定される土器群を本類とする。(第61図)

84～87は口縁部片である。84～86は口縁部の内・外面に隆帯を貼り、その上に鋸歯状沈線文が施されている。84の口縁部には貼り瘤が、85・86の口縁部には山形状の沈線が施されている。87は波状口縁で、口唇部にはキザミが巡らされ、口縁部の内・外面には三角文が施されている。88は胴部片で、渦巻文が施されている。(五領ケ台式土器)

第4類 中期中葉に比定される土器を本類とする。

89は口縁部片である。無文帯の下位に2本の隆帯を巡らせ、隆帯の上下を棒状工具により交互に刺突されている。(中峠式土器)

第5類 中期後葉に比定される土器を本類とする。

90は口縁部片、91は頸部片である。隆帯による区画がなされ、区画内は単節縄文RLが横位回転で施文されている。92～96は胴部片である。92は2条の沈線による懸垂文が施され、93は縦位の絡条体圧痕文が施されている。94～96は縦位の櫛歯状条線文が施されている。(加曾利EⅢ式土器)

第3群の土器 縄文時代後期に比定される土器群を本類とする。(第61図)

第1類 後期前葉に比定される土器を本類とする。

97は口縁部片である。内・外面の上位に横位の太い沈線を巡らしている。(堀之内式土器)

98は口縁部片、99・100は胴部片であり、いずれも横位の沈線内に縄文を充填している。101は口縁部片で、口唇部はやや肥厚気味である。内面には内削ぎによる稜をもち、外面は横位のナデが施されている。(加曾利B式土器)

## 弥生式土器（第61図）

出土した弥生式土器片は、弥生時代後期に比定される。

102～104は口縁部片である。102の口唇部にはキザミが施され、103の口唇部には棒状工具によって交互に刺突が施されている。102～104はいずれも複合口縁で、口縁部には付加条一種（付加2条）の縄文が施文され、口縁下端には丸棒状工具による押圧が施されている。

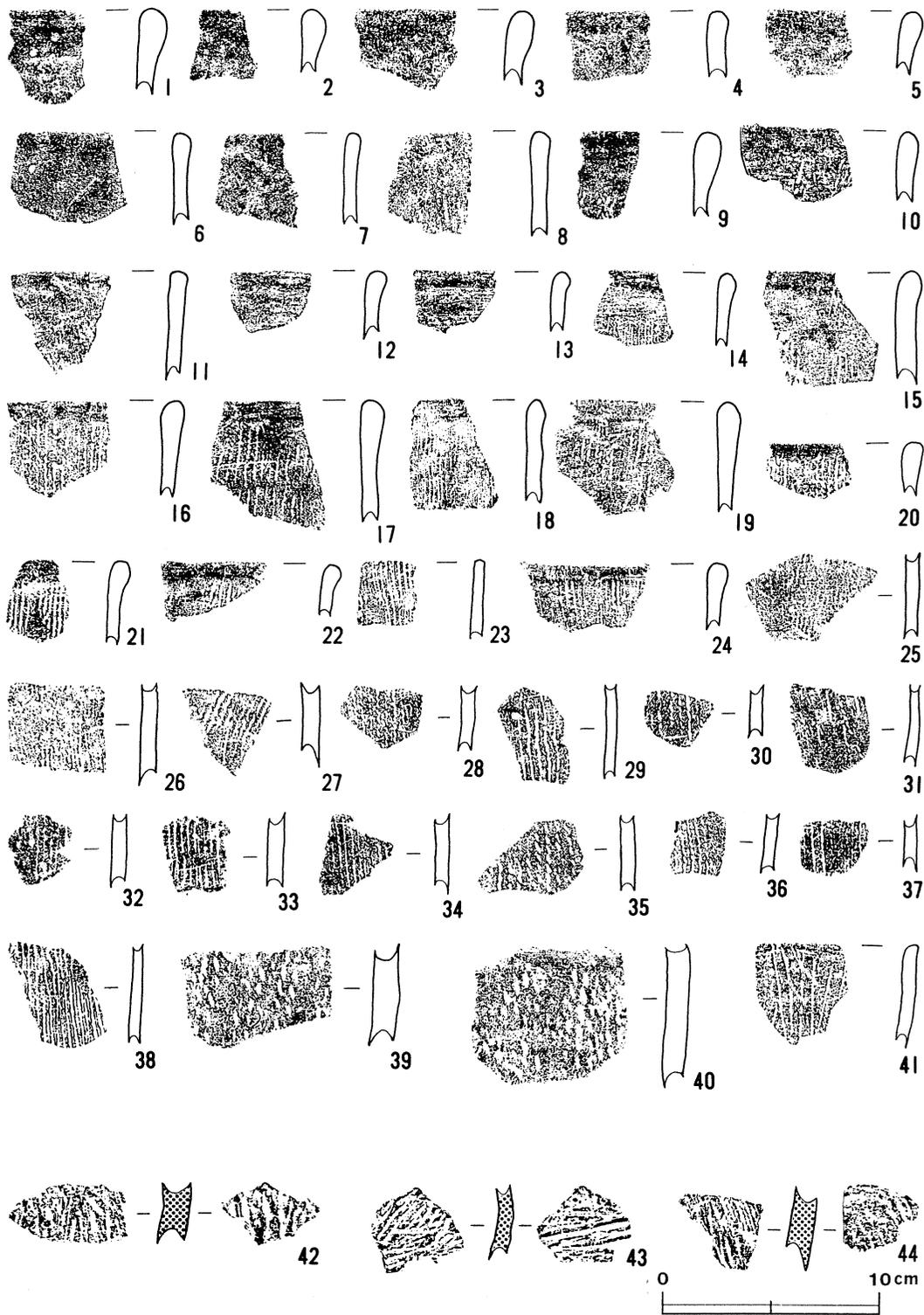
105は頸部から胴部にかけての破片である。頸部は無文で、胴部には付加条一種（付加2条）の縄文が施文されている。

106～108は胴部片である。いずれも付加条一種（付加2条）の縄文が施文されている。109は底部にかけての破片であり、わずかに残る胴部には付加条の縄文が施文され、底部には木葉痕が見られる。

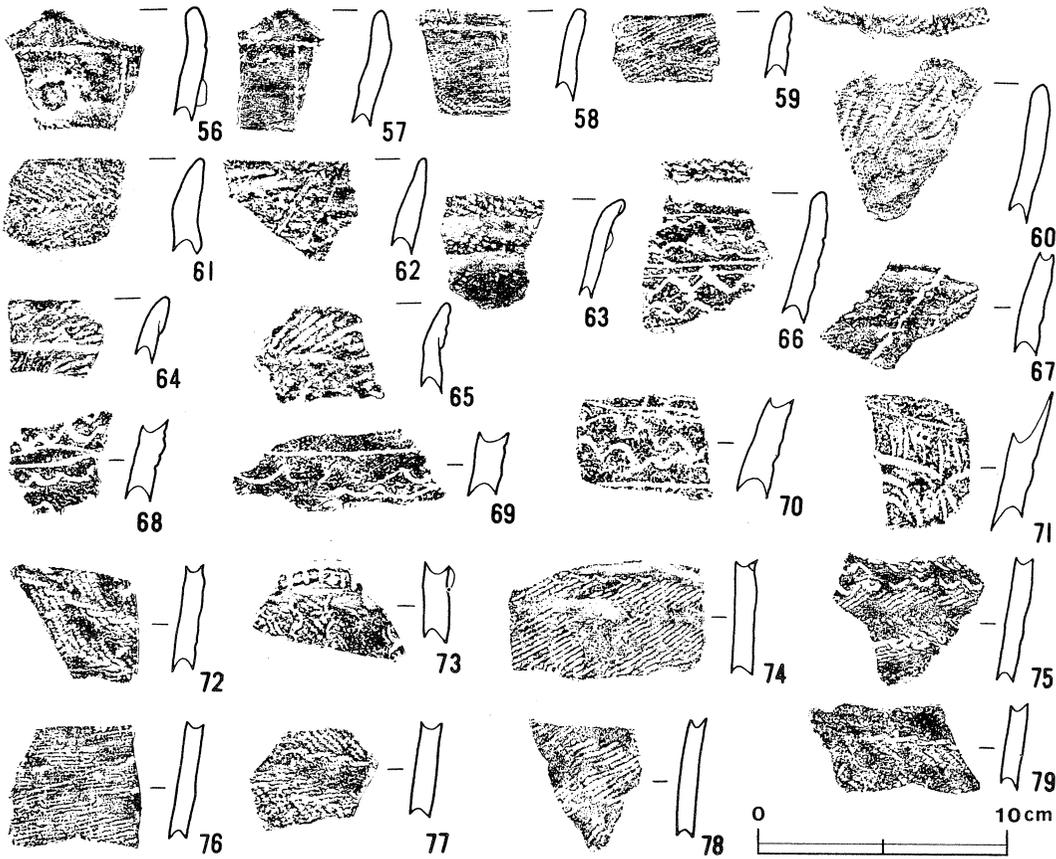
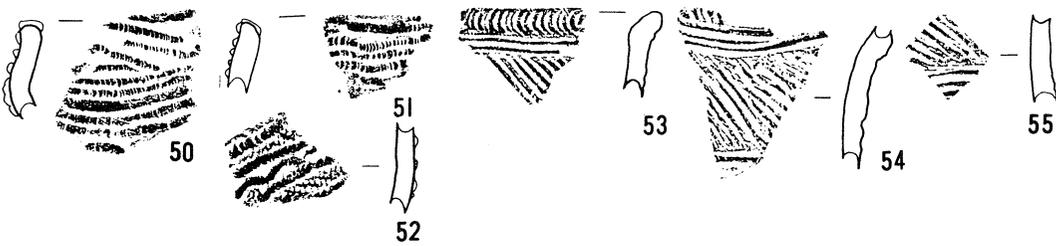
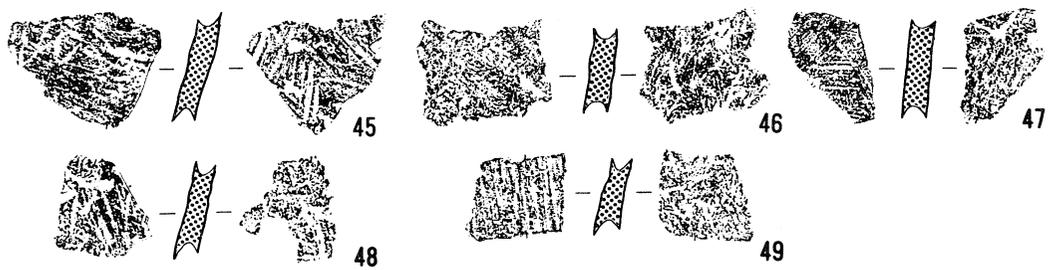
## 遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第62図 1	器台 土師器	D (17.0) E (5.5)	脚部片。脚部はラッパ状に開く。孔は6孔と思われる。	裾部外面縦位のヘラミガキ、内面ハケ目整形後ナデ。外面赤彩。	長石、スコリア 赤色 普通	P 90 10% 表採
2	ミニチュア 土器 土師器	A 5.0 B 3.9 C 3.0	埴形。平底。体部は内彎して立ち上がる。頸部はわずかにくびれ、口縁部は短く外反する。	体部外面ヘラナデ、内面ナデ。	スコリア にぶい橙色 普通	P 91 100% 表採

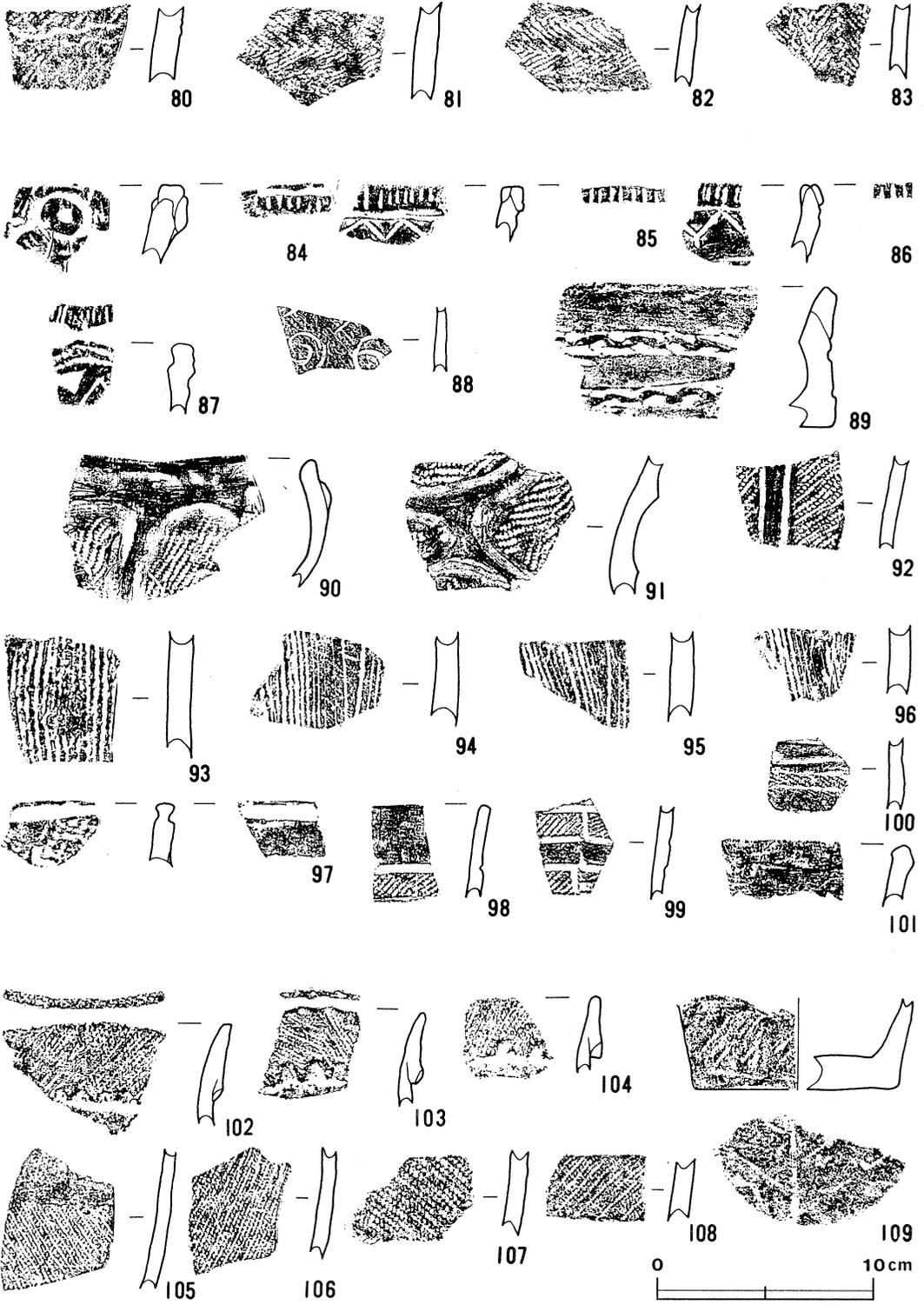
図版番号	器種	計測値 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第62図3	土玉	3.1	3.4	—	5.0	31.2	100	表採	DP27
4	土玉	3.4	3.1	—	7.0	25.7	100	表採	DP28
5	土玉	2.2	2.4	—	8.0	11.4	100	表採	DP29
6	土玉	2.7	2.2	—	6.0	(11.5)	80	表採	DP30
7	土玉	3.0	2.8	—	7.0	18.1	100	表採	DP31
8	管状土鍾	2.6	2.1	—	4.0	11.4	100	表採	DP32
9	土器片鍾	2.9	2.5	1.2	—	11.2	100	表採	DP33



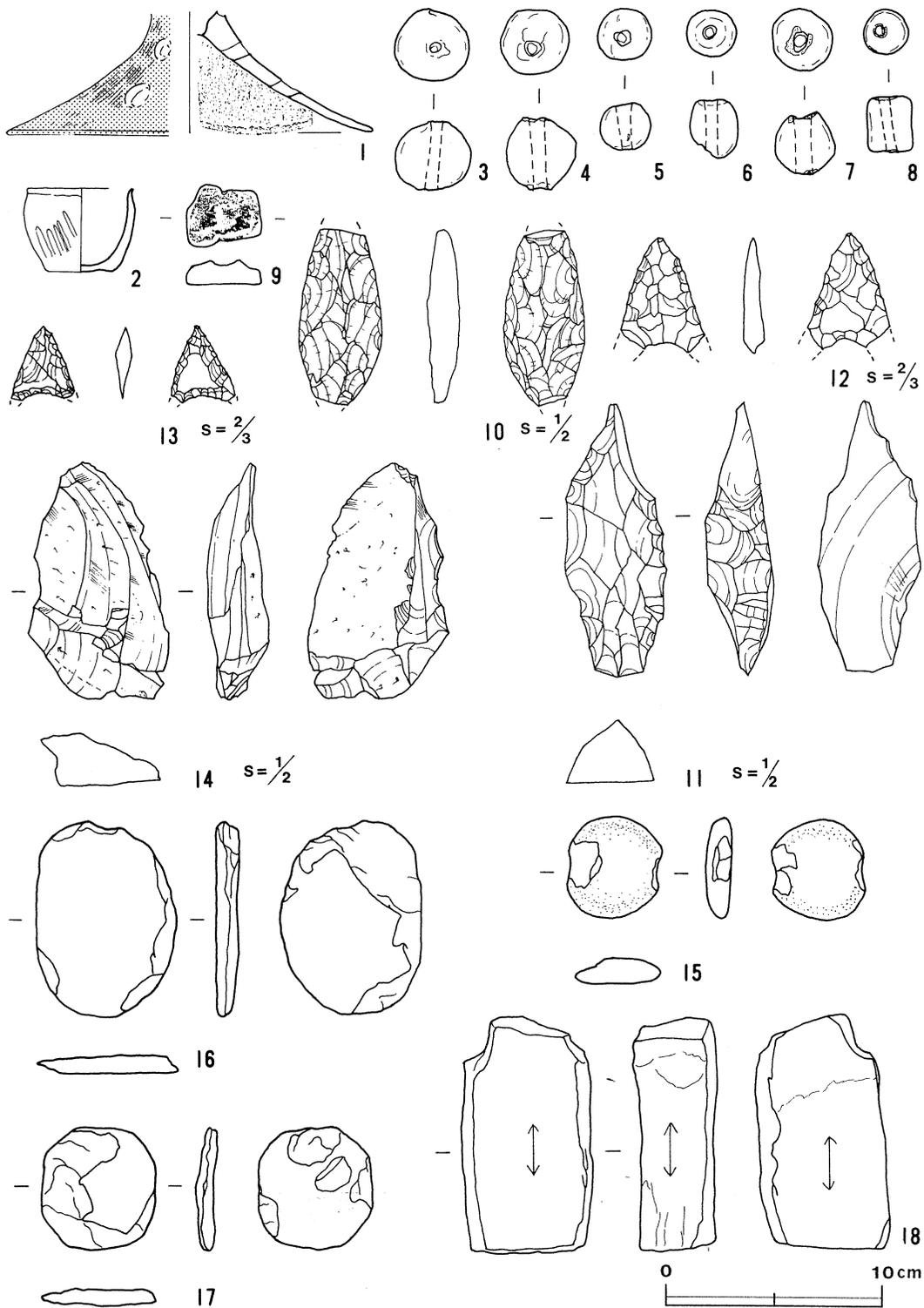
第59图 遺構外出土遺物拓影图(1)



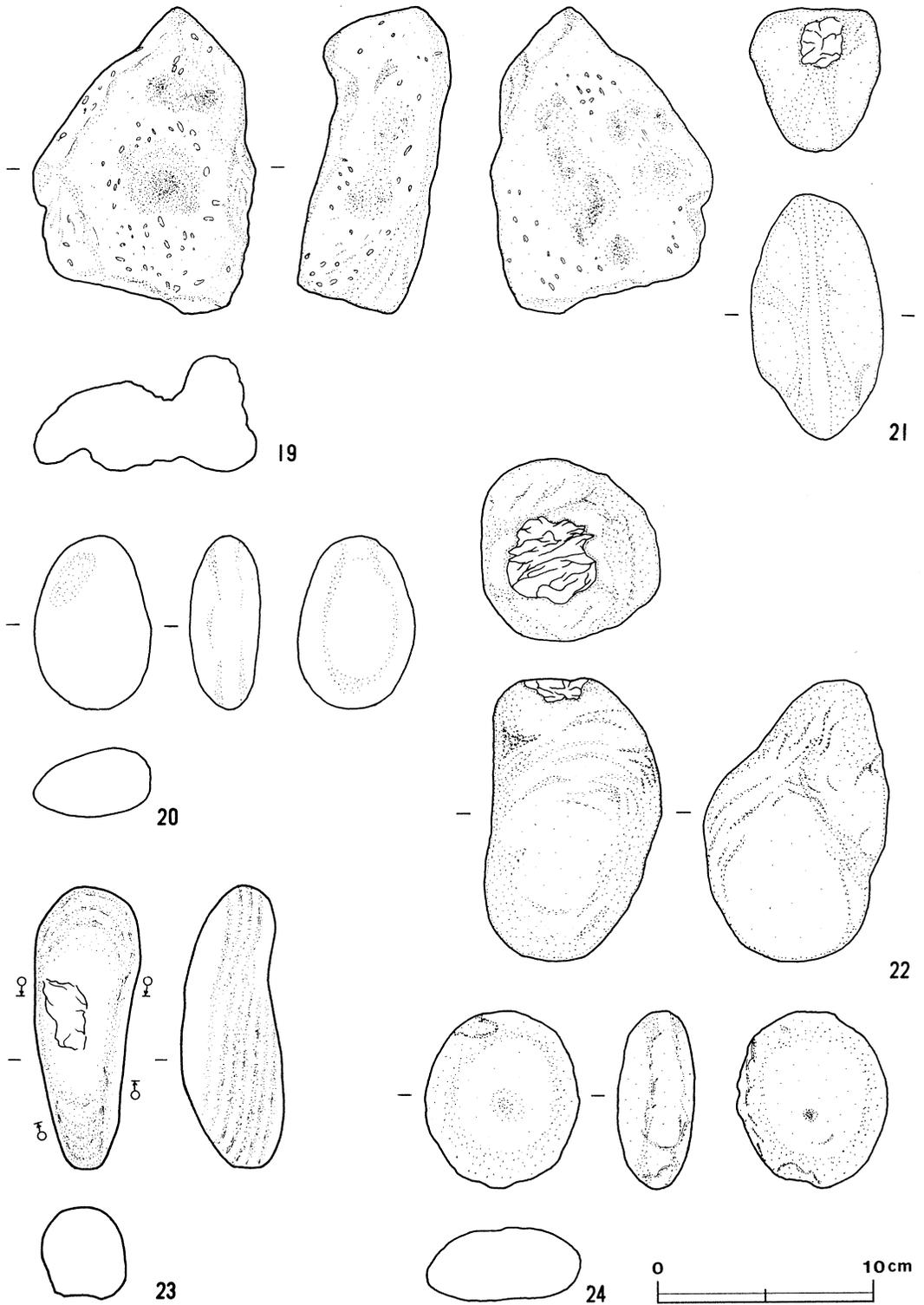
第60图 遺構外出土遺物拓影图(2)



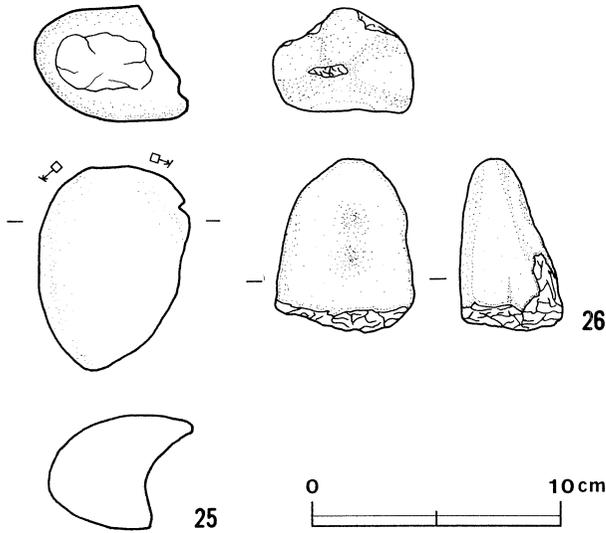
第61图 遺構外出土遺物拓影图(3)



第62図 遺構外出土遺物実測図(1)



第63図 遺構外出土遺物実測図(2)



第64図 遺構外出土遺物実測図(3)

図版番号	器 種	計 測 値				石 質	出 土 地 点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第62図10	尖 頭 器	(5.5)	2.6	1.0	(13.0)	チャート	表 採	Q14
11	ナイフ形石器	8.5	3.3	1.9	42.5	安山岩	E2a <sub>4</sub> 区覆土内	Q15
12	石 鏃	(2.7)	(1.9)	0.5	(1.5)	安山岩	D2d <sub>1</sub> 区覆土内	Q16
13	石 鏃	(1.7)	(1.4)	0.4	(0.6)	黒曜石	D2i <sub>0</sub> 区覆土内	Q17
14	剥 片	11.0	6.5	2.5	137.4	黒曜石	E2区覆土内	Q18
15	石 錘	4.7	4.3	1.2	36.8	安山岩	表 採	Q19
16	円板状石製品	9.1	6.6	0.8	75.4	安山岩	表 採	Q20
17	円板状石製品	5.7	5.3	0.8	31.7	安山岩	表 採	Q21
18	砥 石	11.1	6.0	3.1	(404.9)	粘板岩	B3a <sub>7</sub> 区覆土内	Q23
第63図19	凹 石	14.5	10.5	5.5	(616.9)	安山岩	表 採	Q22
20	磨 石	8.2	5.4	3.2	189.1	安山岩	D2j <sub>6</sub> 区覆土内	Q25
21	敲 石	11.5	6.1	6.8	611.1	安山岩	E3a <sub>1</sub> 区覆土内	Q26
22	敲 石	14.1	8.3	8.5	1270.6	緑色凝灰岩	E3a <sub>1</sub> 区覆土内	Q24
23	磨 石	13.2	5.1	4.3	(372.9)	安山岩	D2j <sub>6</sub> 区覆土内	Q27
24	磨 石	8.3	7.1	3.4	265.5	安山岩	E3a <sub>1</sub> 区覆土内	Q28
第64図25	磨 石	(8.3)	(6.1)	4.6	(260.0)	砂 岩	D2j <sub>6</sub> 区覆土内	Q30
26	磨 石	(7.0)	5.5	4.2	(188.0)	安山岩	C3f <sub>1</sub> 区覆土内	Q31

### 第3節 まとめ

今回の調査によって、当遺跡は縄文時代から弥生時代を経て古墳時代中期までと、近世の複合遺跡であることが明らかになった。ここでは、各時期毎に概観し、まとめとしたい。

#### I期 縄文時代

調査区内からは、当該期の遺構は確認されていないが、早期から後・晩期にいたる縄文式土器片が出土している。特に、早期前葉の稲荷台・稲荷原式土器片が多く出土しており、当遺跡が、当時の人々の生活の一つの場として存在していたことが考えられる。また、千葉県の本の根遺跡から出土している、木の根式土器に類似した口縁部片が出土している。

#### II期 弥生時代後期中葉

第16号住居跡が当該期に属し、調査区の北部に位置している。平面形は隅丸長方形で、4本支柱穴と出入り口施設に伴うピットがあり、地床炉は住居跡の北側に付設されている。住居の形態は、同時期と思われる岩井市高崎貝塚の4軒の住居跡とほぼ同じ規則性がみられる。遺物は、広口壺、紡錘車、アメリカ式石鏃等が出土している。特に、広口壺は那珂川下流域（勝田市、那珂湊市、大洗町）から多く出土している髭釜式土器に類似している。

#### III期 古墳時代前期前葉

第1・7・9号住居跡が当該期に属し、調査区の南部に位置している。平面形は方形ないし長方形で、地床炉が住居跡のほぼ中央部に付設されているが、支柱穴は確認されていない。また、貯蔵穴は南壁の中央からやや東側に付設されている。第1号住居跡の地床炉内からは、水平に置かれた焼成粘土板上に、台付甕が乗った状態で出土している。焼成粘土板については、県内にはまだ報告例がなく、関東地方では、東京都八王子市の鞍骨山遺跡に報告例がみられる。鞍骨山遺跡出土のものと比較すると、当遺跡から出土したものは、小さく、作りも雑（表側に指頭痕、裏側に網代痕）である。

#### IV期 古墳時代前期中葉

第3・4・5・6・10・12・13・14・17号住居跡が当該期に属し、調査区の南部一帯に位置している。平面形は方形ないし長方形で、地床炉は住居跡の中央からやや東側に付設されている。支柱穴は確認されず、貯蔵穴は東コーナー寄りに付設されている。この時期が当遺跡の全盛期と思われる。遺物は、壺、甕、台付甕、埴等の日常生活に使用する土師器のほか、赤彩された器台、ミニチュア土器等の祭祀具と思われる土器が出土している。第12号住居跡からは、祭祀具と思われる構造船をかたどった赤彩された舟形土製品（舳先部分）が出土している。

#### V期 古墳時代中期前葉

第15号住居跡が当該期に属し、調査区の中央部に位置している。平面形は長方形で、地床炉は

住居跡の中央部からやや北側に付設されている。主柱穴は確認されないが、貯蔵穴は南コーナーに付設されている。遺物は、脚部が中空で太い高坏や、口縁部が強く外傾する鉢等が出土している。

#### VI期 古墳時代中期中葉

第2・8・11号住居跡が当該期に属し、調査区の南部に位置している。平面形は方形ないし長方形で、規模が大型になる。特に、第11号住居跡は一辺が9.6 m程で当遺跡では最大規模である。第2・11号住居跡からは、4本主柱穴と出入り口施設に伴うピットが確認され、貯蔵穴は南コーナーに付設されている。遺物は、甕、甑、鉢、埴、坏、高坏等が出土している。

大形住居跡の形態や埴・坏のセット関係については、牛久市ヤツノ上遺跡に類似した報告例がみられる。

#### VII期 近世

近世の遺構として、3基の塚が確認されている。特に、第3号塚から出土している瀬戸・美濃系の天目碗は18世紀前半のものと思われ、この時期に構築されたものと考えられる。

#### 注・参考文献

- (1) 池田 大助「北総台地における沈線文土器群の出現－木の根Ⅰ式及びⅡ式土器の提唱－」  
『研究紀要8』千葉県文化財センター 1984年
- (2) 東京都八王子市谷野遺跡調査団 「鞍骨山遺跡」 1971年
- (3) 茨城県教育財団「牛久北部特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅰ）ヤツノ上遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』 第81集 1993年
- (4) 茨城県教育財団「茨城県自然博物館（仮称）建設用地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 原口遺跡・北前遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』 第83集 1993年
- (5) 茨城県教育財団「茨城県自然博物館（仮称）建設用地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 高崎貝塚」『茨城県教育財団文化財調査報告』 第88集 1994年
- (6) 岩井市史編さん委員会「岩井市の遺跡」『岩井市史遺跡調査報告書』 第1集 1992年
- (7) 山内清男『日本先史土器の縄文』 先史考古学会 1979年



第65図 時期別住居跡配置図

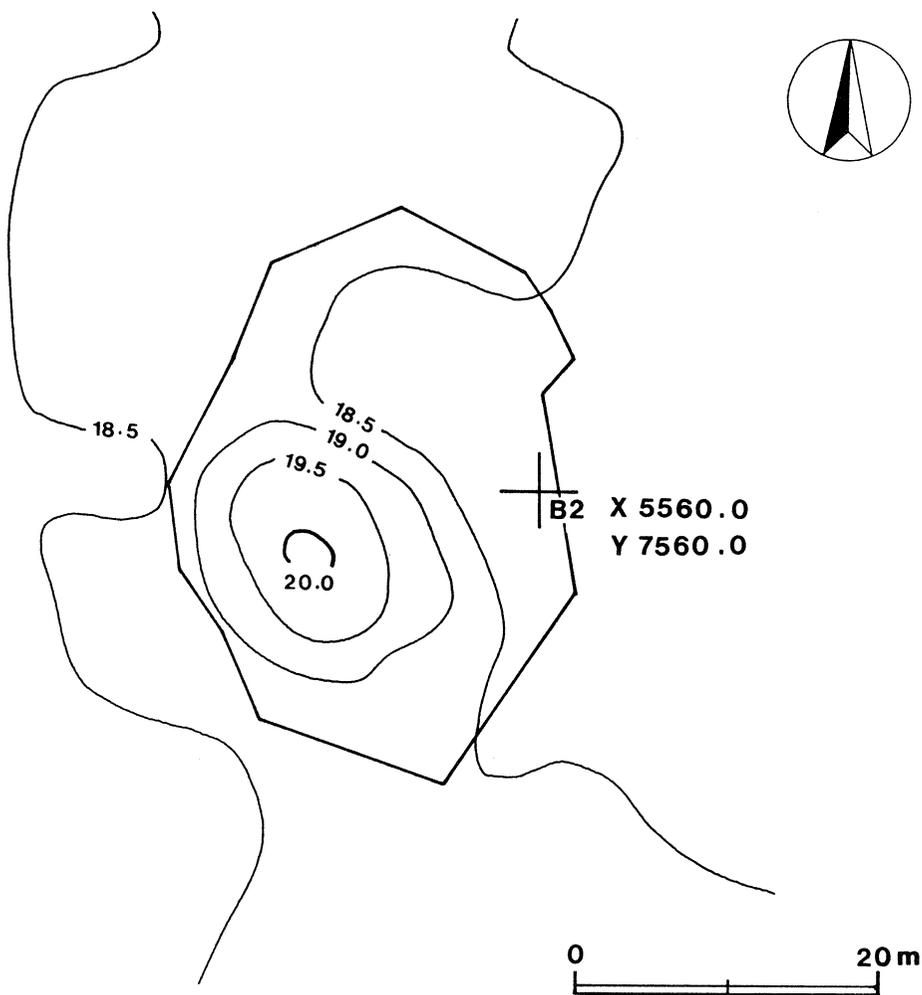
# 第5章 南開遺跡

## 第1節 遺跡の概要

南開遺跡は、岩井市の北東部、姥ヶ谷津遺跡の西側へ約800m離れた、標高18~19mの台地上に立地している。現況は山林であり、調査区域は、南北に約30m、東西に約30m、面積900.4㎡である。

今回の調査によって、調査区南西部から近世の塚1基が確認されている。塚の規模及び形状は、基底面の一辺が13~14mの方形を呈し、高さは約1.7mである。

遺物は、南側裾部の盛土中から陶器（中瓶）、土師質土器（皿）、煙管、古銭（寛永通宝）等が出土している。



第66図 南開遺跡全体図

## 第2節 遺構と遺物

### 1 塚

当遺跡からは、1基の塚が確認された。出土遺物としては、陶器、土師質土器、古銭等があり、近世に構築されたものと思われる。ここでは、調査結果に基づき、塚の規模や形状及び出土遺物について記載する。

#### 第1号塚（第67図）

**現状と確認状況** 山林の中に、表面を雑木で覆われた高さ1m程のマウンドが確認された。頂上部には平坦面も確認されたが、長い間放置されて、荒れた状態であった。

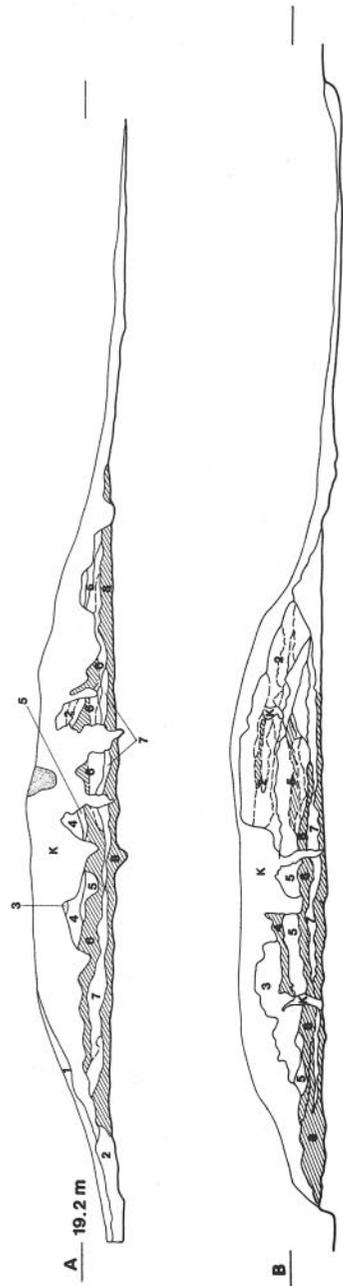
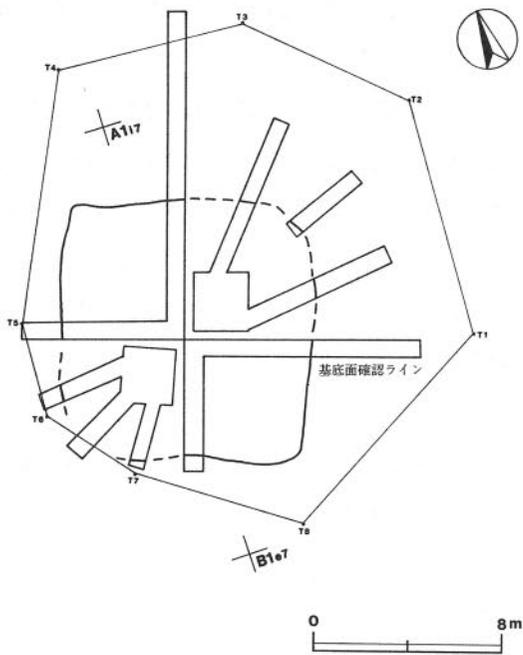
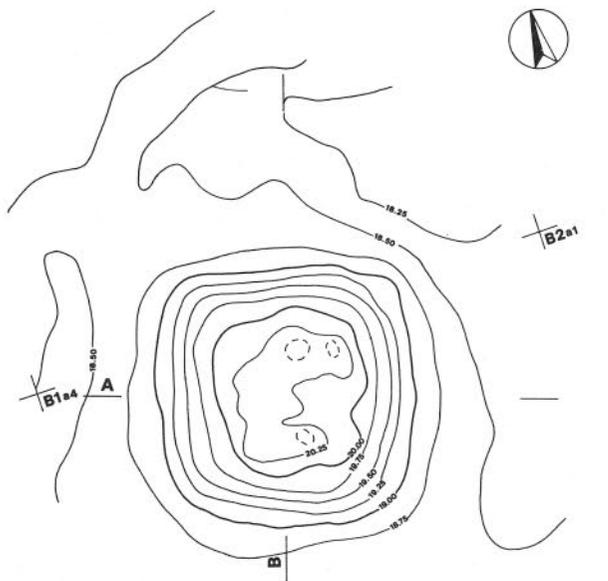
**位置** A1・2区

**規模と形状** 基底面は、14.0m（北東～南西）と13.5m（北西～南東）の隅丸形状で、現地表面からの高さは1.70m程である。塚は基底面から1.70m程の高さまで方錐状に立ち上がった後、多少の凹凸が認められるものの、一辺8m程の方形状の平坦な頂上部を形成している。頂上部の標高は20.375mである。

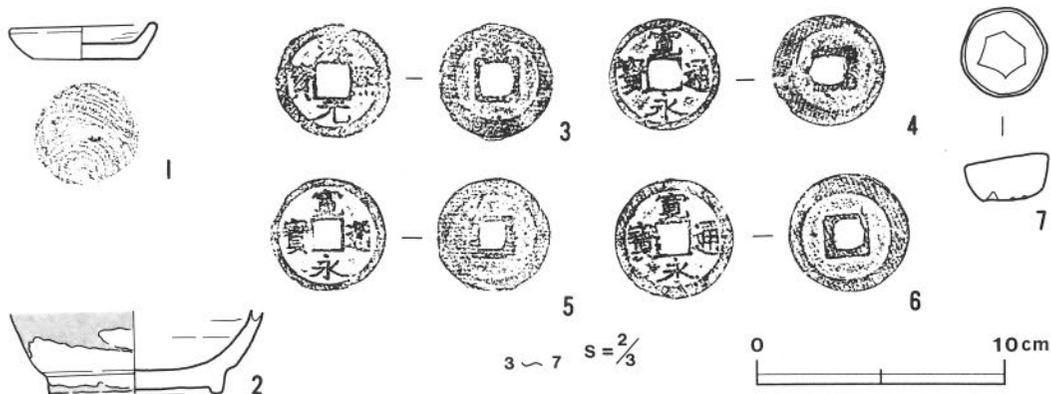
**構築状況** 旧地表の上に暗褐色土や褐色土を方錐状に互層に積み上げ、頂上部は平坦にしている。盛土の上層は、木根等の攪乱が数か所に認められる。盛土の土層は、1層は砂質の褐色土、2層はローム小・中ブロック・黒褐色土を少量含む暗褐色土、3層はローム粒子・暗褐色土粒子を多量に含む暗褐色土、4層はローム中・大ブロック・黒色土ブロックを多量に含む暗褐色土、5層は褐色土ブロックを多量に含む暗褐色土、6層はローム中・大ブロックを多量に含む褐色土、7層はローム小・中ブロックを多量に含む暗褐色土、8層はローム粒子・小・中ブロックを少量含む暗褐色土、9層は暗褐色土である。

**遺物** 頂上部南部の盛土中から内耳土器片が、南側裾部の盛土中から第68図1の土師質土器（皿）、2の陶器（中瓶）、3～6の古銭（淳熙元寶1点、寛永通寶3点）が、北部の盛土中から7の煙管（火皿）が、それぞれ出土している。

**所見** 本跡は、出土遺物等から、近世の塚と思われる。



第67図 第1号塚実測図



第68図 第1号塚出土遺物実測・拓影図

第1号塚出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第68図 1	皿 土師質土器	A 6.0	平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口唇部は丸味をもつ。	水挽き成形。 横ナデ。 底部回転糸切り。	スコリア にふい黄橙色 普通	P1 90% 南側裾部
		B 1.5				
		C 4.2				
2	中瓶 陶器	B (3.3)	底部片。平底。低い削り出し高台が付く。外面胎釉，うのふ釉内面露胎。尾呂徳利	水挽き成形。	(胎土) 浅黄色 (釉) にふい黄褐色 (焼成) 普通	P2 20% 南側裾部17c後~18c前 瀬戸・美濃系
		D 7.0				
		E 1.0				

図版番号	銭名	初鑄年(西暦)	鑄造地名	出土地点	備考
第68図3	淳熙元寶	1174	南宋	南側裾部	M1
4	寛永通寶	1668	日本	南側裾部	M2
5	寛永通寶	1668	日本	南側裾部	M3
6	寛永通寶	1668	日本	南側裾部	M4

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第68図7	煙管	1.8	1.7	(0.9)	1.7	北部盛土中	M5

重施主第七世□□也

元文五庚申天十一月日

篠塚八右衛門

升奉重補千部供養塔一尊

本主同村

天下泰平一家繁榮

長光院蓮久淨真居士



第69図 第1号塚供養塔拓影図

### 第3節 まとめ

南開遺跡の塚は、今回の調査によって、近世に構築されたことが明らかになった。ここでは、発掘の成果や地域の伝承等を基に、まとめをしたい。

塚は、基底面の一辺が14m程の隅丸方形で、方錐状に立ち上がった、高さ1.7m程の規模である。遺物は、土師質土器（皿）、陶器（中瓶）、古銭（淳熙元寶・寛永通寶）、煙管（火皿）が出土している。特に、南側裾部から出土している中瓶は、瀬戸・美濃系の尾呂徳利であり、17世紀後半から18世紀前半のものと考えられている。

地域では「千部塚<sup>せんぶづか</sup>」と呼ばれており、十数年前までは供養塔が頂部に立てられてあったが、現在、所有者が別の場所に移して供養している。供養塔は、自然の安山岩を使用したもので、造立年代については第69図に示したように、「元文五庚申天十一月日」と判読可能なことから、供養塔は元文5年庚申（1740年）に造立されたものと考えられる。供養塔の大きさは最大高132cm、最大幅58cm、最大厚25cmであり、下位には「蓮花」が刻まれている。

供養塔には、「施主篠塚八右衛門 奉重補千部供養塔 天下泰平一家繁栄」とあることから、江戸時代「重補千部」なる人物の供養をするために構築されたものと考えられる。



# 付 章



# 姥ヶ谷津遺跡から出土した炭化材の種類

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

姥ヶ谷津遺跡（岩井市大字幸田所在）は、利根川と鬼怒川に挟まれた台地の菅生沼東岸部に位置する。本遺跡では、これまでの発掘調査により弥生時代から古墳時代の住居跡が検出された。このうち、古墳時代前期（五領式）の第1号住居跡および第12号住居跡では住居構築材と考えられる炭化材が出土した。今回の分析調査では、この2軒の住居跡から出土した構築材について材同定を行い、その種類を明らかにする。

## 1. 試料

試料は、第1号住居跡および第12号住居跡から出土した柱材と考えられる炭化材2点（S I - 1 炭化材、第12号住居跡炭化材No.2）である。

## 2. 方法

試料を乾燥させたのち、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の割断面を作製し、走査型電子顕微鏡（無蒸着・反射電子検出型）で観察・同定した。

## 3. 結果

試料は、第1号住居跡から出土した柱材がコナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種に、第12号住居跡から出土した柱材がコナラ属コナラ亜属コナラ節の一種に同定された。クヌギ節とコナラ節の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質を以下に記す。なお、和名・学名等は、主として「原色日本植物図鑑 木本編<II>（北村・村田，1979）に従い、一般的な性質などについては「木の辞典 第2巻」（平井，1979）も参考にした。

- ・コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris* sp.)

ブナ科

試料名：S I - 1 炭化材

環孔材で孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。大道管は管壁は厚く、横断面では円形、小道管は管壁は中庸～厚く、横断面では角張った円形、ともに単独で単穿孔を有する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと同定複合放射組織とがある。

クヌギ節は、コナラ亜属（落葉ナラ類）の中で、果実（いわゆるドングリ）が2年目に熟するグループで、クヌギ（*Quercus acutissima* Carruthers）とアベマキ（*Q. Variabilis* Blume Ver. *brevipetiolata* Nakai）の2種がある。クヌギは本州（岩手・山形県以南）・四国・九州に、アベマキは本州（山形・静岡県以西）・四国・九州（北部）に分布するが。中国地方に多い。クヌギは樹高15mになる高木で、材は重硬である。古くから薪炭材として利用され、人里近くに萌芽林として造林されることも多く、薪炭材としては国産材中第一の重要材である。このほかに器具・杭材楳木などの用途が知られる。樹皮・果実はタンニン原料となり、果実は染料・飼料ともなった。アベマキはクヌギによく似た高木で、樹皮の Cork 層が発達して厚くなる。材質はクヌギに似るが、さらに重い。用途もクヌギと同様であるが、樹皮が厚いため薪材にはむかず、炭材としてもクヌギ・コナラより劣るとされる。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus* sp.）

ブナ科

試料名：第12号住居跡炭化材No.2

環孔材で孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、小道管は管壁は中庸～薄く、横断面では多角形で、いずれも単穿孔を有する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

コナラ節は、コナラ亜属（落葉ナラ類）の中で、果実（いわゆるドングリ）が1年目に熟するグループで、モンゴリナラ（*Quercus mongolica* Fischer ex Turcz.）とその変種ミズナラ（*Q. mongolica* Fischer ex Turcz. var. *grosseserrata* (Bl.) Rehder et Wilson）、コナラ（*Q. serrata* Murray）、ナラガシワ（*Q. aliena* Blume）、カシワ（*Q. dentata* Thunberg）といくつかの変・品種を含む。モンゴリナラは北海道・本州（丹波地方以北）に、ミズナラ・カシワは北海道・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州（岩手・秋田県以南）・四国・九州に分布する。コナラは樹高20mになる高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・樽材などの用途が知られ、薪炭材としてはクヌギ（*Q. acutissima* Carruthers）に次ぐ優良材である。枝葉を緑肥としたり、虫えいを染料とすることもある

#### 4. 考察

同定されたクヌギ節とコナラ節は、古墳時代の住居構築材に比較的多いことが知られている（千野，1991）。本遺跡周辺では、高崎貝塚および北前遺跡の住居跡から出土した構築材と考えられる炭化材の多くがクヌギ節に同定されている。また、隣接する水海道市奥山A遺跡や西原遺跡でも、古墳時代の住居構築材にクヌギ節・コナラ節が同定されている（パリーノ・サーヴェイ株式会社、

1986 a, b)。今回の結果は、これまでに周辺の遺跡で得られた資料と同様の結果であり、当時クヌギ節・コナラ節が住居構築材として本遺跡周辺部で広く利用されていたことが推定される。

ところで、今回の調査では住居跡の構築材が、第1号住居跡がクヌギ節、第12号住居跡がコナラ節であった。この結果は、住居によって構築材の種類が異なっていたことを示唆する。しかし、各住居跡の同定点数が1点ずつであるため、実際に住居によって構築材の種類が異なっていたか否かは断定できない。いずれの住居跡も今回調査した以外にも構築材と考えられる炭化材が出土しており、今後これらの炭化材についても同定を行い確認する必要がある。また、西原遺跡や高崎貝塚では、住居構築材にヌルデやハンノキ属も同定されており、クヌギ節以外にも構築材として使用された種類があったことを示唆している。住居構築材の中でも垂木や横木のような部位に用いられる木材は、強度や耐朽性も必要であるが、大きさ（径・長さ）や形状も重要な選択基準であったことが推定される。必要とする条件を満たしていれば、クヌギ節以外にも使用された木材があったことが考えられる。今回調査した住居跡でもクヌギ節・コナラ節以外にも使用された木材があった可能性もあるが、今回の結果からは断定できない。焼失住居跡から出土する炭化材は、火災とその後の埋積過程を経て残存したものであり、当時の組成を正確に反映しているとは限らない。このような住居跡の調査を行う際には、出土した炭化材について可能な限り多くの点数を調査することが必要である。

#### <引用文献>

平井信二（1979）木の辞典 第2巻，かなえ書房。

北村四郎・村田源（1979）原色日本植物図鑑 木本編<II>．545p.，保育社

パリノ・サーヴェイ株式会社（1986 a）奥山A遺跡出土試料炭化材同定報告．茨城県教育財団分  
財調査報告書第31集「水海道都市計画事業・内守谷土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告2  
奥山A遺跡・奥山C遺跡・西原遺跡」， p.239－340，財団法人茨城県教育財団。

パリノ・サーヴェイ株式会社（1986 b）西原遺跡出土試料種子及び材同定報告．茨城県教育財団分  
財調査報告書第31集「水海道都市計画事業・内守谷土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告  
2 奥山A遺跡・奥山C遺跡・西原遺跡」， p.241－243，財団法人茨城県教育財団。

千野裕道（1991）縄文時代に二次林はあったか－遺跡出土の植物性遺物からの検討－．東京都埋  
蔵文化財センター研究論集X， p.215－249。

# 写 真 図 版

姥ヶ谷津遺跡  
南 開 遺 跡



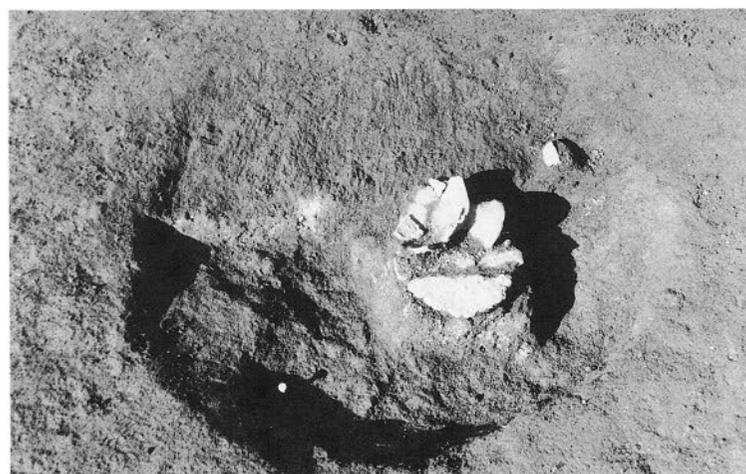
姥ヶ谷津遺跡調査終了後全景



第1号住居跡

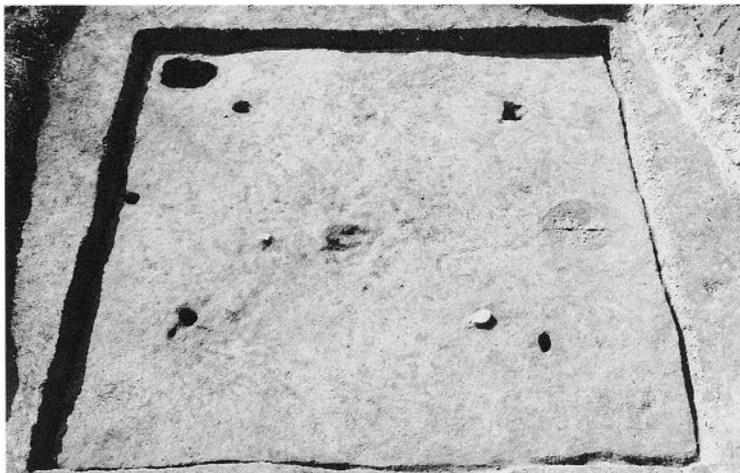


第1号住居跡遺物出土状況

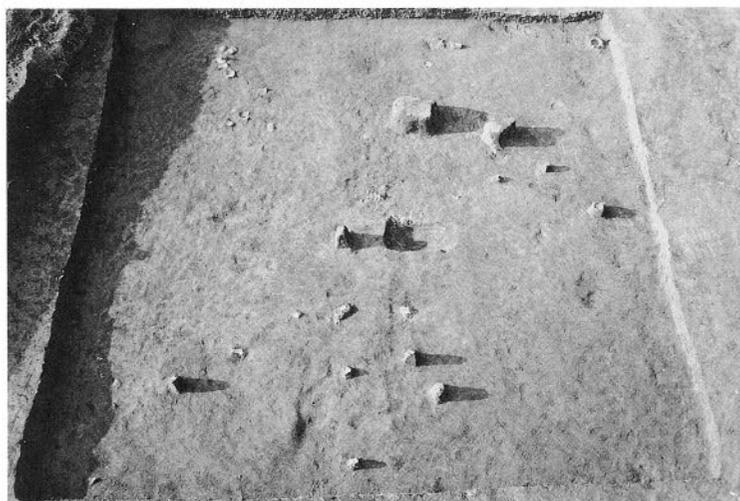


第1号住居跡遺物出土状況

第2号住居跡



第2号住居跡遺物出土状況



第3号住居跡

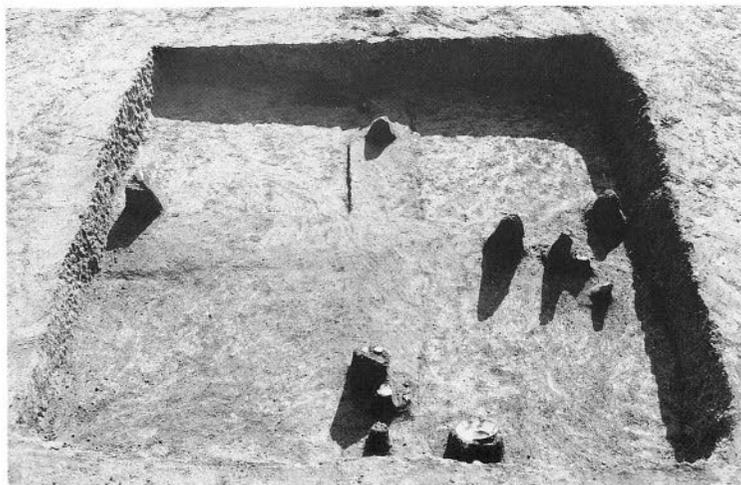




第3号住居跡遺物出土状況



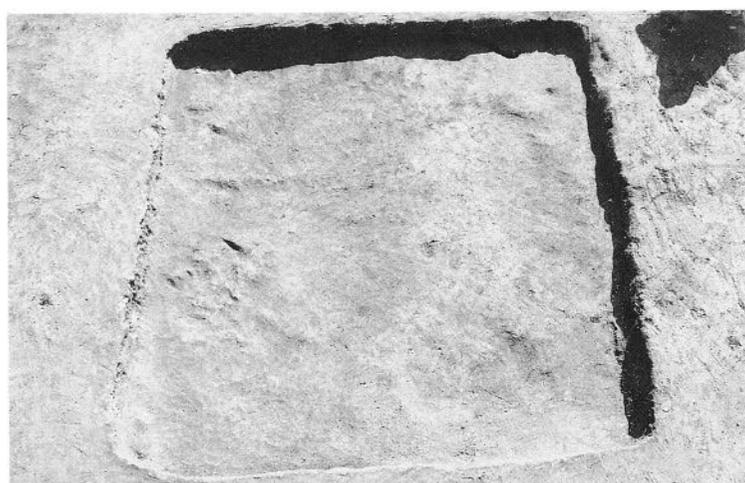
第4号住居跡



第4号住居跡遺物出土状況



第4号住居跡遺物出土状況



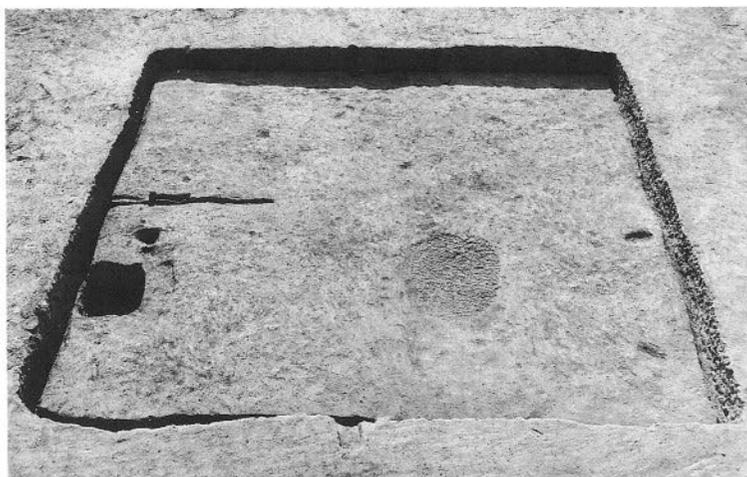
第5号住居跡



第5号住居跡遺物出土状況



第6号住居跡

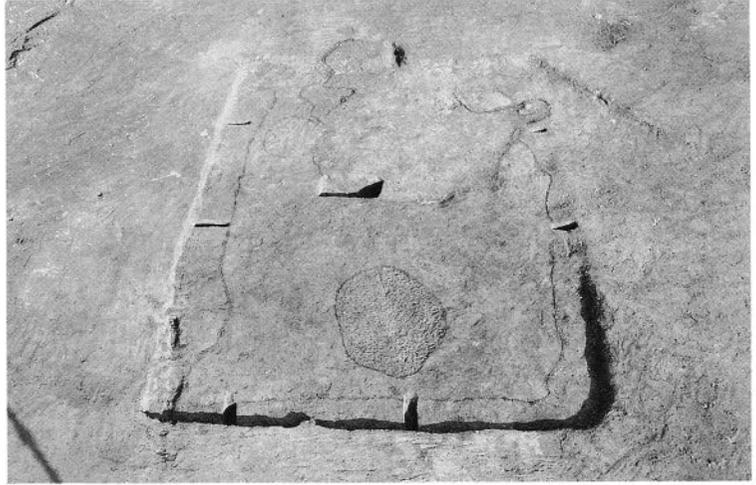


第7号住居跡



第7号住居跡遺物出土状況

第 8 号住居跡



第 8 号住居跡遺物出土状況



第 9 号住居跡遺物出土状況





第10号住居跡



第11号住居跡



第11号住居跡遺物出土状況

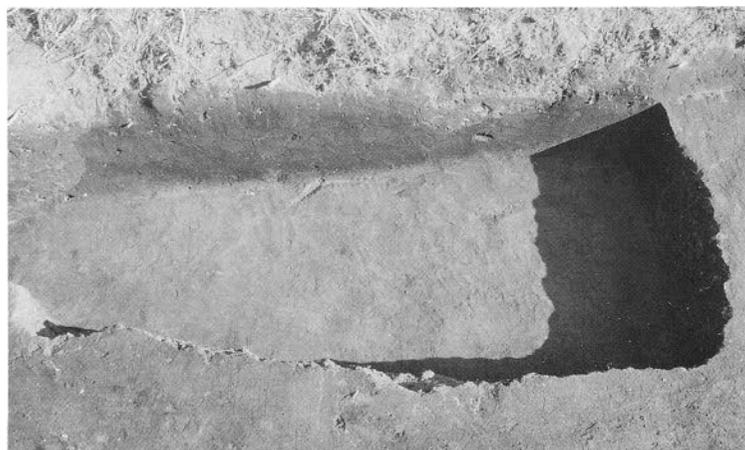
第12号住居跡

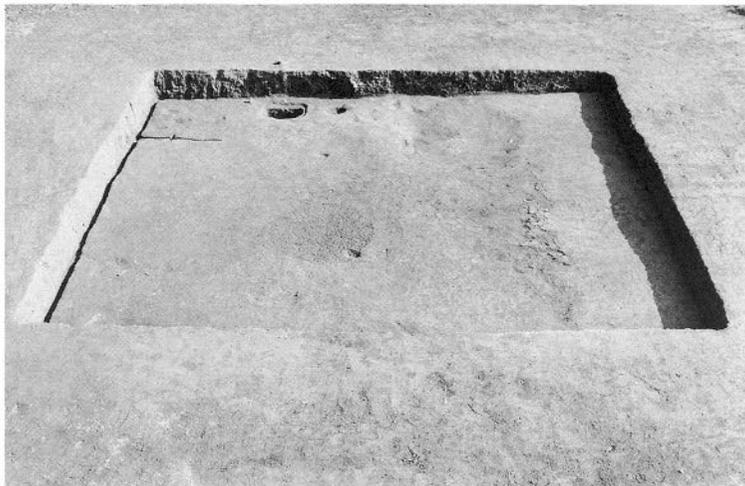


第12号住居跡遺物出土状況



第13号住居跡

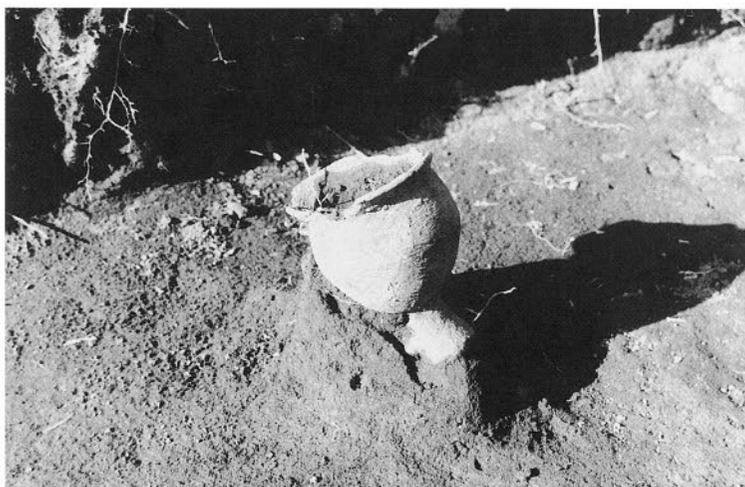




第14号住居跡



第14号住居跡遺物出土状況



第14号住居跡遺物出土状況

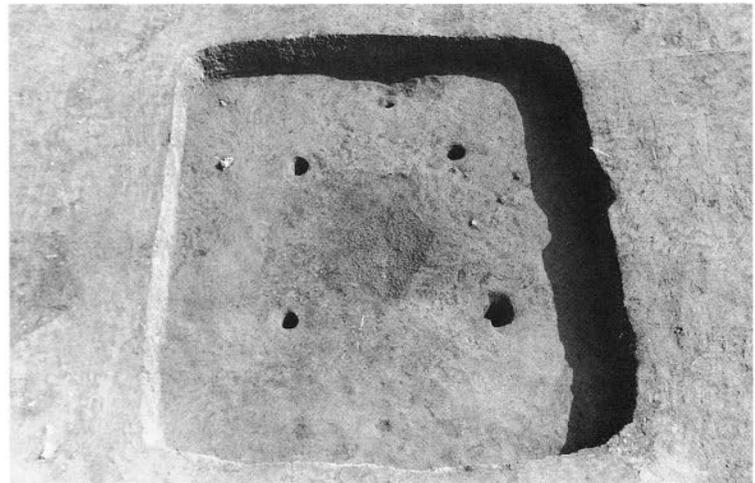
第14号住居跡遺物出土状況

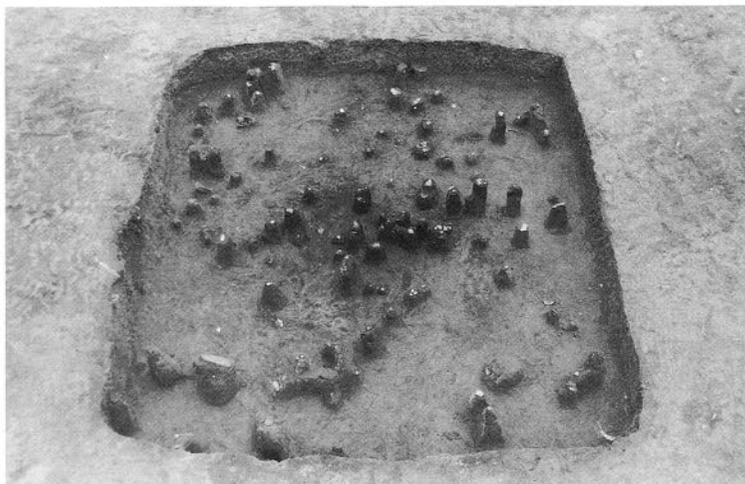


第15号住居跡



第16号住居跡





第16号住居跡遺物出土状況



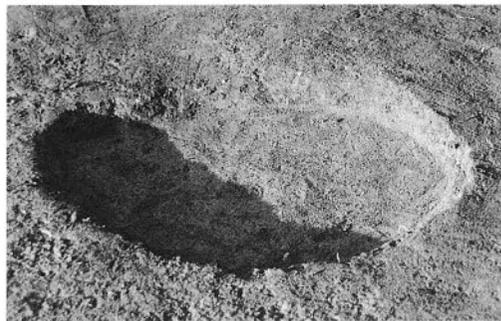
第16号住居跡遺物出土状況



第17号住居跡



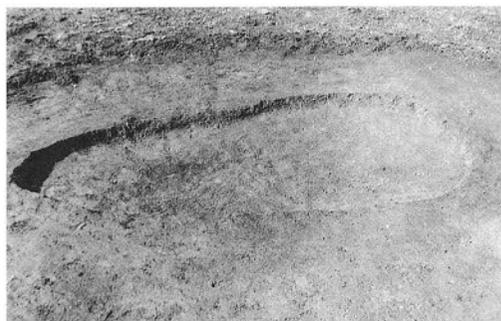
第2号土坑



第6号土坑



第3号土坑



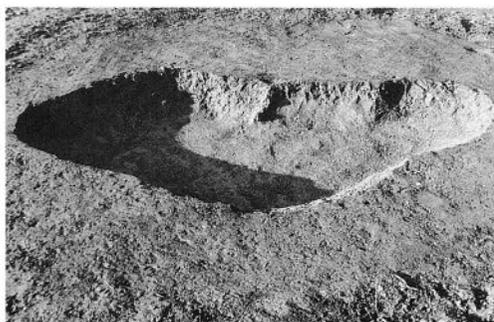
第7号土坑



第4号土坑



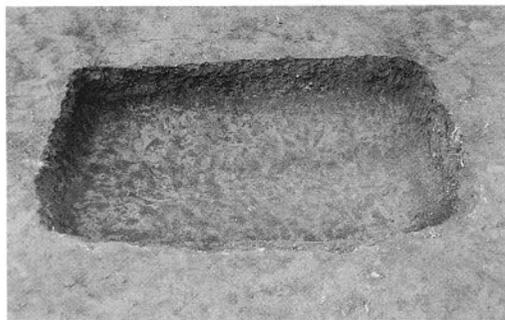
第30号土坑



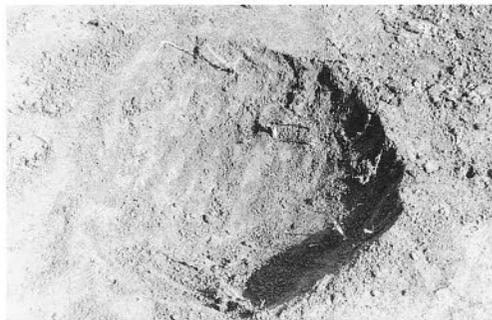
第5号土坑



第50号土坑



第52号土坑



第70号土坑



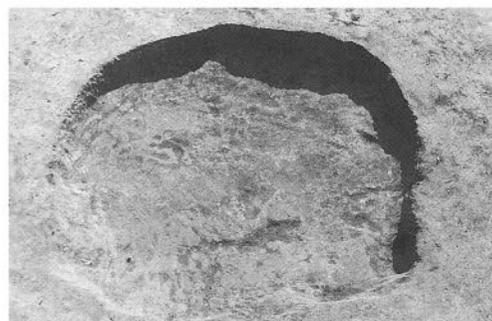
第66号土坑



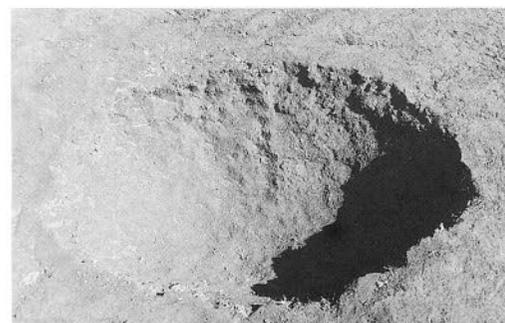
第72号土坑



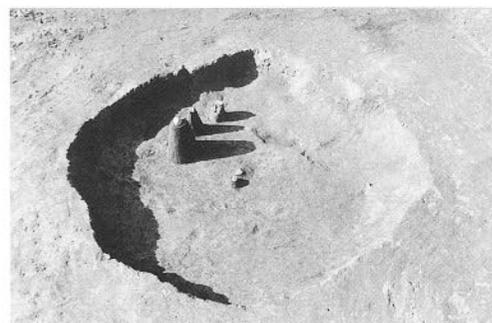
第67号土坑



第73号土坑



第68号土坑



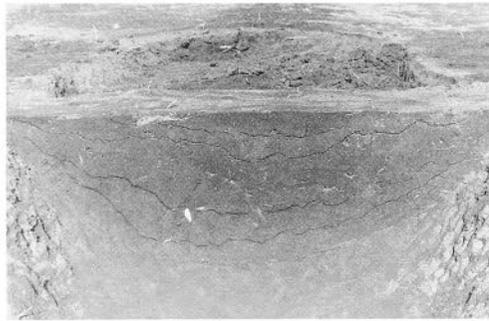
第73号土坑遺物出土状況



第1号溝



第2号塚土層断面



第1号構土層断面



第3号塚トレンチ



第2号塚



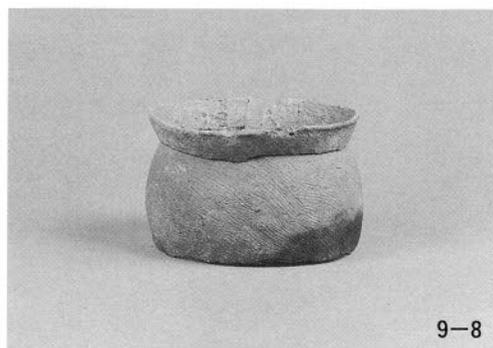
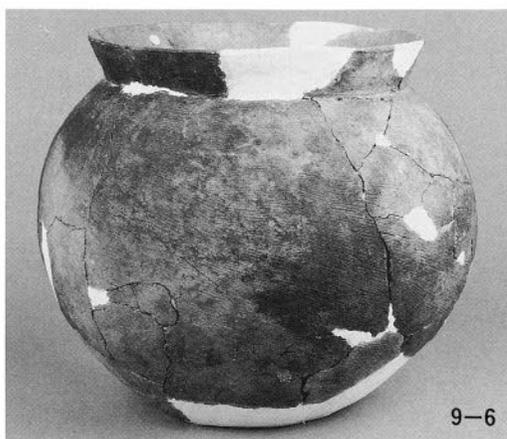
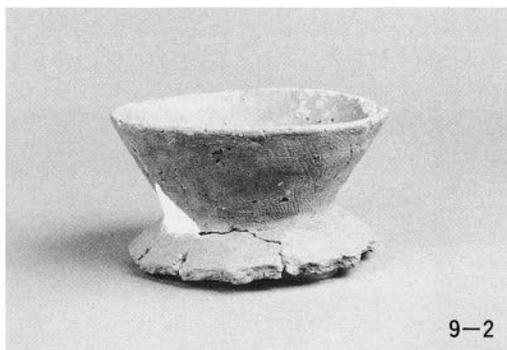
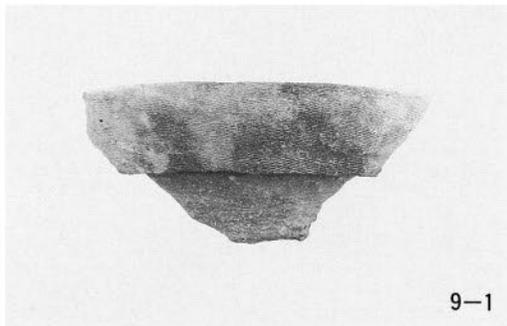
第3号塚トレンチ



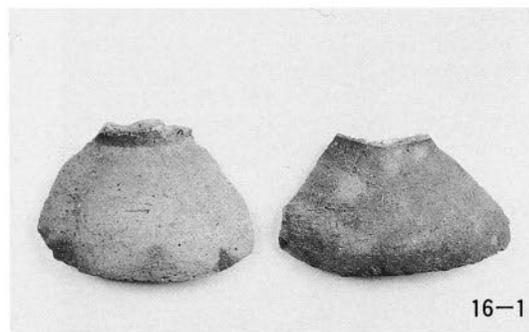
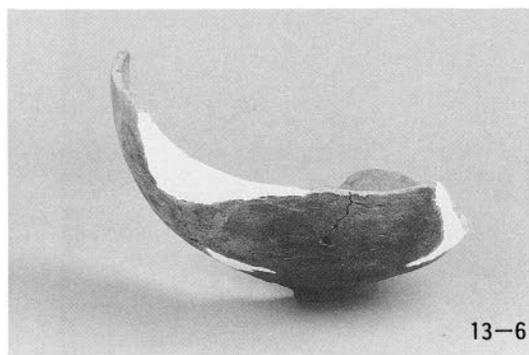
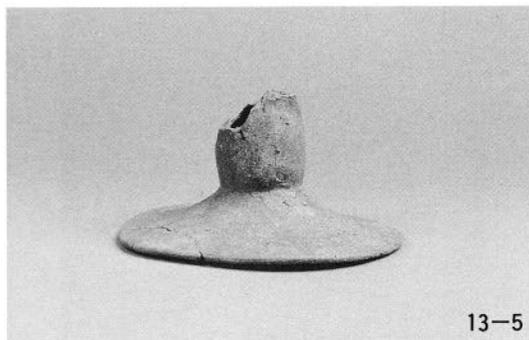
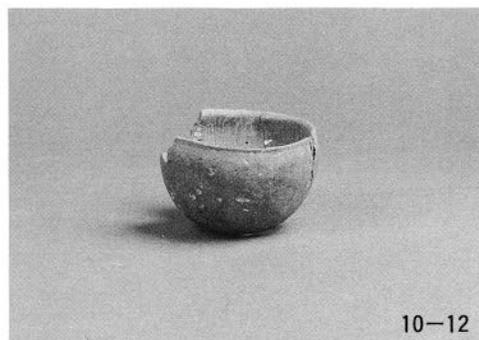
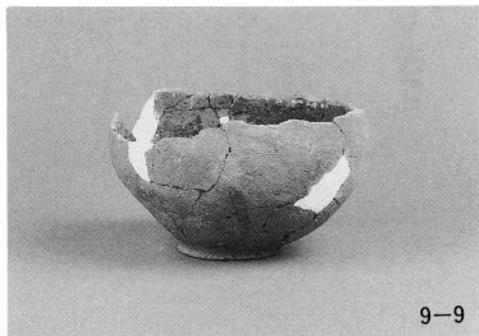
第1号塚土層断面



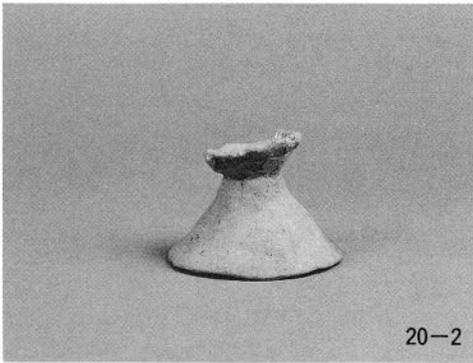
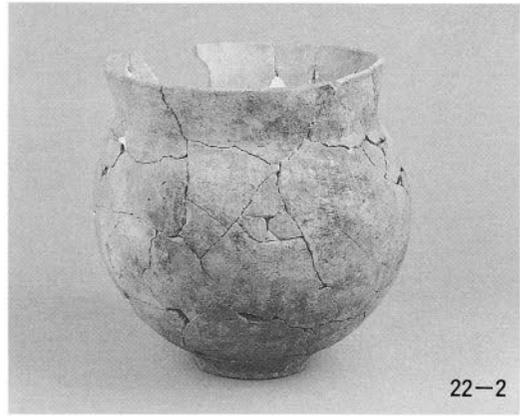
第3号塚遺物出土状況

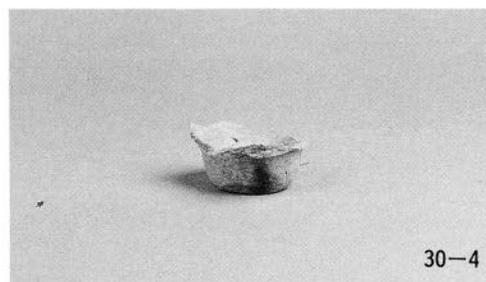
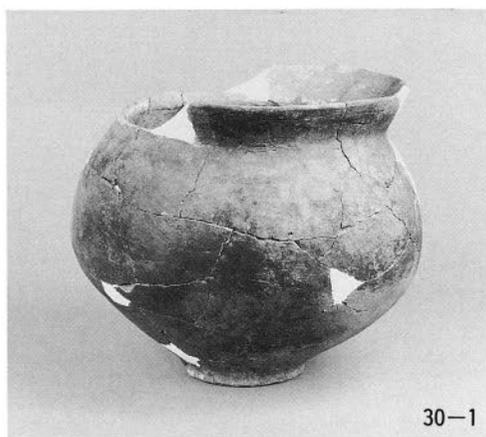
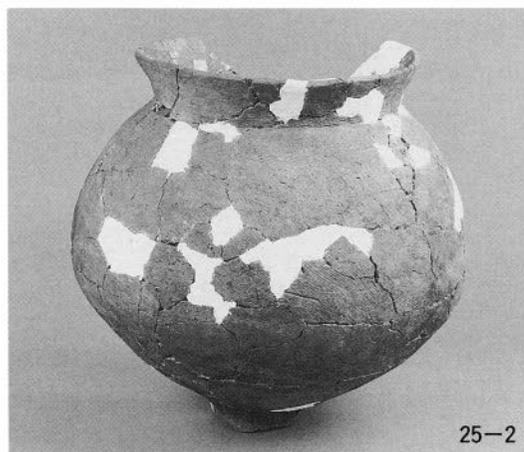
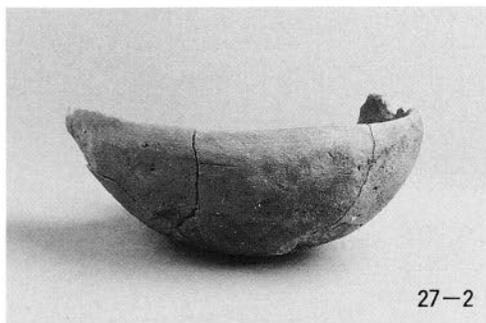


第1号住居跡出土土器

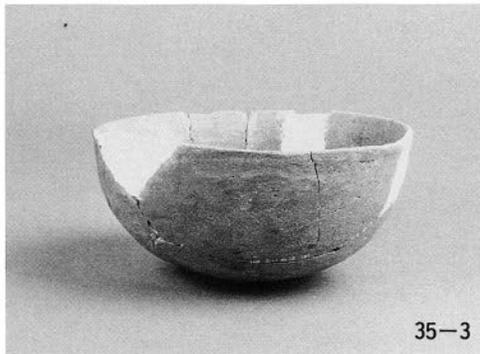
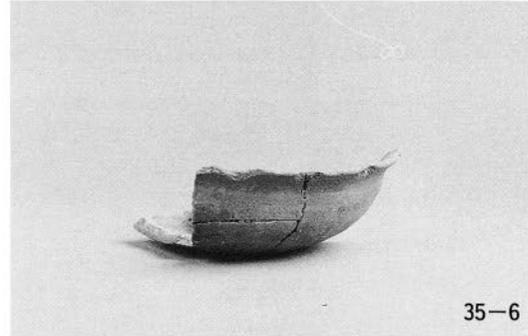
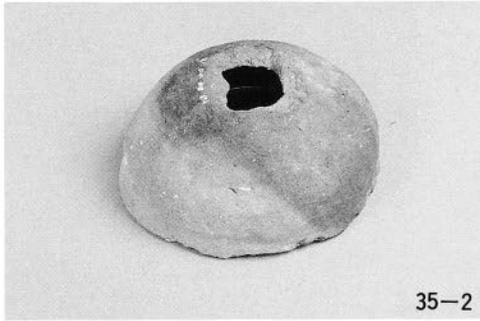
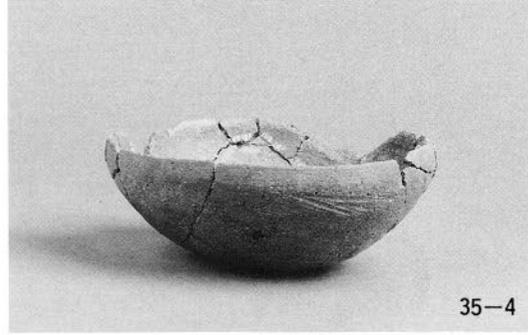


第1・2・3号住居跡出土土器

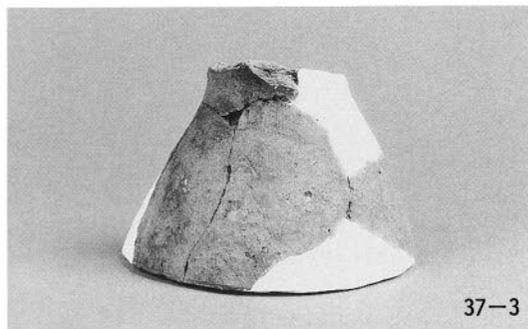
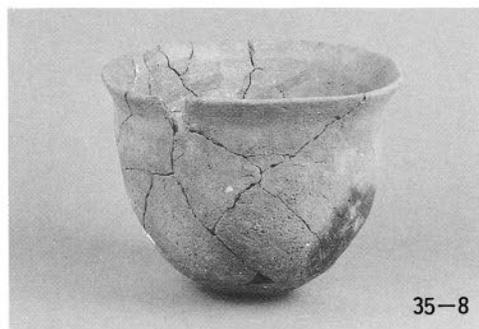




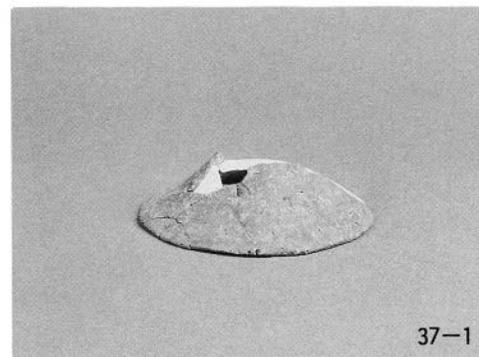
第7・8・9号住居跡出土土器

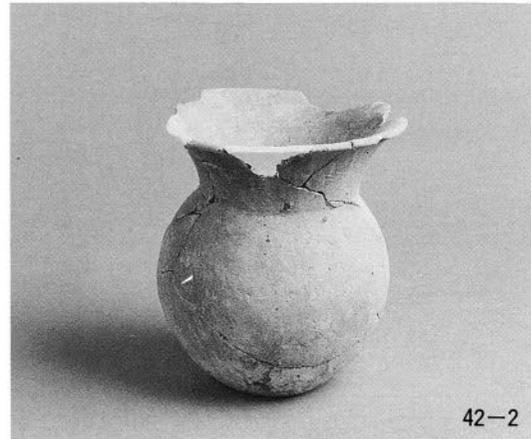
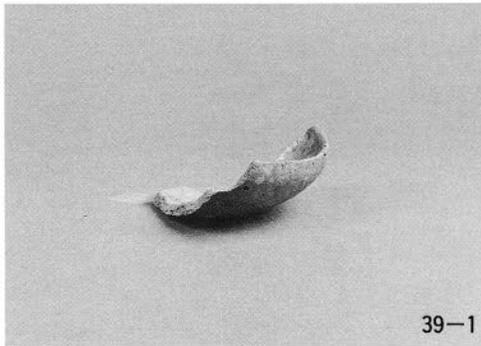
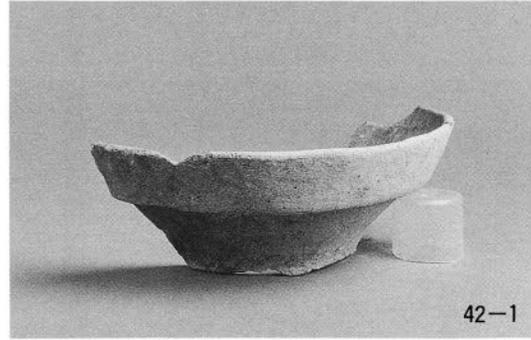
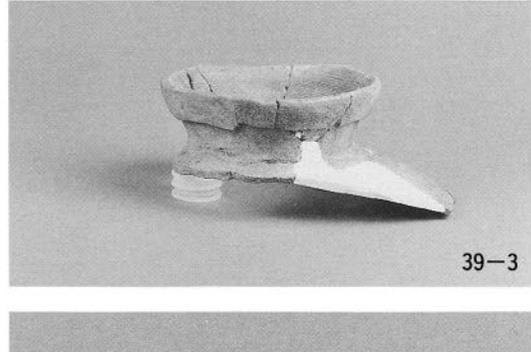
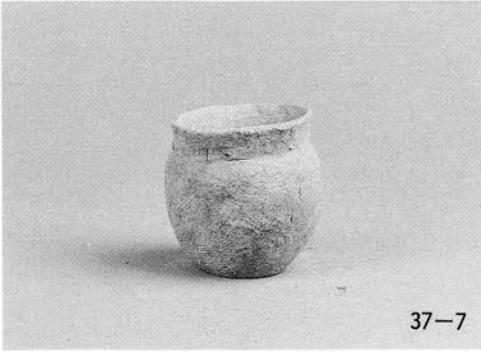
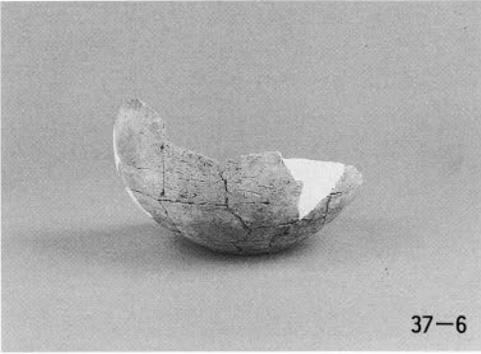


第11号住居跡出土土器

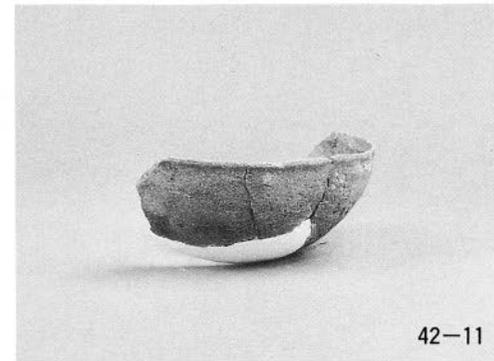
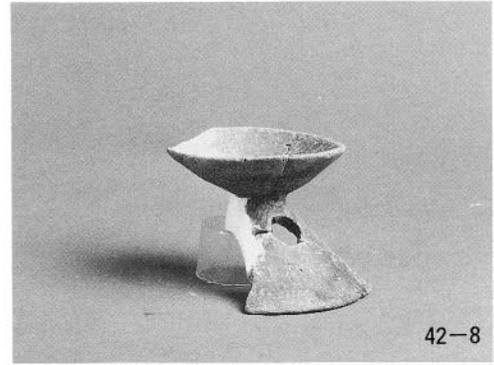
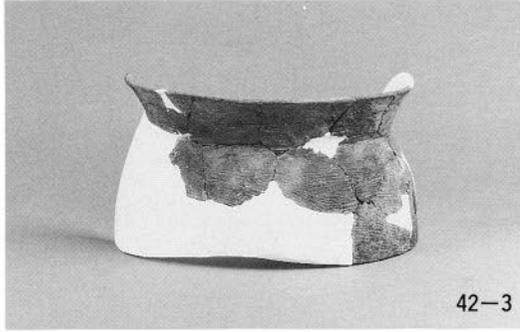


|

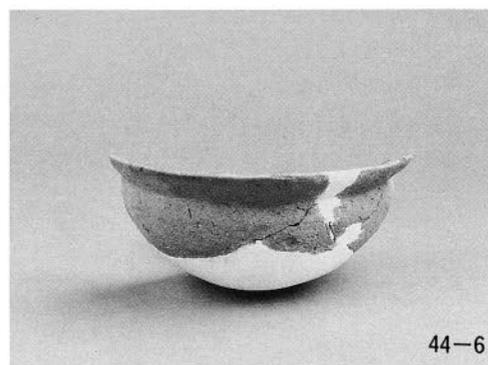
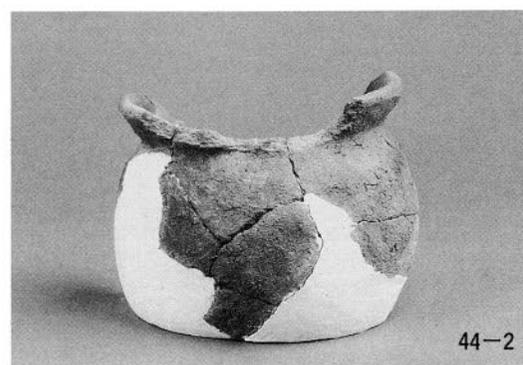
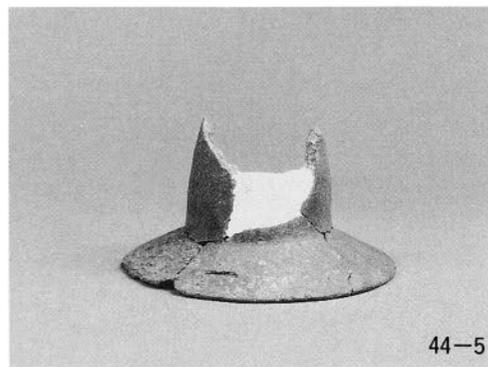
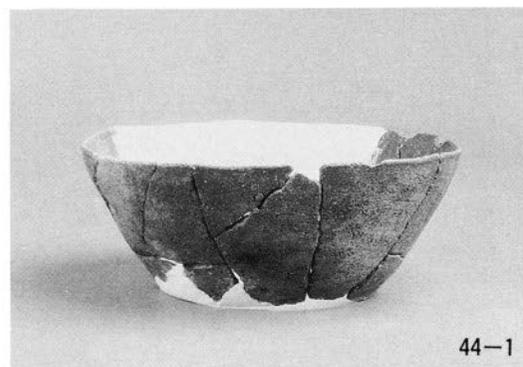
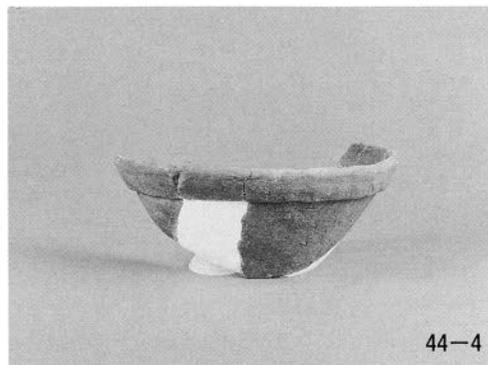
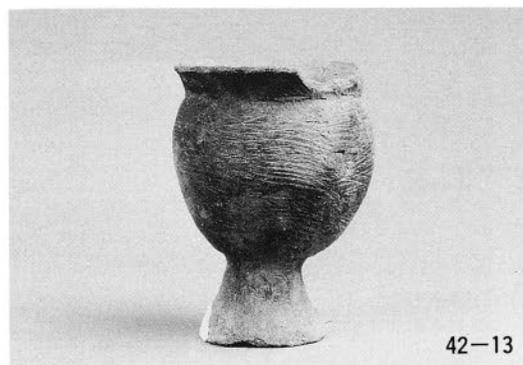
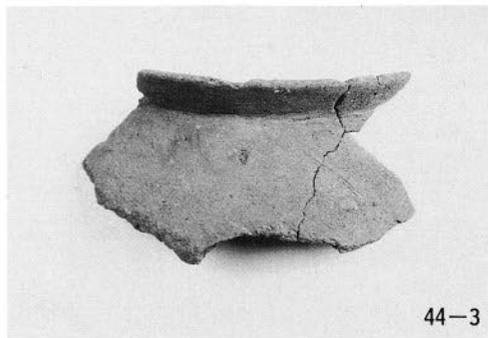
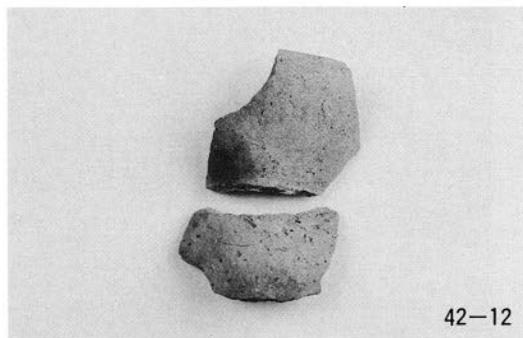


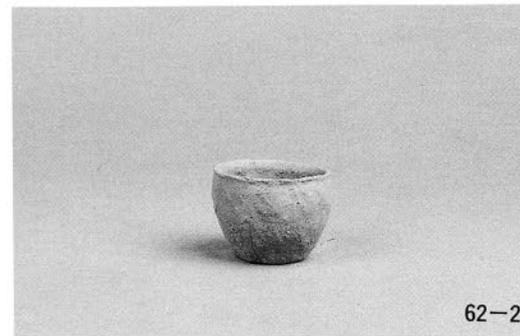
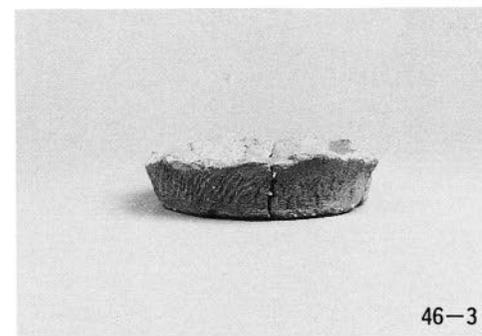
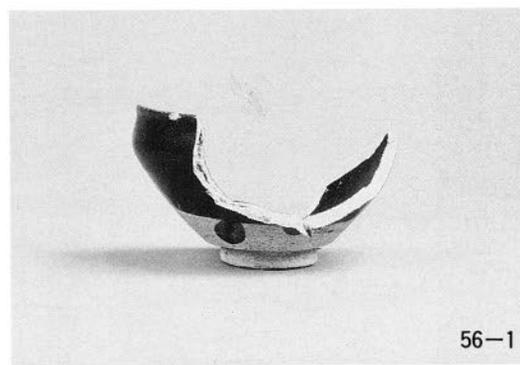
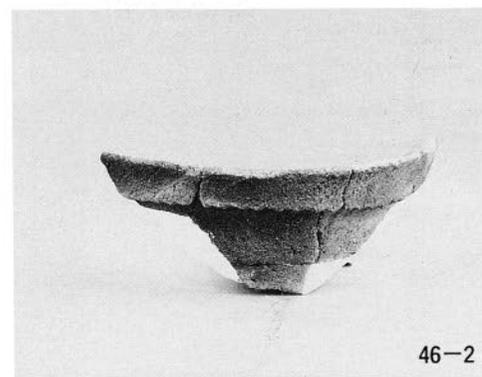
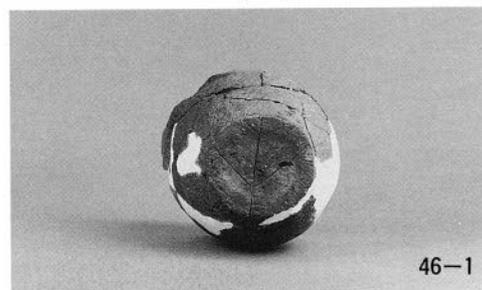
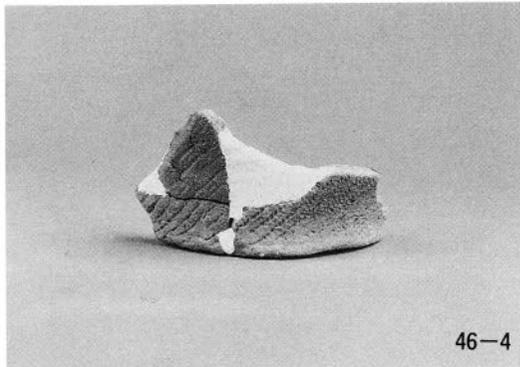
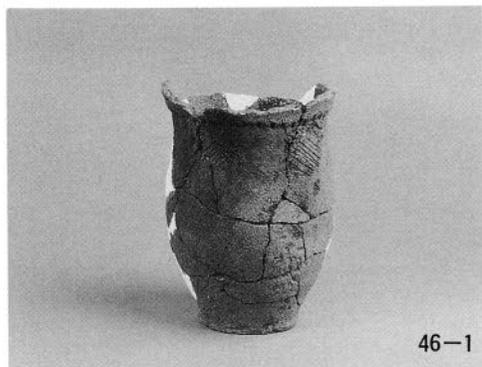


第12・13・14号住居跡出土土器

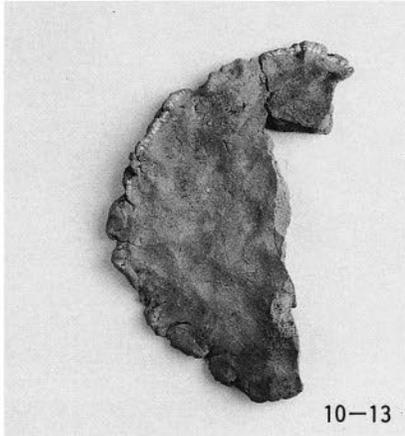


第14号住居跡出土土器

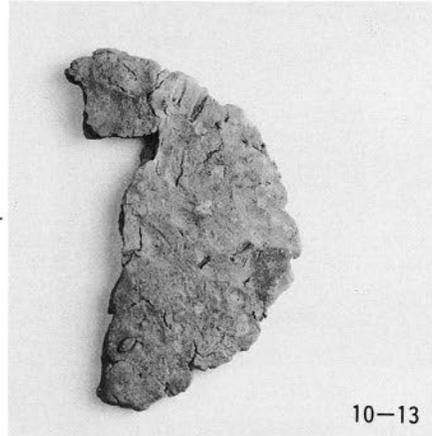




第16号住居跡出土土器，第68号土坑出土土器，第3号塚出土土器，遺構外出土土器

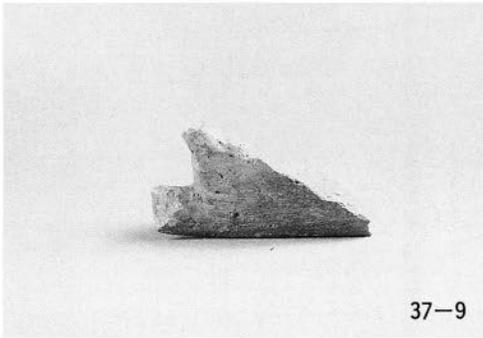


10-13

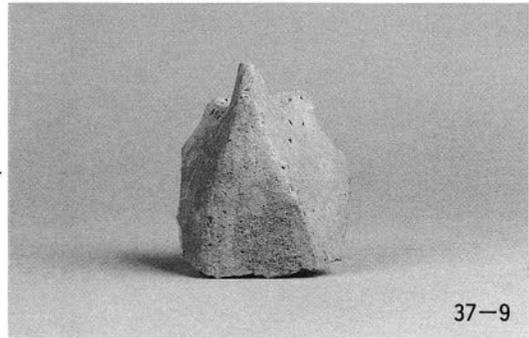


10-13

第1号住居跡出土土製品



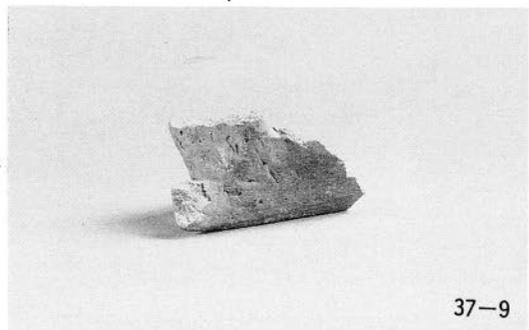
37-9



37-9

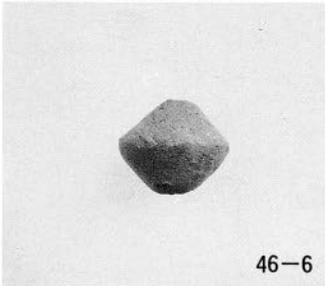


37-9

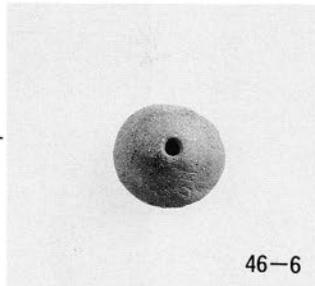


37-9

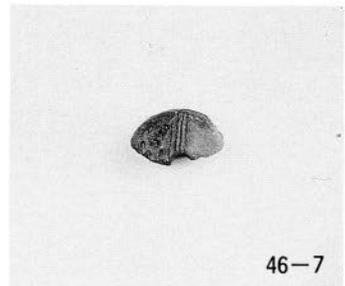
第12号住居跡出土土製品



46-6

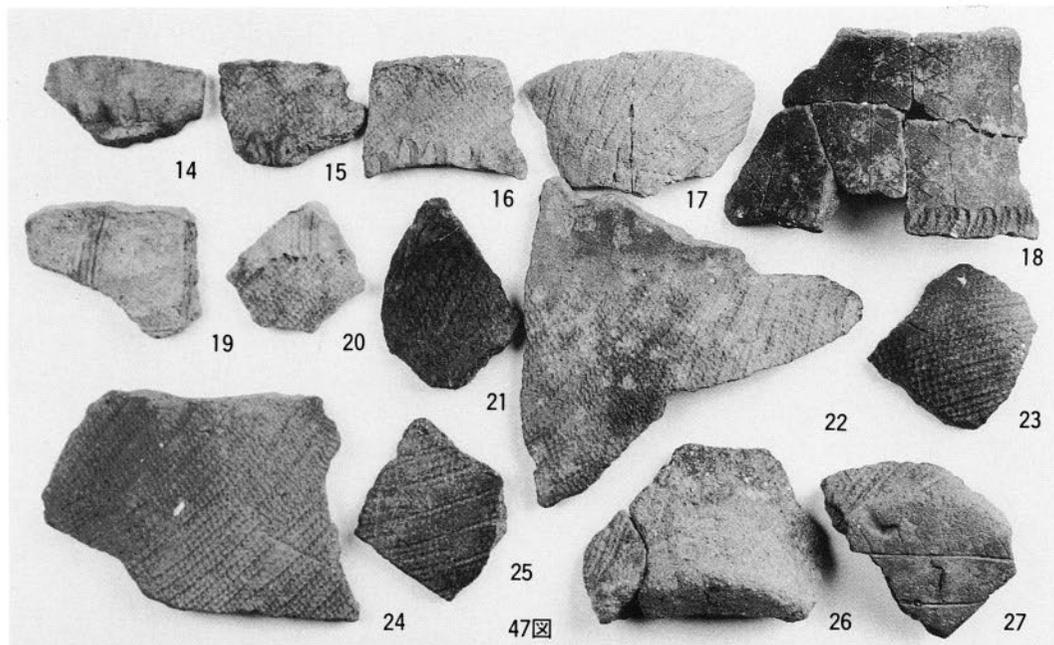


46-6

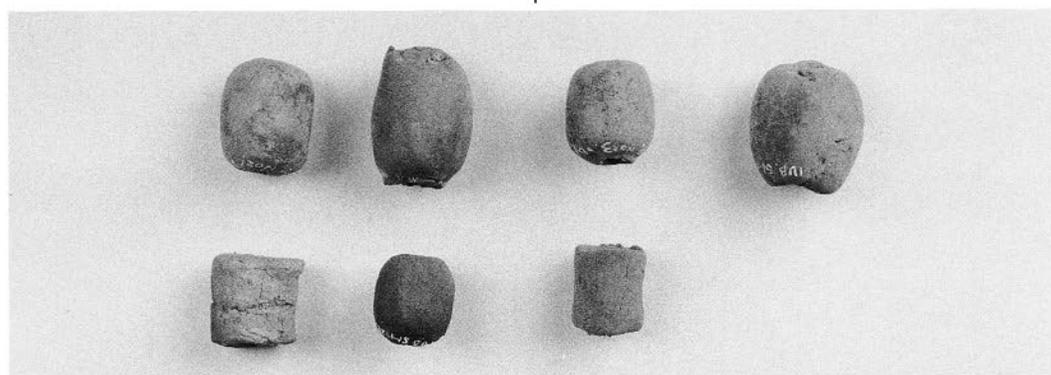
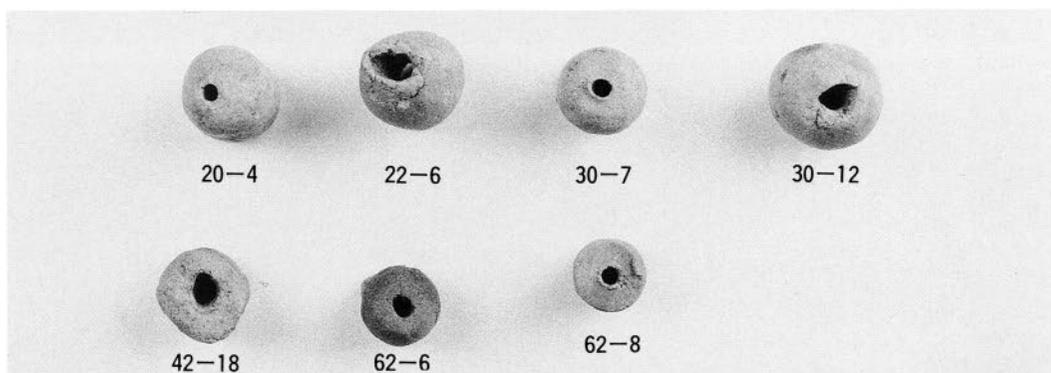


46-7

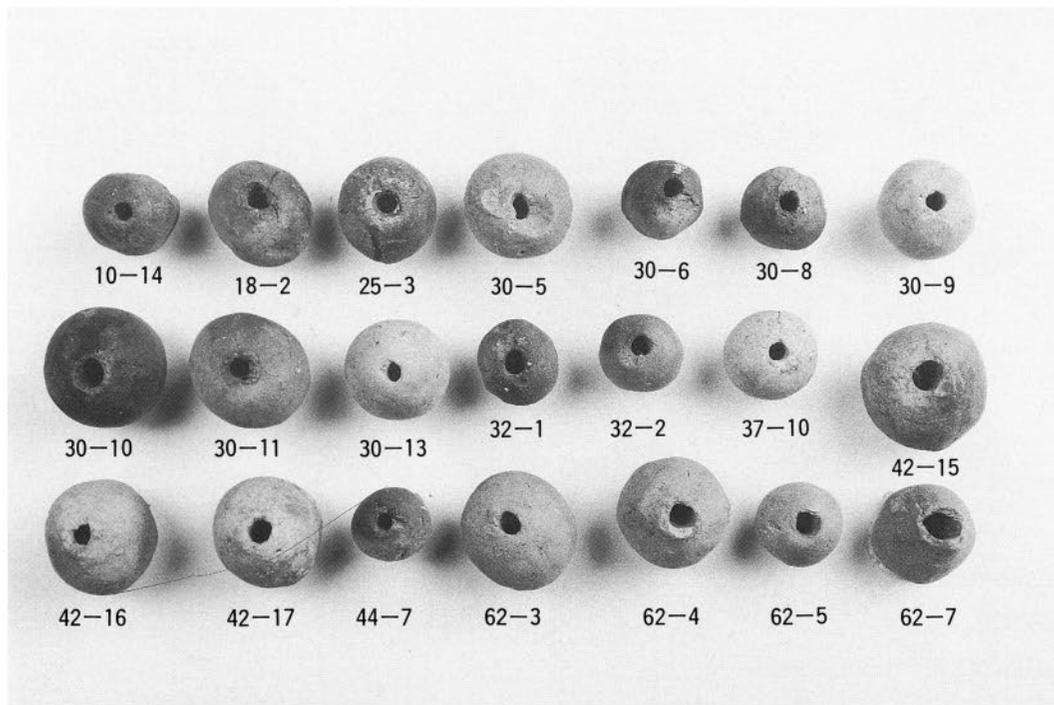
第16号住居跡出土土製品



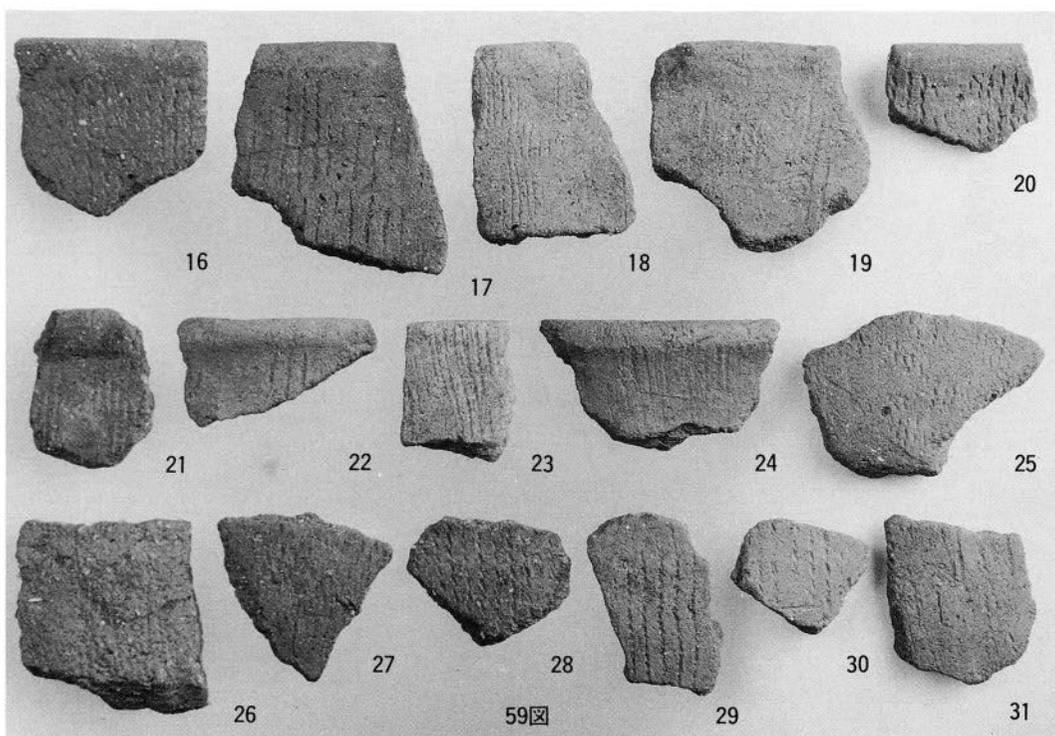
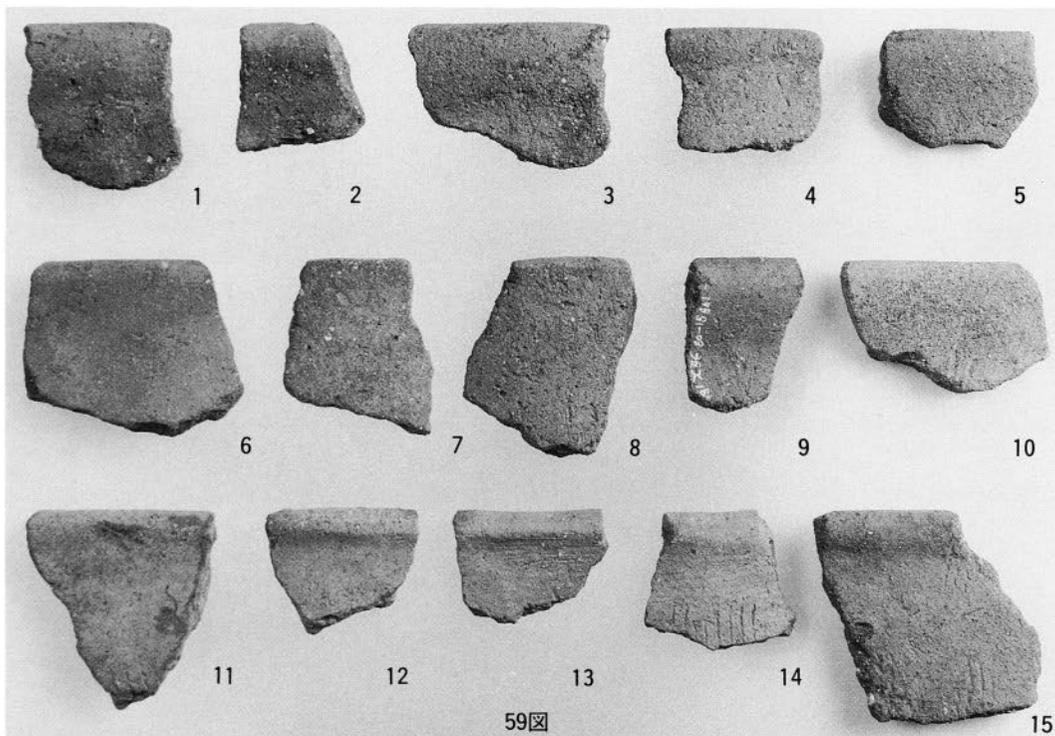
第16号住居跡出土弥生式土器片



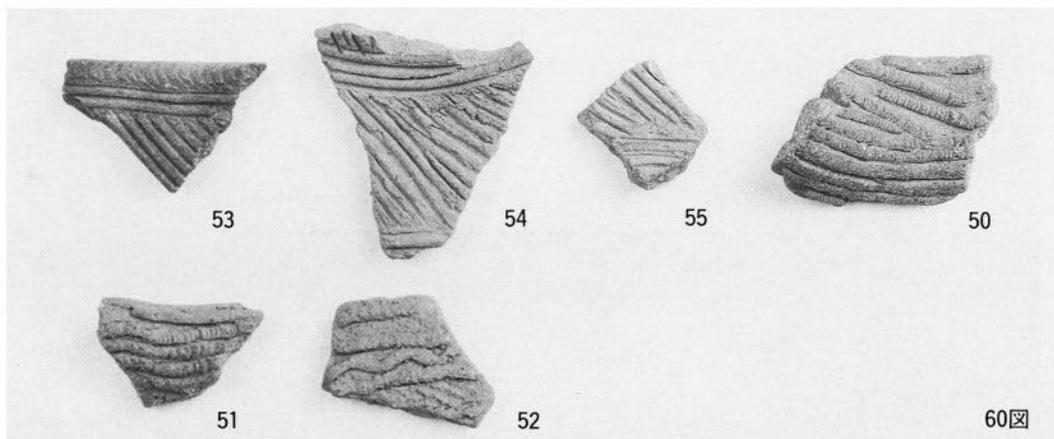
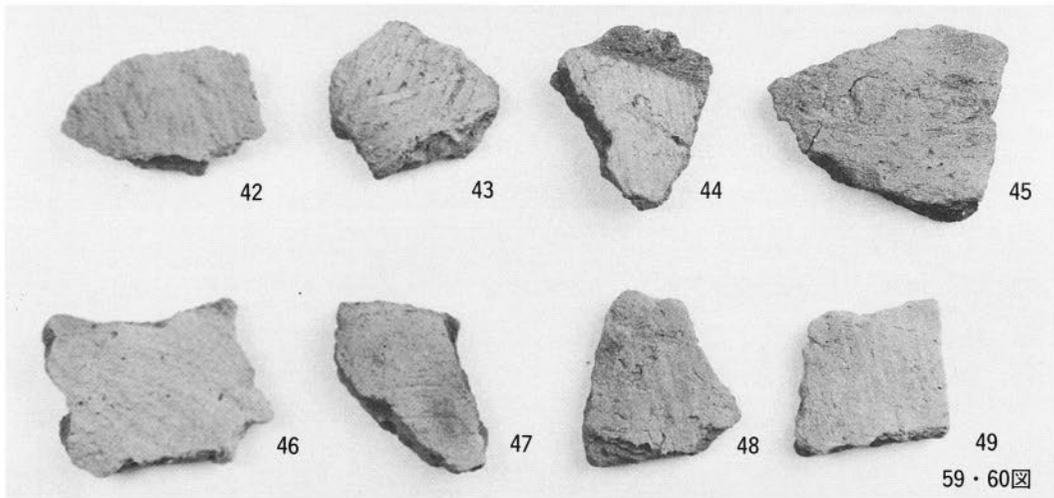
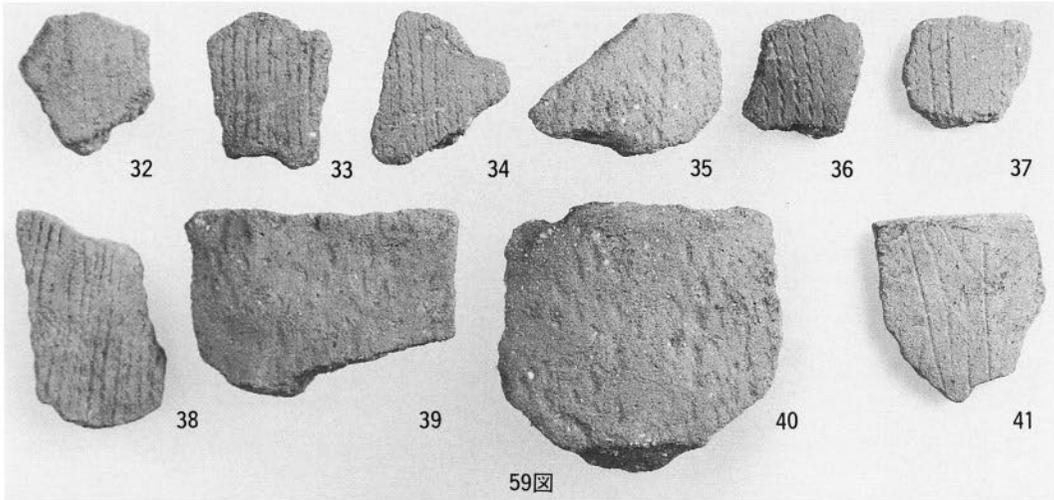
第5・6・9・14号住居跡・遺構外出土土製品



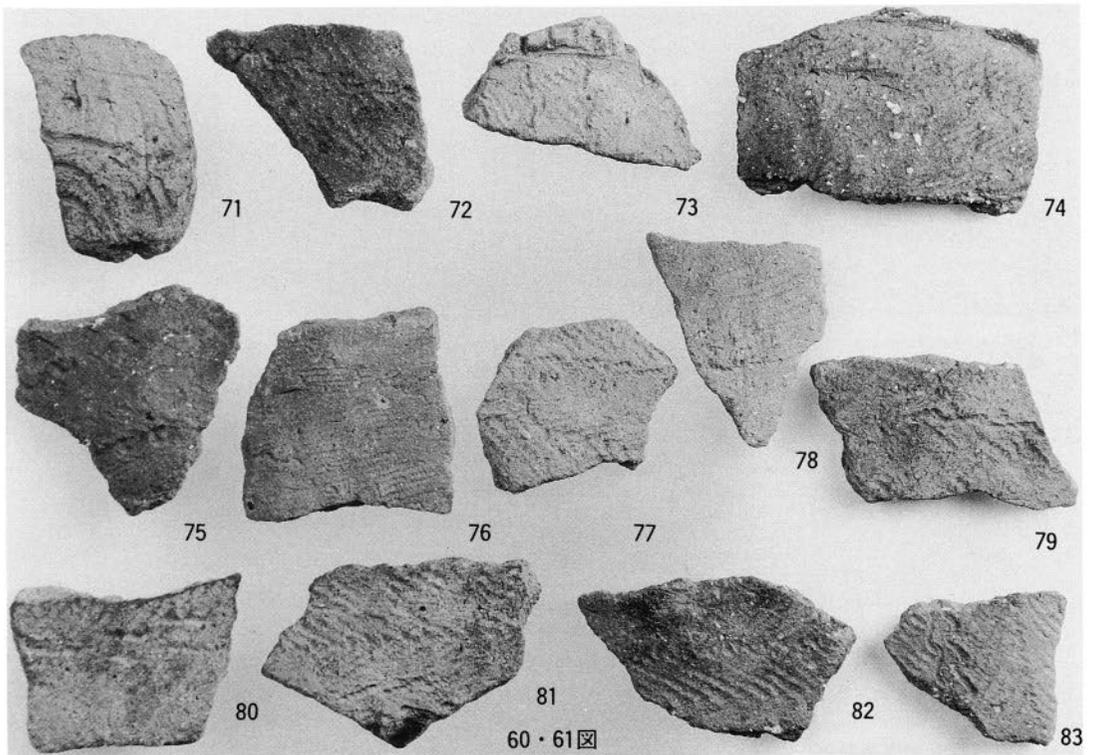
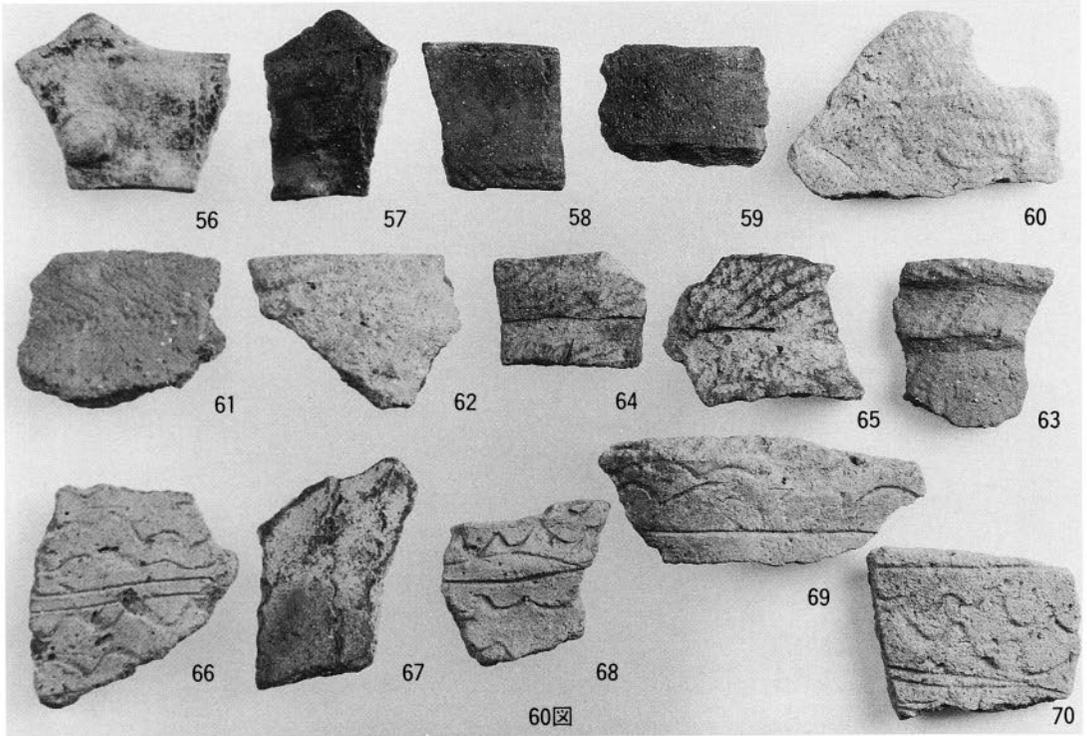
第1・4・7・9・10・12・14・15号住居跡・遺構外出土土製品



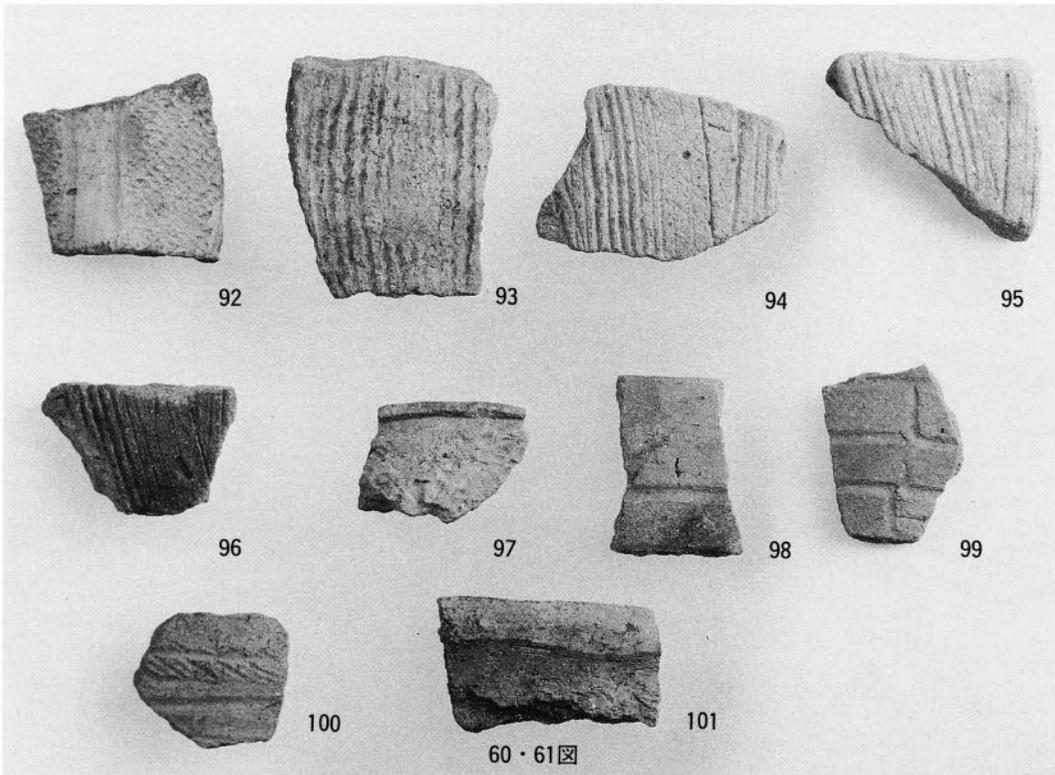
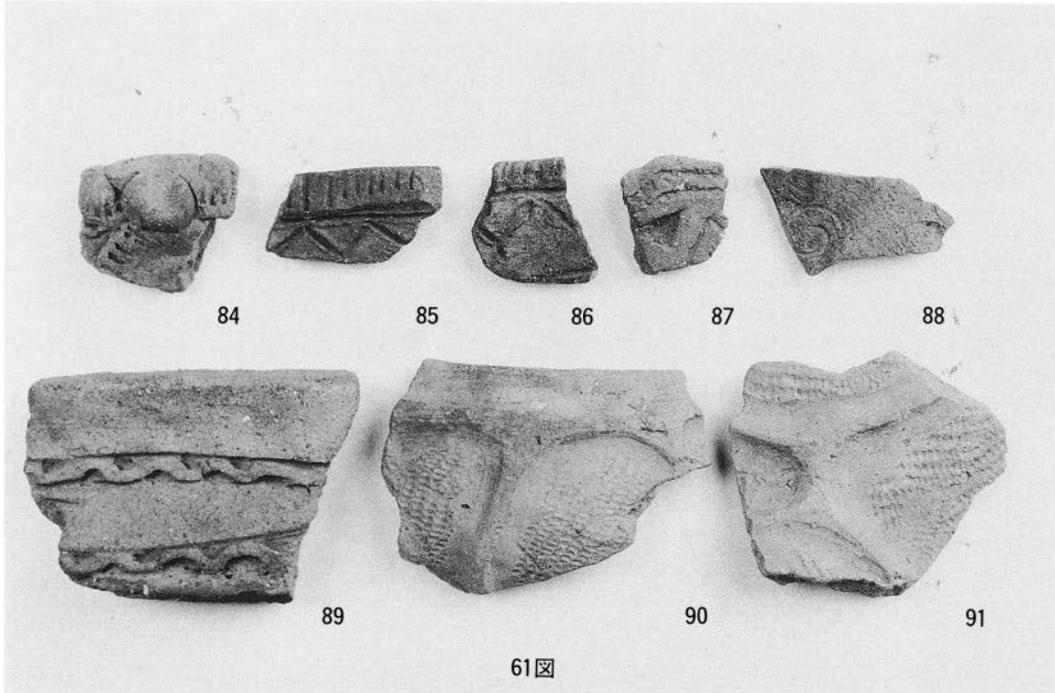
遺構外出土縄文式土器片(1)



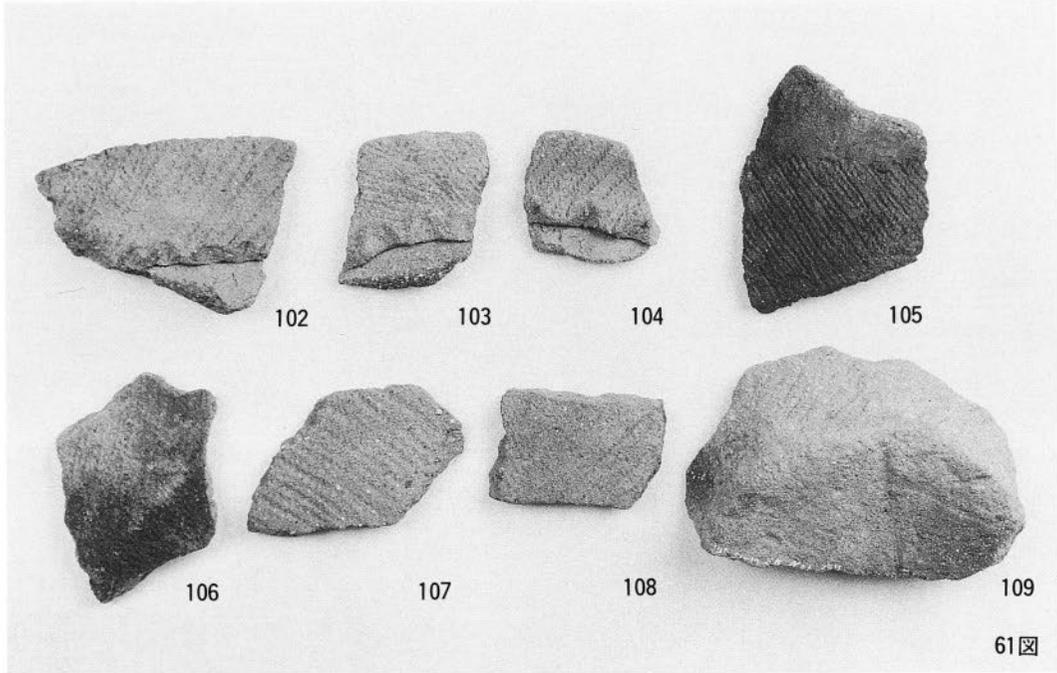
遺構外出土縄文式土器片(2)



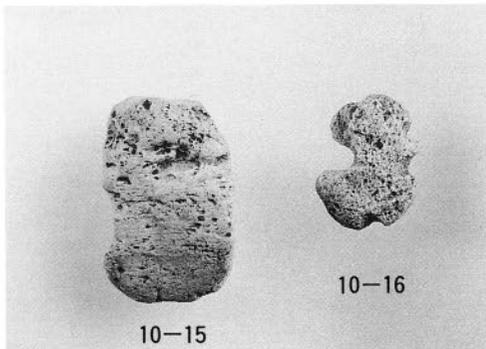
遺構外出土縄文式土器片(3)



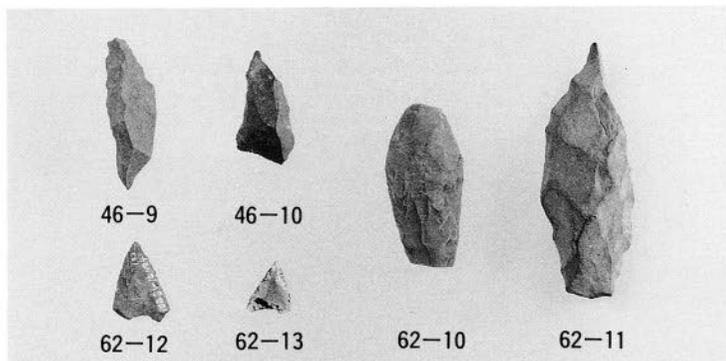
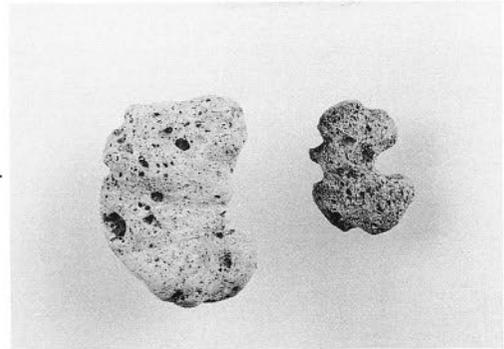
遺構外出土縄文式土器片(4)



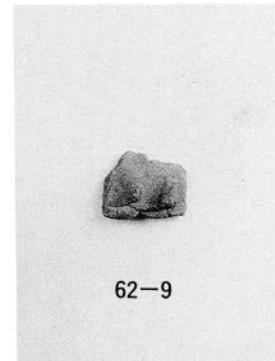
遺構外出土弥生式土器片



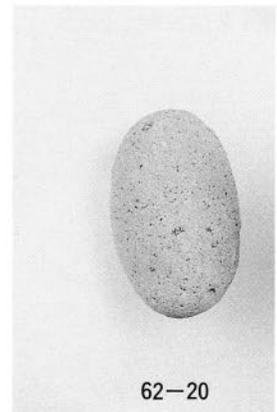
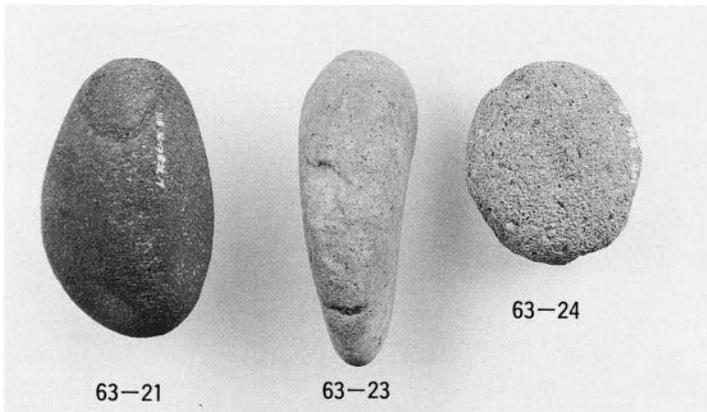
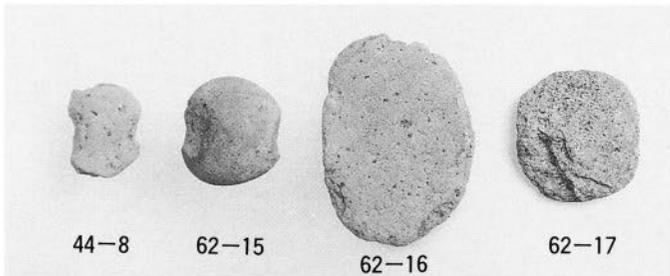
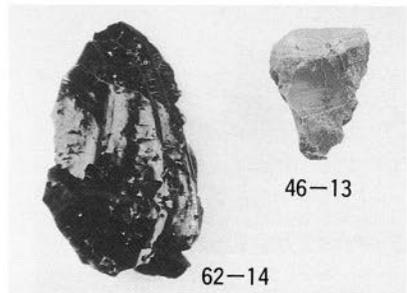
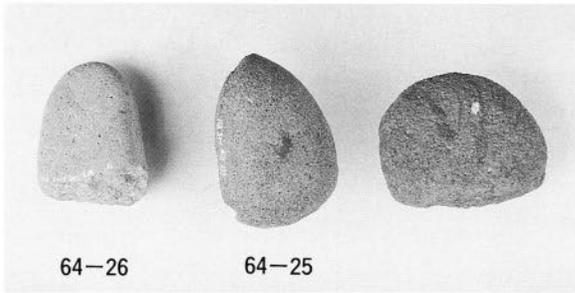
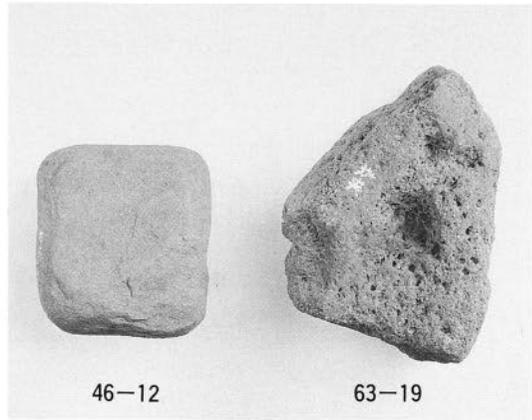
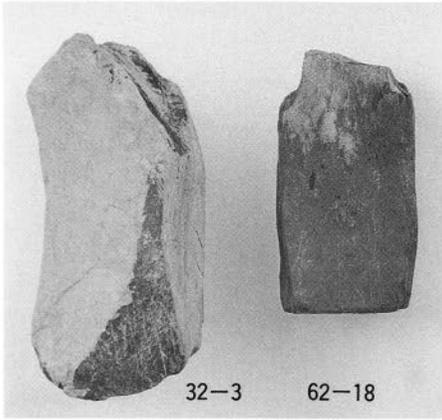
第1号住居跡出土石器

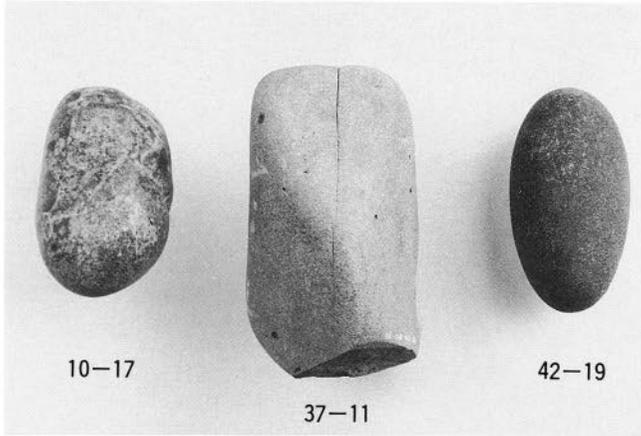


第16号住居跡・遺構外出土石器

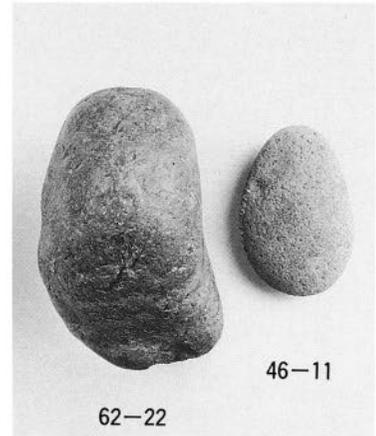


遺構外出土土製品





第1・12・14号住居跡出土石器



第16号住居跡・遺構外出土石器



姥ヶ谷津遺跡出土器台



姥ヶ谷津遺跡出土ミニチュア土器



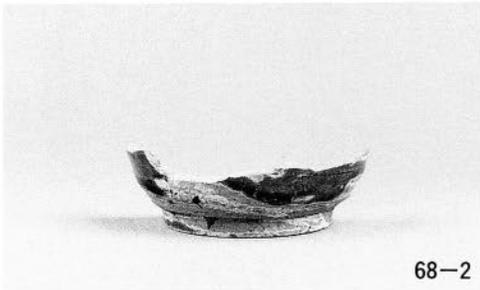
第14号住居跡出土土器



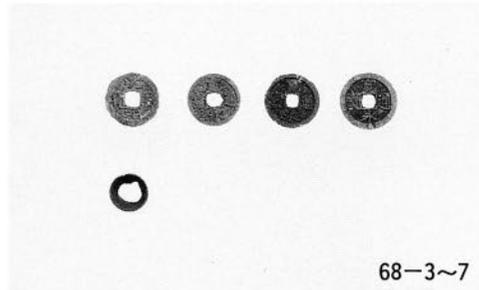
南開遺跡全景



68-1



68-2



68-3~7

第1号塚出土遺物



第1号塚調査前全景



第1号塚調査後全景



第1号塚盛土土層断面



第1号塚盛土土層断面



第1号塚盛土土層断面



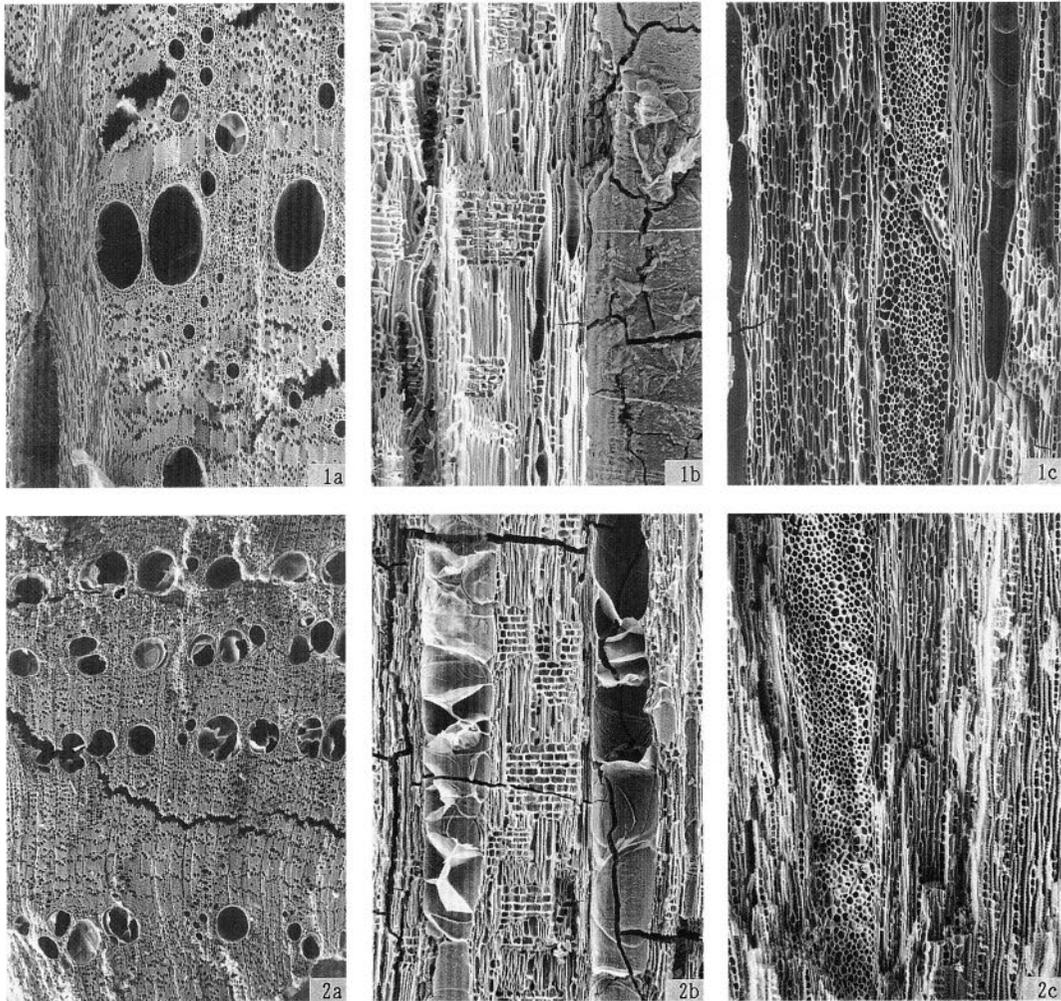
第1号塚6 トレンチ



第1号塚遺物出土状況



第1号塚遺物出土状況



1. コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種 (SI-1 炭化材)
  2. コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種 (第12号住居跡炭化材No.2)
- a : 木口, b : 征目, c : 板目

200 $\mu$ m : a  
 200 $\mu$ m : b, c

付章 姥ヶ谷遺跡・炭化材の顕微鏡写真

茨城県教育財団文化財調査報告第89集  
岩井幸田工業団地造成事業  
地内埋蔵文化財調査報告書

姥ヶ谷津遺跡  
南開遺跡

平成6年3月25日 印刷  
平成6年3月31日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団  
水戸市見和1丁目356番2号  
TEL 0292-25-6587

印刷 ワタヒキ印刷株式会社  
TEL 0292-21-4381

